

原本記載の注釈をこのウェブサイトで公開しています。URLは原本記載のものをそのまま掲載しているため、現在使われていないものもあります。ご了承ください。

注釈は、該当箇所を記載の本文ページより抜き出してあります。()でくくったものは、要約です。

【注釈訳・福井昌子】

注記

他に断りがない限り、以下の発行物や報道機関を参照したものは各ネットに掲載されたものである。*American Prospect* 『アメリカン・プロスペクト』、Associated Press“AP通信社”、*Boston Globe* 『ボストン・グローブ』紙、*Chicago Tribune* 『シカゴ・トリビューン』紙、*Christian Science Monitor* 『クリスチャン・サイエンス・モニター』紙、*Forward* 『フォワード』誌、*Guardian* 『ガーディアン』紙、*Ha'aretz* 『ハアレツ』紙、*Independent* 『インディペンデント』紙、*International Herald Tribune* 『インターナショナル・ヘラルド・トリビューン』紙、Inter Press Service「インター・プレス通信社」、*Jerusalem Post* 『エルサレム・ポスト』紙、*Jewish Week* 『ジューイッシュ・ウィーク』誌、*Los Angeles Times* 『ロサンゼルス・タイムズ』紙、*Nation* 『ネイション』誌、*New York Review of Books* 『ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス』誌、*New York Sun* 『ニューヨーク・サン』紙、*New York Times* 『ニューヨーク・タイムズ』紙、Reuters「ロイター通信社」、*Times* 『タイムズ』紙(ロンドン)、*Wall Street Journal* 『ウォールストリート・ジャーナル』紙、*Washington Post* 『ワシントン・ポスト』紙、*Washington Times* 『ワシントン・タイムズ』紙、*Weekly Standard* 『ウィークリー・スタンダード』誌。また、Lexis-Nexis、FACTIVA、JSTORのデジタルアーカイブを使って参照した発行物もある。

はじめに

21ページ ギングリッチは.....述べた

Joshua Mitnick, “Iran Threat Steals Show at Herzliya,” *Jewish Week*, January 26, 2007. 以下も参照のこと。Ron Kampeas, “As Candidates Enter 2008 Race, They Begin Courting Jewish Support,” *JTA.org*, January 25, 2007; Ron Kampeas, “AIPAC Conference—The First Primary?” *JTA.org*, March 6, 2007; Joshua Mitnick, “Candidates Court Israel, Cite Iran Risks,” *Washington Times*, January 24, 2007; and M. J. Rosenberg, “Pandering Not Required,” Weekly Opinion Column, Issue #310, Israel Policy Forum, Washington, DC, February 9, 2007. エドワーズ、ギングリッチ、マケイン、ロムニーのプレゼンテーションの記録は以下で見ることができる。

www.herzliyaconference.org/Eng/_Articles/Article.asp?CategoryID=226&ArticleID=1599

21ページ テロリズムの悪に覆われています

“Senator Clinton’s Remarks to the American Israel Public Affairs Committee (AIPAC),” February 1, 2007,

<http://clinton.senate.gov/news/statements/details.cfm?id=268474>.

Joshua Frank, “Hillary Clinton and the Israel Lobby,” *Antiwar.com*, January 23, 2007; E. J. Kessler, “Hillary the Favorite in Race for Jewish Donations,” *Forward*, January 26, 2007を参照のこと。

21ページ イスラエルを称えたのだ

Thomas Beaumont, “Up-Close Obama Urges Compassion in Mideast,” *Des Moines Register* (online), March 12, 2007; James D. Besser, “Obama Set for Big Jewish Push,” *Jewish Week*, February 16, 2007; Larry Cohler-Esses, “Obama Pivots Away from Dovish Past,” *Jewish Week*, March 9, 2007; and Lynn Sweet, “Obama to Offer Pro-Israel Views at Chicago Gathering,” *Chicago Sun-Times*, March 1, 2007.

21ページ リチャードソンも含まれている

マケイン、クリントン、オバマ、ロムニー、リチャードソン、ブラウンバックによるイスラエル寄りの発言については、“The Road to the White House: Israel-US Ties,” *Jerusalem Post*, May 24, 2007を参照のこと。

25ページ つながっていると考えるのは間違っている

好評を博した歴史書 *Power, Faith, and Fantasy: America in the Middle East 1776 to the Present* (New York: Norton, 2007)で、イスラエル系米国人である著者マイケル・B・オレンは、この地域にかつて米国が関わっていた様を色鮮やかに描いている。その中で暗に述べられているのは、「米国はイスラエル建国のはるか以前から中東に関わっており、現在の米国のイスラエル支援は イスラエル・ロビー の活動とは無関係だ」ということだ。そのことを彼はすでに、講演会ではっきりと述べている。この趣旨が典型的に表れている公式発言としては、オレンが2007年に“米国イスラエル広報委員会”（AIPAC）政策会議で行った演説を参照のこと。ここで彼は、AIPACそのものが「400年近く続く伝統を体現したもので、ここでは、米国という一国の概念と、再建されたユダヤ人国家という概念を切り離すことも分割することも事実上不可能である。イスラエルに存在する信念は米国に存在する信念に等しいという、この国と同じくらい古くからある確信を具体化したものだ」と述べた。この奇妙な主張は、中東地域における米国の役割が1776年の建国以降、とくに1948年から67年にかけて、どれほど変わってきたかを無視している。

筆記録は、www.aipac.org/Publications/Oren-PC-2007.pdfを参照のこと。

25ページ 役割を果たしたいとは思ってこなかった

歴史家ピーター L・ハーンはこう表現する。

「第2次世界大戦以前、米国は、公式には、中東にそれほど関心を持ってはいなかった。一方、欧州の帝国諸国家はいわゆる極東問題 中東（および南アジア）支配の外交競争 に長年関わってきた。米国政府はこの地域に戦略的あるいは政治的利益を見出さず、よって、ここでの帝国合

戦に巻き込まれるのを避けたのだ」 *Crisis and Crossfire: The United States and the Middle East since 1945* (Washington, DC: Potomac Books, 2005), 1を参照のこと。

26ページ 委任統治領としている

マクミランもパレスチナの解決についてこのように描写している。

「第2次世界大戦以降に起きたこととは対照的に、米国は大した役割を果たさなかった」
Paris 1919: Six Months That Changed the World (New York: Random House, 2001), 422-423を参照のこと。

26ページ “バグダッド条約” が締結された

サウジアラビア・米国の安全保障協力の原点については、Nadav Safran, *Saudi Arabia: The Ceaseless Quest for Security* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1985), 60-68; and Rachel Bronson, *Thicker than Oil: America's Uneasy Partnership with Saudi Arabia* (New York: Oxford University Press, 2006), chaps. 1-2を参照のこと。バグダッド条約については、Stephen M. Walt, *The Origins of Alliances* (Ithaca: Cornell University Press, 1987), 58-59を参照のこと。

29ページ 大失敗の政策だ

ワイゼルティアの発言は、パレスチナの知識人サリ・ヌセイベの回顧録に見ることができる。“Sympathy for the Other,” *New York Times Book Review*, April 1, 2007, 13.

30ページ カーターを.....非難した

この非難は、1987年に元ナチス刑務所職員の娘からカーターが受け取った書簡について、カーターが短い注記を書いたことがもとになっている。彼女は父親の国外追放に抗議していた。カーターが書いた一文では、元職員にはまったく同情せず、いかなる対応を勧めることもなかった。わずかに、連邦司法省刑事局特別調査部（ナチス時代の戦争犯罪を起訴する米国の機関）に対して「影響を受けた家族に対し、人道的理由から特別の配慮」をするよう望むとだけ述べた。しかし、このエピソードは、カーターがナチズムにある程度好意的だったと非難するのに利用された。Daniel Freedman, “President Carter Interceded on Behalf of Former Nazi Guard,” *New York Sun*, January 19, 2007.

31ページ 割合はもっと高くなる

Jodie T. Allen and Alec Tyson, “The U.S. Public's Pro-Israel History,” Pew Research Center, July 19, 2006; Pew Research Center for the People and the Press in Association with the Council on Foreign Relations, “America's Place in the World 2005: An Investigation of the Attitudes of American Opinion Leaders and the American Public about International Affairs,” November 2005, 11-12.

31ページ 全米世論調査

この世論調査は2006年10月10日から12日にかけて、無党派、非営利の団体 Council for the National Interest の依頼により “ゾグビー・インターナショナル” が行ったもの。この結果は

下記サイトで見ることができる。www.cnionline.org/learn/polls/czandlobby/index2.htm

31ページ 学者たちが行った聞き取り調査

Daniel Maliniak et al., "Inside the Ivory Tower," *Foreign Policy* 159 (March–April, 2007): 66.

32ページ アメリカ合衆国議会（連邦議会）にも大きな影響力

2001年9月11日にオサマ・ビン・ラディンが米国の首都を攻撃したいと望んだそもそもの理由がこれだ。ラディンは、米国のイスラエル支援の拠点はここだと見なしていた。"Outline of the 9/11 Plot," Staff Statement no. 16, National Commission on Terrorist Attacks Upon the United States, June 16, 2004, 4.

32ページ（マッシングおよびゴールドバーグの記事引用）

Michael Massing, "The Storm over the Israel Lobby," *New York Review of Books*, June 8, 2006; and Jeffrey Goldberg, "Real Insiders," *New Yorker*, July 4, 2005.

33ページ 様々な方法で影響力を行使

米国・イスラエル同盟に関して、ナダフ・サフランは自著でこう述べる。

「親類や同教信者のために米国の外交政策に影響を及ぼそうとした米国内の民族あるいは宗教集団としては、ユダヤがはじめてではない。……一般的な利益団体政治と同様、民族宗教的政治は、米国社会において利益多元主義および多様性が招いた必然の結果だ」

The United States and Israel (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1963), 276.

33ページ 起きることなどほとんどなかった

数多くある参考文献としては、以下を参照のこと。Tony Smith, *Foreign Attachments: The Power of Ethnic Groups in the Making of American Foreign Policy* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2000); *Ethnic Groups and U.S. Foreign Policy*, ed. M. E. Ahrari (Westport, CT: Greenwood Press, 1987); *Ethnicity and U.S. Foreign Policy*, 2nd ed. A. A. Said (New York: Praeger, 1981); Charles McC. Mathias Jr., "Ethnic Groups and Foreign Policy," *Foreign Affairs* 59, no. 5 (Summer 1981); Alexander DeConde, *Ethnicity, Race and American Foreign Policy* (Boston: Northeastern University Press, 1992); Yossi Shain, "Ethnic Diasporas and U.S. Foreign Policy," *Political Science Quarterly* 109, no. 5 (1994–95); Paul Watanabe, *Ethnic Groups, Congress, and American Foreign Policy: The Politics of the Turkish Arms Embargo* (Westport, CT: Greenwood Press, 1984); Patrick J. Haney and Walt Vanderbush, "The Role of Ethnic Interest Groups in U.S. Foreign Policy: The Case of the Cuban-American National Foundation," *International Studies Quarterly* 43, no. 2 (June 1999); Max J. Castro, "Miami Vise," *Nation*, May 14, 2007; Gabriel Sheffer, *Diaspora Politics: At Home Abroad* (New York: Cambridge University Press, 2003); David King and Miles Pomper, "Congress and the Contingent Influence of Diaspora Lobbies: Lessons from U.S. Foreign Policy Toward Azerbaijan and Armenia," *Journal of Armenian Studies* 8, no. 1 (Summer 2004); and R. Hrair Dekmejian and Angelos Themelis, "Ethnic Lobbies in U.S. Foreign Policy: A Comparative Analysis of the Jewish, Greek, Armenian

and Turkish Lobbies,” Occasional Research Paper no. 13, Institute of International Relations, Panteion University of Social and Political Sciences, Athens, Greece, October 1997.

35ページ アラブ世界でも抑圧された

反ユダヤ主義の歴史に関しては、以下を参照のこと。James Carroll, *Constantine's Sword: The Church and the Jews: A History* (Boston: Houghton Mifflin, 2001); Edward H. Flannery, *The Anguish of the Jews: Twenty-Three Centuries of Antisemitism*, 2nd rev. ed. (New York: Paulist Press, 2004); Israel Pocket Library, *Anti-Semitism* (Jerusalem: Keter, 1974); and Marvin Perry and Frederick Schweitzer, *Anti-Semitism: Myth and Hate from Antiquity to the Present* (New York: Palgrave Macmillan, 2002). アラブにいるユダヤ人が置かれた立場と待遇については、以下を参照のこと。Bernard Lewis, *Semites and Anti-Semites: An Inquiry into Conflict and Prejudice* (New York: Norton, 1986), chap. 5; and Charles D. Smith, *Palestine and the Arab-Israeli Conflict: A History with Documents*, 5th ed. (New York: St. Martin's Press, 2004), 8, 10–11.

37ページ 恐怖が湧き上がってくる

The Middle East, 5th ed. (Washington, DC: Congressional Quarterly, 1981), 68.

37ページ 他の米国人と何ら変わらない

2002年、インド政府の公式委員会は、「1998年の核実験からカルギル戦争までの諸問題にインド系米国人は効率よく駆り出され、米国議会に好意的な雰囲気を作り出すために重要な役割を果たした。……それ以外に懸念される事項についても効果的なロビー活動を展開してきた。……インドは、実質的な影響力と立場を堅持した政治団体をはじめ米国内に持つことになったのだ。世界唯一の超大国との関係を強化するために、米国のインド人コミュニティは貴重な財産である」と記した。*Report of the High Level Committee on the Indian Diaspora* (New Delhi: Government of India, January 2002), xx–xxi.

38ページ (ゲッパートの発言)

ゲッパートの発言に加え、ビル・クリントン、ニュート・ギングリッチ、その他数名の著名な人物によるAIPACの影響に関する引用は、以前、以下のサイトに掲載されていた。

www.aipac.org/documents/whoweare.html#say (アクセスは2005年1月14日)。AIPACは現在、ウェブサイトからこれらの発言を削除したようだ。

38～39ページ (ダーショウィッツの発言)

Alan M. Dershowitz, *Chutzpah* (Boston: Little, Brown, 1991), 16. [邦訳：ダーショウィッツ『ユダヤ人の世紀 フッパ・成功に隠された屈辱の歴史』山下希世志訳、ダイヤモンド社、1993年]

39ページ (ゴールドバーグの発言)

Samuel G. Freedman, "Don't Blame Jews for This War," *USA Today*, April 2, 2003.

47ページ 影響力を持つことが可能になる

米国政治における利益団体の役割については、以下を参照のこと。Frank R. Baumgartner and Beth L. Leech, *Basic Interests: The Importance of Groups in Politics and in Political Science* (Princeton: Princeton University Press, 1998); Richard L. Hall and Frank W. Wayman, "Buying Time: Moneyed Interests and the Mobilization of Bias in Congressional Committees," *American Political Science Review* 84, no. 3 (September 1990); Richard L. Hall and Alan V. Deardorff, "Lobbying as Legislative Subsidy," *American Political Science Review* 100, no. 1 (February 2006); John Mark Hansen, *Gaining Access: Congress and the Farm Lobby, 1919–1981* (Chicago: University of Chicago Press, 1991); Ken Kollman, *Outside Lobbying: Public Opinion and Interest Group Strategies* (Princeton: Princeton University Press, 1998); Richard A. Smith, "Interest Group Influence in the U. S. Congress," *Legislative Studies Quarterly* 20, no. 1 (February 1995); Raymond A. Bauer, Ithiel de Sola Pool, and Lewis Anthony Dexter, *American Business and Public Policy: The Politics of Foreign Trade* (Cambridge, MA: MIT Press, 1963); David B. Truman, *The Governmental Process: Political Interests and Public Opinion* (New York: Knopf, 1951); and James Q. Wilson, *Political Organizations* (New York: Basic Books, 1973). [邦訳：ウィルソン『アメリカ政治組織論』日高達夫訳、自由国民社、1983年]

47ページ 影響力の大きさが大きく違う

上記「33ページ 様々な方法で影響力を行使」の注を参照。

48ページ 貢献できることを希望している

以下を参照のこと。George W. Ball and Douglas B. Ball, *The Passionate Attachment: America's Involvement with Israel, 1947 to the Present* (New York: Norton, 1992); Mitchell G. Bard, *The Water's Edge and Beyond: Defining the Limits to Domestic Influence on U.S. Middle East Policy* (New York: Transaction Books, 1991); Paul Findley, *They Dare to Speak Out: People and Institutions Confront Israel's Lobby* (Westport, CT: Lawrence Hill, 1985); J. J. Goldberg, *Jewish Power: Inside the American Jewish Establishment* (New York: Perseus Books, 1996); Anatol Lieven, *America Right or Wrong: An Anatomy of American Nationalism* (New York: Oxford University Press, 2004), chap. 6; Michael Lind, "The Israel Lobby," *Prospect* 73 (April 2002); Massing, "Storm over the Israel Lobby"; Michael Massing, "The Israel Lobby," *Nation*, June 10, 2002; Michael Massing, "Deal Breakers," *American Prospect*, March 11, 2002; Edward Tivnan, *The Lobby: Jewish Political Power and American Foreign Policy* (New York: Simon & Schuster, 1987); and James Petras, *The Power of Israel in the United States* (Atlanta, GA: Clarity Press, 2006).

私たちはこれらの主張のすべてに同意するものではないが、それぞれが米国・イスラエル関係について有益な情報を含んでいる。

48ページ 大きくなっていく様子が描かれている

Steven L. Spiegel, *The Other Arab-Israeli Conflict: Making America's Middle East Policy from Truman to Reagan* (Chicago: University of Chicago Press, 1985) and Warren Bass, *Support Any Friend: Kennedy's Middle East and the Making of the U.S.-Israeli Alliance* (New York: Oxford University Press, 2003). その他の有益な研究としては以下を参照のこと。Abraham Ben-Zvi, *The United States and Israel: Limits of the Special Relationship* (New York: Columbia University Press, 1993); Abraham Ben-Zvi, *Decade of Transition: Eisenhower, Kennedy and the Origins of the American-Israeli Relationship* (New York: Columbia University Press, 1998); Peter L. Hahn, *Caught in the Middle East: U.S. Policy Toward the Arab-Israeli Conflict, 1945-1961* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2004); William B. Quandt, *Peace Process: American Diplomacy and the Arab-Israeli Conflict Since 1967*, 3rd ed. (Washington, DC: Brookings Institution Press, 2004); David Schoenbaum, *The United States and the State of Israel* (New York: Oxford University Press, 1993); and Peter Grose, *Israel in the Mind of America* (New York: Knopf, 1983).

48ページ シュロモ・ベンアミ.....などである

関連する研究としては、以下がある。Shlomo Ben-Ami, *Scars of War, Wounds of Peace: The Israeli-Arab Tragedy* (New York: Oxford University Press 2006); Simha Flapan, *The Birth of Israel: Myths and Realities* (New York: Pantheon Books, 1987); Baruch Kimmerling, *Politicide: Ariel Sharon's War Against the Palestinians* (London: Verso, 2003). [邦訳 : キマーリング 『ポリティサイド アリエル・シャロンの対パレスチナ人戦争』 脇浜義明訳、柘植書房新社、2004年] ; Benny Morris, *Righteous Victims: A History of the Zionist-Arab Conflict, 1881-1999* (New York: Knopf, 1999); Ilan Pappé, *The Ethnic Cleansing of Palestine* (Oxford, England: Oneworld Publications, 2006); Tom Segev, *One Palestine, Complete: Jews and Arabs Under the British Mandate*, trans. Haim Watzman (New York: Metropolitan Books, 2000); Tom Segev, *1967: Israel, the War, and the Year That Transformed the Middle East*, trans. Jessica Cohen (New York: Metropolitan Books, 2007); Avi Shlaim, *The Iron Wall: Israel and the Arab World* (New York: Norton, 2000); and Zeev Sternhell, *The Founding Myths of Israel: Nationalism, Socialism, and the Making of the Jewish State*, trans. David Maisel (Princeton: Princeton University Press, 1998).

48ページ 大きな貢献をしている

一例として、以下を参照のこと。Nur Masalha, *Expulsion of the Palestinians: The Concept of "Transfer" in Zionist Political Thought, 1882-1948* (Washington, DC: Institute for Palestine Studies, 1992); Eugene L. Rogan and Avi Shlaim, eds., *The War for Palestine: Rewriting the History of 1948* (New York: Cambridge University Press, 2001); Norman G. Finkelstein, *Image and Reality of the Israel-Palestine Conflict* (London: Verso, 2001); and Rashid Khalidi, *The Iron Cage: The Story of the Palestinian Struggle for Statehood* (Boston: Beacon Press, 2006).

第一章 アメリカという大恩人

51ページ (ラビンとネタニヤフの発言)

“Address by PM Rabin to the U.S. Congress-26-Jul-94,” Israel Ministry of Foreign Affairs, www.mfa.gov.il/MFA/Archive/Speeches; and Benjamin Netanyahu, “Speech to Joint Session of Congress, July 10, 1996.” www.netanyahu.org/joinsesofusc.html

52ページ 借款ではなく直接援助金である

「対外債務および援助」について報告している米国国際開発庁 (USAID) の“Greenbook”によると、2005年、イスラエルは米国から1538億9470万ドルを受け取った。

<http://qesdb.usaid.gov/gbk> を参照。

53ページ 軍事援助をほとんど行わなかった

議会調査サービス局 (CRS) によると、1949年から59年まで、米国はイスラエルに直接的な軍事援助はしていなかった。以下を参照のこと。Clyde Mark, “Israel: U.S. Foreign Assistance,” *Issue Brief for Congress*, Congressional Research Service, April 26, 2005, 13-14, Table 3. 1958年、米国はイスラエルに無反動対戦車ライフル100丁を売却している。部分的には、58年のヨルダン危機でイスラエルが米国を支持した見返りとしてである。以下を参照のこと。Warren Bass, *Support Any Friend: Kennedy’s Middle East and the Making of the U.S.-Israeli Alliance* (New York: Oxford University Press, 2003), 151; and Douglas Little, “The Making of a Special Relationship: The United States and Israel, 1957–1968,” *International Journal of Middle East Studies* 25, no. 4 (November 1993): 566.

ウィリアム・H・モットIVは、イスラエルは独立戦争中、米国製ハーフトラック500台あまりを密かに得ており、51年から52年にかけては戦車数台を受け取っていたとも報告している。さらに米国政府は、54年、イスラエルがフランス製軍用機を購入する際、「フランス軍需産業発展のため、米国の対フランス軍事援助の一環として」財政支援をし、55年にはフランス製ミステールの購入にも同様の支援を提供した。表向きは、こうした財政支援の受益者はフランスであったため、米国の対イスラエル支援に関する説明にはこれらの額は含まれていない。モットは、46年から55年にかけての軍事援助は総額9450万ドルにのぼり、56年から65年までで、1億8910万ドルの追加支援があったと報告している。以下を参照のこと。William H. Mott IV, *United States Military Assistance: An Empirical Perspective* (Westport, CT: Greenwood Press, 2002), 176-177.

53ページ 要請したときも同様だった

Zach Levey, “Israel’s Quest for a Security Guarantee from the United States, 1954-1956,” *British Journal of Middle East Studies* 22, no. 1/2 (1995) を参照のこと。ダヴィド・ベンゲリオンはこの間の米国による保障の値打ちに対して、相反する感情を抱いていたと、レヴィは記述している。つまり、大国の保護を評価しつつも、イスラエルの自治権が損なわれるのではない

かと懸念していた。さらに、複数のイスラエル当局者（代表例はモシェ・シャレット）は、米国による保障をベングリオンらが支持した過激な政策を抑制する手段と見なしていた、とも書いている。

53ページ 援助は再開された

Michael Brecher, *Decisions in Israel's Foreign Policy*, (New Haven: Yale University Press, 1975), 191–192, 220.

54ページ 提案がなされた

Avi Shlaim, *The Iron Wall: Israel and the Arab World* (New York: Norton, 2001), 172–173.

54ページ 引き換えのものだった

以下を参照のこと。 *The Iron Wall*, 178–185; Benny Morris, *Righteous Victims: A History of the Zionist-Arab Conflict, 1881–2001* (New York: Vintage, 2001), 290, 297–300; Brecher, *Decisions in Israel's Foreign Policy*, 282–303; Steven L. Spiegel, *The Other Arab-Israeli Conflict: Making America's Middle East Policy from Truman to Reagan* (Chicago: University of Chicago Press, 1985), 74–82; and David Schoenbaum, *The United States and the State of Israel* (New York: Oxford University Press, 1993), 115–123.

54ページ ケネディ政権が最初だった

ウォーレン・バスによると、「ケネディ政権は、米国・イスラエル関係の方向転換にあたって、大きな位置を占めた。50年代の冷ややかな同盟関係から今日私たちが知っているような本格的な同盟関係へと、確信的に変化させた要だ」。 *Support Any Friend*, 3. アブラハム・ベンツヴィイは、戦略的パートナーシップの始まりは、50年代後半としている。とくにイスラエルが「アイゼンハワー・ドクトリン」（国際共産主義の脅威に晒される中東地域への米国の支援を保証したもの）を受け入れた時点と、レバノン、イラク、ヨルダンにおける様々な危機の期間に支援を行った時点だったとしている。以下を参照。 *Decade of Transition: Eisenhower, Kennedy and the Origins of the American-Israeli Alliance* (New York: Columbia University Press, 1998); and Little, “Making of a Special Relationship.”

54～55ページ （ケネディの発言）

ケネディはそれ以降の記者会見で米国の関与について説明することにより慎重になった。 Bass, *Support Any Friend*, 3, 183; and Spiegel, *Other Arab-Israeli Conflict*, 106-107.

55ページ 実際、63年には……思惑などであった

ウォーレン・バスは、60年代はじめのイスラエル・ロビー（彼は「80年代にはすでに、ワシントンの最強チーム」と呼んでいる）には今ほどの力はなかったと正しく書いている。そして「ホーク地対空ミサイルの売却が国内事情で推し進められていたことを示す証拠書類は、実際のところ一つもない」と話している。しかし、歴代大統領や顧問たちが重要な戦略的選択が国内事情によって行われていることを認める可能性は低いわけだから、証拠書類がなくても驚くべきことではない。また、バスは、「（ホーク地対空ミサイルの売却に関する）イスラエルの議論は戦略的観点のみで進められているが、どれほどひそやかであったとしても、近づきつつある中間選挙

が誘因となったとは言い難い」と、認めている。さらに、「ケネディは根っからの政治家だから、ホーク売却は親イスラエル派の有権者と献金者に対して役に立つとわかっていた」と述べている。以下を参照のこと。Bass, *Support Any Friend*, 145–150。Spiegel, *Other Arab-Israeli Conflict*, 106–110; and Mordechai Gazit, *President Kennedy's Policy Toward the Arab States and Israel* (Tel Aviv: Shiloah Center for Middle Eastern and African Studies, 1983), 30–55.

55ページ 武器取引が行われた

A-4スカイホークの売却契約もこの頃に合意したが、納品されたのはその後数年たってからだった。Stockholm International Peace Research Institute (SIPRI), *The Arms Trade with the Third World* (New York: Humanities Press, 1971), 532, 535.

56ページ 現実には援助金支給

Mark, “Israel: U.S. Foreign Assistance,” 6, 13.

56ページ 様々な形の経済援助

USAID, “Greenbook,” <http://quesdb.cdie.org/gbk/index.html> より算出。

56ページ 米国からの対外援助受給国

USAID, “Greenbook および *The Military Balance 2006* (London: International Institute for Strategic Studies, 2006).

57ページ 増額された例

Mark, “Israel: U.S. Foreign Assistance,” 2, 10; and Matthew Berger, “Good News—and Bad—for U.S. Aid to Israel,” *JTA.org*, March 28, 2003.

57ページ 43億を超える

Edward T. Pound, “A Close Look at U.S. Aid to Israel Reveals Deals That Push Cost Above Publicly Quoted Figures,” *Wall Street Journal*, September 19, 1991.

57ページ イスラエルが好条件で援助を受けている

議会調査サービス局 (CRS)、外交・防衛・貿易部門のクライド・マークによると、イスラエルは「他国は利用できないような米国の支援計画によって優遇され、特別の利益を得ている」。Mark, “Israel: U.S. Foreign Assistance,” 8.

57ページ (国連の『人材育成報告』)

Jeremy M. Sharp, “U.S. Foreign Aid to Israel,” *Report for Congress*, Congressional Research Service, January 5, 2006, 5–6.

58ページ 年度はじめの.....納税者にかけている

Mark, “Israel: U.S. Foreign Assistance,” 8–9.

58ページ 利子を稼ぐことができる

“U.S. Assistance to Israel,”

<http://telaviv.usembassy.gov/publish/mission/amb/assistance.html>.

58ページ 余剰装備をイスラエル向けに引き渡す

以下を参照のこと。Duncan L. Clarke, Daniel B. O'Connor, and Jason D. Ellis, *Send Guns and Money: Security Assistance and U.S. Foreign Policy* (Westport, CT: Praeger, 1997), 24; Mark, “Israel: U.S. Foreign Assistance,” 10; and Shirl McArthur, “A Conservative Estimate of Total Direct U.S. Aid to Israel: \$108 Billion,” *Washington Report on Middle East Affairs* (online), July 2006, 16–17.

58～59ページ 武器供給国となった

Sharp, “U.S. Foreign Aid to Israel,” 11.

59ページ (GAOの説明)

米国会計監査院 (GAO) も、イスラエルの終了債務条項 (たとえば、契約終了時の費用をまかなうために購入側が留保すべき額) を国防総省が撤回したことを把握したが、「イスラエル支援は継続するだろうとの予測から、撤回してもリスクは最小限に抑えられる」と確信している。U.S. General Accounting Office, “Military Sales Cash Flow Financing,” GAO/NSIAD-94-1024, Washington, DC, February 8, 1994, 3.

59ページ 利子の総額は少なくなる

Mark, “Israel: U.S. Foreign Assistance,” 8.

59ページ 現金を受け取っている

USAIDのウェブサイトで、イスラエルと他の主な受給国を比較すれば、この対比は明らかだ。
www.usaid.gov/policy/budget/cbj2007/ane/il.html.

60ページ 見分ける方法はない

Mark, “Israel: U.S. Foreign Assistance,” 7.

60ページ コストの見積もりは.....の範囲である

CRSは、保証額の約4%を債務不履行に備えて引き当てていると報告してる。100億ドルの貸付であれば、補填用の基金は約4億ドルになる。Mark, “Israel: U.S. Foreign Assistance,” 3; Larry Nowels and Clyde Mark, “Israel’s Request for U.S. Loan Guarantees,” *Issue Brief for Congress*, Congressional Research Service, October 8, 1991; and Sheldon L. Richman, “The Economic Impact of the Israeli Loan Guarantees,” *Journal of Palestine Studies* 21, no. 2 (Winter 1992).

61ページ イスラエル国債の購入によるもの

CRSのマークによると、「イスラエルは年間で、慈善団体を通して約10億ドル、長期・短期の商業融資でほぼ同額、イスラエル国債売却代金として約10億ドルを受け取っていると推測される」。Mark, “Israel: U.S. Foreign Assistance,”要約を参照のこと。イスラエル国債は、米国

内では Development Corporation for Israel (DCI イスラエル開発公社)を通して販売されている。この債券は非流通で、イスラエル政府はこれを、「安定した対外借入の原資であり、離散ユダヤ人とのつながりを維持する重要なメカニズムともなっている」と見なしている。1951年から89年までは利子が約4% (80年以降は米国国債の利子率が急上昇したことから、急激な「愛国心に満ちた減価」となった)だったが、「近年、DCI債権発行は、市場価格決定に近くなるように変動せざるをえなかった」。2006年、イスラエル国債の販売額は12億ドルに達したようで、国債によって集めたこうした資金は累計で250億ドルを超えている。Suhas L. Ketkar, “Diaspora Bonds: Track Record and Potential,” *World Bank Discussion Paper*, August 31, 2006; and Avi Krawitz, “Israel Bonds Raises \$1.2 billion in 2006,” *Jerusalem Post*, December 10, 2006.

61ページ 適用しないように配慮した

Dale Russakoff, “Treasury Finds Bite in Israel Bonds; 1984 Law Places New Tax on Artificially Low Interest Rates,” *Washington Post*, September 12, 1985; “Tax Report,” *Wall Street Journal*, August 20, 1986; and Russell Mokhiber, “Bonds of Affection,” *Multinational Monitor* (1988), http://multinationalmonitor.org/hyper/issues/1988/04/mm0488_10.html.

61ページ 米国・イスラエル間の所得条約の特別条項

IRSによると、納税者が寄付控除を受けるには、「イスラエル法に従って慈善団体として設立され、承認された団体に対するものでなくてはならない。控除額は、米国法に従って設立された団体に対して認められる額と同じであるが、(納税者の)イスラエル関連の収入による調整後総所得の25%を上限とする」。“Charitable Contributions,” Publication 526, U.S. Internal Revenue Service, 3, www.irs.gov/pub/irs-pdf/p526.pdf. 同様の規定を設けているのはメキシコとカナダだけのようだ。

61ページ 独立する前から一貫している

独立に先立ち、シオニスト軍のために密かに武器を入手しようとした試みについては、以下に詳述されている。Leonard Slater, *The Pledge* (New York: Simon & Schuster, 1970).

61～62ページ イスラエルのジャーナリスト……確認されてはいない

以下を参照のこと。Shimon Peres, *Battling for Peace: A Memoir* (New York: Random House, 1995), 119; Michael Karpin, *The Bomb in the Basement: How Israel Went Nuclear and What That Means for the World* (New York: Simon & Schuster, 2005), 135–137; and Avner Cohen, *Israel and the Bomb* (New York: Columbia University Press, 1998), 67, 70.

62ページ イスラエル国防軍友の会

Friends of the Israel Defense Forces, “Mission Statement,” www.israelsoldiers.org; and Aimee Rhodes, “New York Dinner Raises \$18m for IDF,” *Jerusalem Post*, April 3, 2007.

62ページ 大ざっぱな監視の目が向けられていただけ

エルサレム銀行のイスラエル慈善団体向けガイドには、近年このような説明がなされている。「米国人が海外慈善団体に行う寄付に関する法律は存在しているが、規定が明確ではないため、適用されることはほとんどなかった。イスラエル慈善団体に向けた、個人や501c(3) 適格団体（アメリカ連邦財務省内国歳入局の認可を受けた非課税団体）からの寄付は監視されておらず、最終的な用途を追跡し確認することは困難だった」。このガイドは、2001年9月11日以降で状況は激変したと指摘する。Bank of Jerusalem, “Help Them Help You: A Recommendation for the Israeli Charity.” www.bankjerusalem.co.il/indexE.php?page=588. (accessed March 28, 2007)

62ページ ゴレンバーグが指摘している通り

Gershon Gorenberg, *The Accidental Empire: Israel and the Birth of the Settlements, 1967-1977* (New York: Times Books/ Henry Holt, 2006), 218-219を参照のこと。同様に、イスラエルの政治学者デイヴィッド・ニューマンは、ユダヤ機関と世界シオニスト機構（WZO）は、「同一の当局、部署、役人が活動を監督しており、同じ傘の下で」機能していると表現したようだ。Amy Teibel and Ramit Plushnick-Masti, “As Israel Leaves Gaza, Bill for Its Settlement Ambitions Is Shrouded in Mystery,” Associated Press, August 10, 2005.

63ページ 明らかにされたのだった

Nathaniel Popper, “Jewish Officials Profess Shock over Report on Zionist Body,” *Forward*, March 18, 2005; “Summary of the Opinion Concerning Unauthorized Outposts”(the Sasson Report), www.fmep.org/documents/sassonreport.html.

63ページ 範囲を特定できないのだ

“U.S. Tax-Exempt Charitable Contributions to Israel: Donations, Illegal Settlements, and Terror Attacks against the US,” *Middle East Foreign Policy Research Note*, October 5, 2005. www.irmep.org/tec.htm.

63ページ はるかに上回っている

International Monetary Fund, “World Economic Outlook Database for September 2006.” www.imf.org/external/pubs/ft/weo/2006/02/data/index.aspx.

63ページ 国連の06年『人材育成報告』

Human Development Report 2006 (New York: United Nations Development Programme, 2006), <http://hdr.undp.org/hdr2006/statistics>; and Economist Intelligence Unit, “2005 Quality of Life Rankings,” www.economist.com/media/pdf/QUALITY_OF_LIFE.pdf.

64ページ 純粋な必要性からだけではない

Mitchell G. Bard and Daniel Pipes, “How Special Is the U.S.-Israel Relationship?” *Middle East Quarterly* 4, no. 2 (June 1997):43.

64ページ 了解事項覚書

Bishara A. Bahbah, "The United States and Israel's Energy Security," *Journal of Palestine Studies* 11, no. 2 (Winter 1982):118–130. 覚書原本は以下を参照のこと。"Israel–United States Memorandum of Understanding, September 1, 1975" and "Memorandum of Agreement between the Governments of the United States of America and Israel–Oil," www.jewishvirtuallibrary.org/jsource/Peace/mou1975.html and www.jewishvirtuallibrary.org/jsource/Peace/cdoilmou.html.

以下も参照のこと。Oil from Iraq: An Israeli Pipedream," *Jane's Middle East/Africa Report*, April 16, 2003, www.janes.com/regional_news/africa_middle_east/news/fr/fr030416_1_n.shtml.

64ページ それ以来更新されている

以下を参照のこと。William B. Quandt, *Camp David: Peacemaking and Politics* (Washington, DC: Brookings Institution Press, 1986), 313; Spiegel, *Other Arab-Israeli Conflict*, 371–372; Moshe Dayan, *Breakthrough: A Personal Account of the Egypt-Israeli Peace Negotiations* (New York: Knopf, 1981), 274–276; "Israel Oil Supply Arrangement," Memoranda of Agreement, United States Treaties and Other International Acts Series 9533, 30 UST 5994 (Washington, DC, March 1979), 5989–5996; Judith Miller, "Israel: Pressing U.S. on Oil Sales Accord," *New York Times*, August 17, 1980; and Steven Rattner, "U.S. and Israel Reach Agreement on Oil," *New York Times*, October 16, 1980.

64ページ エジプト政府は今でも.....得ている

USAID, "Greenbook."

65ページ ヨルダンへの米国の援助

Alfred Prados, "Jordan: U.S. Relations and Bilateral Issues," *Issue Brief for Congress*, Congressional Research Service, January 9, 2002; and USAID, "Greenbook."

65ページ イスラエルの軍事的優位を保つこと

1975年のイスラエル・米国間の覚書により、米国政府は、「イスラエル軍の装備品やその他の防衛に関する要請に対応し、改良型装備品を供給し、イスラエルの防衛能力を維持する」ために最大限努めることとなった。

65ページ 手助けをしてきた

Sharp, "U.S. Foreign Aid to Israel," 1.

65ページ 自由を享受している

David Rogers and Edward T. Pound, "How Israel Spends \$1.8 Billion a Year at Its Purchasing Mission in New York," *Wall Street Journal*, January 20, 1992.

66ページ 自国の援助口座から補填

防衛安全支援庁 (DSAA) は、1998年に防衛安全協力庁 (DSCA) と名称変更をした。

66ページ 事前審査が不要な唯一の国

GAOによると、「他国は主に政府間の手続によるのに対し、イスラエルは物品購入の99%で民間契約を利用している……商業行為とすることで、イスラエルは国防省の対外有償軍事援助額の3%の管理費手数料を回避できる」。政府のイスラエル向け商業売買に関する管理・承認ガイドラインは比較的厳しくない。「イスラエルが対外有償軍事援助資金を受け取るまでは、DSAAは5万ドルから50万ドルまでの売買契約書や注文書を審査しなくてもよい」。また、「DSAAはイスラエルの計画を通常のやり方で管理していないため、また人材が限られていることから、慎重を要する物品を……報告するという取り決めを完全に履行することは困難だ」。“Security Assistance: Reporting of Program Content Changes,” GAO/NSIAD-90-115, Washington, DC, May 1990, 8–9, 14.

66ページ (テディ・アレンの証言)

Quoted in Steven Pearlstein, “U.S. Military Office Defends Israeli Aid; Closer Scrutiny of Program Described as Unnecessary,” *Washington Post*, July 30, 1992. 以下も参照。David Rogers and Edward Pound, “The Money Trail: U.S. Firms Are Linked to an Israeli General at the Heart of a Scandal,” *Wall Street Journal*, January 20, 1992; Rogers and Pound, “How Israel Spends \$1.8 Billion”; Joel Brinkley, “Israeli General Pleads Guilty in Bribery Case,” *New York Times*, March 28, 1991; Hillel Kuttler, “U.S. Defense Procurement Faults Led to Dotan Affair,” *Jerusalem Post*, August 12, 1993; and U.S. General Accounting Office, “Foreign Military Aid to Israel: Diversion of U.S. Funds and Circumvention of U.S. Program Restrictions,” GAO/T-OSI-94-9, Washington, DC, October 1993.

66ページ この兵器とは……といったものである

2004年の時点で、ラヴィ、メルカヴァ、アロー、その他のプロジェクトに対する支出は26億8000万ドルにのぼった。以下参照。“U.S. Assistance to Israel.”

67ページ イスラエルの武器庫に収まった

Dov S. Zakheim, *Flight of the Lavi: Inside a U.S.-Israeli Crisis* (ワシントンDC: Brassey’s, 1996) を参照のこと。ザックハイムはレーガン政権で国防次官を務め、軍事アナリストとしても経験を積んだ人物だ。また、敬虔なユダヤ教正教派信者でもあり、イスラエルを強く支持していたが、ラヴィ・プロジェクトの実際のコストを算出し、結果として計画を中止したことにより、人格攻撃を繰り返し受けることとなった。事実、イスラエル国防大臣モシェ・アレンズは彼のことを「民族の裏切り者」と言ったと、ザックハイム自身が報告している。xv, 256-257を参照。以下も参照のこと。Duncan L. Clarke and Alan S. Cohen, “The United States, Israel and the Lavi Fighter,” *Middle East Journal* 40, no. 1 (Winter 1986); and James P. DeLoughry, “The United States and the LAVI,” *Airpower Journal* 4, no. 3 (Fall 1990).

67ページ 補助金なのである

以下を参照のこと。Mark, “Israel: U.S. Foreign Assistance,” 8; Carol Migdalovitz, “Israel: Background and Relations with the United States,” *Report for Congress*, Congressional Research Service, August 31, 2006, 19; and Duncan L. Clarke, “The Arrow Missile: The United States, Israel, and Strategic Cooperation,” *Middle East Journal* 48, no. 3 (Summer

1994).

67ページ 永続的な協議と協力のための枠組み

“Memorandum of Understanding Between the Government of the United States and the Government of Israel on Strategic Cooperation,” November 30, 1981, イエール大学法律大学院のウェブサイト“Avalon Project”に投稿された。

www.yale.edu/lawweb/avalon/mideast/pal03.htm.

68ページ 優遇措置を受ける

1988年、U.S. Code Title 10 (Armed Forces)の一部として、米国連邦議会は「NATO以外の主要同盟国」を指定した。Subtitle A, Part IV, Chapter 138, Subchapter II, Section 2350aを参照のこと。イスラエルの指定については、以下を参照。Migdalovitz, “Israel: Background and Relations,” 19.

68ページ 連邦議会は……議決した

Yitzhak Benhorin, “US to Double Emergency Equipment Stored in Israel,” *Ynetnews.com*, December 12, 2006.

69ページ (フェルドマンの発言)

フェルドマンは、米国がこの物資をイスラエルから「米軍が配備される可能性が最も高い地域」、つまりペルシア湾に移送するのは困難が伴い、費用もかかるだろうとしている。Shai Feldman, *The Future of U.S.-Israel Strategic Cooperation* (Washington, DC: Washington Institute for Near East Policy, 1996), 45–46. 以下も参照のこと。Clarke et al., *Send Guns and Money*, 162–163.

69ページ イスラエルで保管されている……用いられた

Benhorin, “US to Double Emergency Equipment”

69ページ 11月には再開された

これらの進展については、以下にまとめられている。Spiegel, *Other Arab-Israeli Conflict*, 410–411; Migdalovitz, “Israel: Background and Relations,” 18–19; Bard and Pipes, “How Special Is the U.S.-Israel Relationship?”; Clyde Mark, “Israeli–United States Relations,” *Issue Brief for Congress*, Congressional Research Service, November 9, 2004, 9–10; and Schoenbaum, *The United States and the State of Israel*, 280–281.

70ページ 財政補助を行った

Jeffrey T. Richelson and Desmond Ball, *The Ties That Bind: Intelligence Cooperation Between the UKUSA Countries* (Boston: Unwin Hyman, 1990), 173, 304; Jeffrey T. Richelson, “The Calculus of Intelligence Cooperation,” *International Journal of Intelligence and Counterintelligence* 4, no. 3 (Fall 1990): 314; and Benjamin Beit-Hallahmi, *The Israeli Connection: Who Israel Arms and Why* (New York: Pantheon Books, 1987), 40–41.

70ページ 制限されたものだった

以下を参照のこと。Jeffrey T. Richelson, *The U.S. Intelligence Community*, 2nd ed. (Cambridge, MA: Ballinger, 1989), 275–277.; and Seymour Hersh, *The Samson Option: Israel's Nuclear Arsenal and American Foreign Policy* (New York: Random House, 1991), 3–8. [邦訳：ハーシュ『サムソン・オプション』山岡洋一訳、文藝春秋、1992年]

70ページ リアルタイムの衛星情報転送を承認した

Ephraim Kahana, “Mossad-CIA Cooperation,” *International Journal of Intelligence and Counterintelligence* 14, no. 3 (July 2001): 416.

70ページ 暗に支持してきた

以下を参照のこと。Robert Norris et al., “Israeli Nuclear Forces, 2002,” *Bulletin of the Atomic Scientists* 58, no. 5 (September/ October 2002): 73–75; and “Israel Profile: Nuclear,” *Nuclear Threat Initiative*, www.nti.org/e_research/profiles/Israel/Nuclear/index.html.

71ページ ケネディ政権は……ようだった

Bass, *Support Any Friend*, 198, 206.

71ページ ケネディは……警告した

Bass, *Support Any Friend*, 216, 219, 222.

71ページ (エシュコルの発言)

Karpin, *Bomb in the Basement*, 237.

72ページ (コーエンの記述)

Cohen, *Israel and the Bomb*, 193. ホワイト・ハウスの補佐官ロバート・コーマーは後に、1960年代、イスラエルに米国製武器を提供するとしてケネディの決定は、イスラエル政府に対して、核に走らないよう説得するためでもあったと主張した。もし、実際の目的がそうであったとすれば、これは明らかに失敗だった。マイケル・カルピンが書いているように、「イスラエルはデモナの製品（核兵器）も米国の攻撃兵器も入手したかったのだ。結局のところ、イスラエルが手に入れたものはそれだった。」*Bomb in the Basement*, 238.

72ページ (バスの記述)

Bass, *Support Any Friend*, 252.

73ページ (ハーシュの記述)

Hersh, *Samson Option*, 188-89. バスは、デモナについてのジョンソンの方針は「相互に許容できる程度の二枚舌で解決しようとしている」と表現した。*Support Any Friend*, 252.

73ページ イスラエルは……批准していない

Avner Cohen, “Israel and Chemical/ Biological Weapons: History, Deterrence, and Arms

Control,” *Nonproliferation Review* 8, no. 3 (Fall–Winter 2001).

73ページ 物的援助を与えた例は他にない

ソ連の対キューバ援助総額は、米国の対イスラエル援助総額数年分と同程度だったかもしれない（年間約30億ドル）が、この推定は公定のドル・ペソ為替レートで計算したものであるため、ソ連の対キューバ援助総額を割り増ししている。キューバの人口はイスラエルの約2倍であり、1人あたりのソ連の援助額は米国の対イスラエル援助額よりかなり少ない。また、米国のイスラエル支援はソ連のキューバ支援より長期にわたっている。カストロはずっとおとなしい隷属者でもあった。ホルヘ・ドミンゲスは、「キューバがソ連の利益に反対することはない。キューバは、ソ連の利益に留意し、それに一致するように、自主性を発揮している。ソ連のアフガン侵攻時のような重要な時期には、キューバは自国の利益を犠牲にするような方針を採択していた。自国の利益に反するようなソ連の国内方針についても、ソ連政府への批判には慎重に対応している。ソ連の覇権が緊密に及んでいる結果、キューバの自主独立性は現実的に大きな制限を課されている」 *To Make a World Safe for Revolution: Cuba's Foreign Policy*, (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1989), 111 and Appendix B.

74ページ ところがベギンは……と語った

Quandt, *Peace Process*, 249を参照。実際のところ、ベギンは約束を破っていないとの説もある。彼がAWACS早期警戒管制機の議論の口火を切ったのではなく、議員が売却について質問した際に、強く反対しただけだというのだ。レーガンの回想から、彼がベギンの対応の説明には説得力がないと思っていたことは明らかだ。「わが国の国内の政治手続だとか外交政策の策定だと考えているような問題に、外国の代表者が介入しようとするには、どの国であっても、苦々しく思う。……ベギンは約束を破ったと思うし、私は怒りを覚えていた」。Ronald Reagan, *An American Life* (New York: Simon & Schuster, 1990), 412, 414–416. [邦訳：レーガン『わがアメリカンドリーム レーガン回想録』尾崎浩訳、読売新聞社、1993年]

75ページ 国連決議242号

英語の決議242は以下に再掲されている。 *The Arab-Israeli Conflict: Readings and Documents*, ed. John Norton Moore (Princeton: Princeton University Press, 1977), 1083-1084に再掲されている。以下も参照のこと。David Pollock, *The Politics of Pressure: American Arms and Israeli Policy Since the Six Day War* (Westport, CT: Greenwood Press, 1982), 74.

75ページ 力の均衡を維持する約束をした

米国の支援が1968年以降増加したにもかかわらず、米国の軍事援助の程度を巡る議論と、様々な仲介者による和平提案をイスラエルが受け入れようとしなかったことから、米国とイスラエルの関係はしばしば緊迫したものとなった。米国は、武器を制限することでイスラエルを譲歩させようとしたが、だいたいは失敗した。その一方で、追加支援の約束が得られると譲歩は成立した。以下を参照のこと。William B. Quandt, *Decade of Decisions: American Policy Toward the Arab-Israeli Conflict, 1967–1976* (Berkeley: University of California Press, 1977), 97–98, 100–102; Pollock, *Politics of Pressure*, 74–77; Brecher, *Decisions in Israel's Foreign Policy*, 487–488, 493–496; and Spiegel, *Other Arab-Israeli Conflict*, 190–191.

75ページ (ペレスの発言)

Brecher, *Decisions in Israel's Foreign Policy*, 493.

76ページ 109億ドルに膨れ上がった

これらの額は2005年の数字だ。USAID, “Greenbook.”

76ページ 一時停止した

Shlaim, *Iron Wall*, 603-605を参照のこと。

76ページ (ロスの発言)

Dennis Ross, *The Missing Peace: The Inside Story of the Fight for Middle East Peace* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 2004), 478.

76ページ (ベンツヴィの記述)

ベンツヴィはこう続ける。「米国政府とイスラエル政府との戦略的つながりは、1996年から99年にかけて進展する一方だった。……これには、戦時中、イスラエル国内に武器や兵器を事前配置することや、アロー、ノーチラス、ブースト段階迎撃などの反ミサイルシステムの開発が含まれる。両国は、Joint Political Military Planning Group (政治軍事計画合同グループ)、Joint Security Assistance Planning Group (安全保障援助計画合同グループ)、Joint Economic Development Group (経済発展合同グループ)などの委員会で定期的に顔を合わせていた。事実、米国・イスラエル戦略計画合同委員会は……ワイ・リバー合意で取り決められていたように、再派兵の一時停止をイスラエルが決定したにもかかわらず、99年2月21日に予定通り開催された」。「The United States and Israel: The Netanyahu Era,” *Strategic Assessment* (Jaffee Center for Strategic Studies, Tel Aviv University) 2, no. 2 (October 1999).

77ページ ほとんど選択肢がなかった

フォードの再評価が最終的にどうなったのかについては、以下を参照のこと。Quandt, *Decade of Decisions*, 267–271; Edward Tivnan, *The Lobby: Jewish Political Power and American Foreign Policy* (New York: Simon & Schuster, 1987), 89; Charles McC. Mathias Jr., “Ethnic Groups and Foreign Policy,” *Foreign Affairs* 59, no. 5 (Summer 1981): 992–993; and Spiegel, *Other Arab-Israeli Conflict*, 296.

77ページ 結びつけようとは決してしなかった

カーターは後にこう回想している。「ベギンは、あのいまましい合意に関わるすべてをわざとないがしろにしたのだ。自分が嘘をついたことはわかっていたはずだ。国内から大きな圧力を受けたのは、キャンプ・デービッドを去った12時間後だったのではないのだから。……われわれがキャンプ・デービッドを離れた時、当面は合意がないという事実を示すような曖昧な言葉はなかった。その間、私たちは最終和平合意について議論するはずだった。これは完全に、すべて了解されていたことだ」。Kenneth W. Stein, *Heroic Diplomacy: Sadat, Kissinger, Carter, Begin, and the Quest for Arab-Israeli Peace* (New York: Routledge, 1999), 256.

77ページ (クリントンの発言)

クリントンの激怒については、以下を参照のこと。Hussein Agha and Robert Malley, “Camp David: The Tragedy of Errors,” *New York Review of Books*, August 9, 2001, 60.

78ページ 輸送機の引き揚げを命じた

William B. Quandt, *Camp David: Peacemaking and Politics* (Washington, DC: Brookings Institution Press, 1986), 103–104.

78ページ 88年に再開された

Sharp, “U.S. Foreign Aid,” 4.

78～79ページ 必要などともともあまりなかったのだ

Itamar Rabinovich, *The War for Lebanon, 1970–1985*, rev. ed. (Ithaca: Cornell University Press, 1985), 138–143.

79ページ ローン保証は再開された

William B. Quandt, *Peace Process: American Diplomacy and the Arab-Israeli Conflict Since 1967*, 3rd ed. (Washington, DC: Brookings Institution Press, 2004), 307–310; and Glenn Frankel, *Beyond the Promised Land: Jews and Arabs on the Hard Road to a New Israel* (New York: Simon & Schuster, 1994), 301–304.

79ページ はるかに高い数字である

1991年、93年、94年それぞれのイスラエルの正確な人口増加率は4.9%、2.5%、2.7%だった。

“Sources of Population Growth: Total Israeli Population and Settler Population,

1991–2003,” Foundation for Middle East Peace, Washington, DC,

http://www.fmep.org/settlement_info/stats_data/settler_population_growth/sources_population_growth_1991-2003.html.

80ページ 半分をわずかに超えている

1946年から85年にかけて、ソ連は拒否権を119回行使したが、それ以降はわずか4回である。

米国は70年まで拒否権を行使しなかったが、07年3月時点で82回行使していた。“Changing Patterns in the Use of the Veto in the Security Council,” Global Policy Forum,

www.globalpolicy.org/security/data/vetotab.htm.

80ページ (ネグロポンテの発言)

こうした姿勢は「ネグロポンテ・ドクトリン」として知られていた。Michael J. Jordan, “Symbolic Fight for Israel at U.N.,” *Christian Science Monitor*, December 8, 2003.

80ページ 不快感を伝えたいときだけ

米国は、1953年のキビヤ大虐殺、および、81年のイラクのオシラク原子炉爆撃に関してイスラエルを非難する国連安保理決議に賛成した。占領地域からのパレスチナ人追放を非難する90年のイスラエル非難決議672および681にも賛成した。チュニスにあったPLO本部のイスラエルに

よる爆撃を非難した85年の決議573には棄権し、エルサレムにあるアル・アクサ・モスクのトンネル建設について懸念を表明する96年の決議1073には賛成した。

81ページ イスラエルの行動についての国連総会決議

国連の投票記録は<http://unbisnet.un.org:8080/> から入手した。国連総会のイスラエル関連決議一覧、投票記録の一部については以下を参照。

<http://www.jewishvirtuallibrary.org/jsource/UN/gatoc.html>.

81ページ 影響力を持っているからだ

Marc Perelman, "International Agency Eyes Israeli Nukes," *Forward*, September 5, 2003.

82ページ アラブの攻撃の危険を誇張した

マイケル・B・オレンは、この戦争について広範囲に調べあげ、親イスラエルの視点で、*Six Days of War: June 1967 and the Making of the Modern Middle East* (New York: Oxford University Press, 2002) を書いた。説得力のある中立的なものとしては、Roland Popp, "Stumbling Decidedly into the Six Day War," *Middle East Journal* 60, no. 2 (Spring 2006) がある。イスラエル人歴史家による、よりバランスの取れた対応については、Tom Segev, *1967: Israel, the War, and the Year That Transformed the Middle East*, trans. Jessica Cohen (New York: Metropolitan Books, 2007) を参照のこと。

82ページ (ジョンソンの発言)

ウィーラーは、Spiegel, *Other Arab-Israeli Conflict*, 141に引用されている。エバンに対するジョンソンの発言は、Popp, "Stumbling Decidedly into the Six Day War," 304 を参照のこと。「米国政権内には、(アラブの攻撃が差し迫っているという)イスラエルの根拠のない警告に、みな何らかの疑問を持っていた」(302)と、ポップは書いている。ウィリアム・クアントは、CIAとペンタゴンが、「攻撃をしかけたのがどちらであっても、敵対行為が始まればイスラエルが容易に勝利するだろうと確信している」とイスラエル外務大臣アッバ・エバンに告げたと書いている。*Decade of Decisions*, 50.

82ページ 警戒報告を送り続けた

イスラエル政府は5月25日、アラブ攻撃が差し迫っており、イスラエルに対する攻撃は米国に対する攻撃であるも同然だと言質を、大至急、米国から取りつけるよう求める電信をエバン外務大臣とワシントンのハルマン駐米大使に送った。しかし、トム・セゲフが指摘するように、「この晩についてのイスラエル諜報機関の判断は、ワシントンへの電信とはまったく異なっていた。……エシュコル(首相)は明らかにエバンを欺き、エバンを通してジョンソン大統領をも欺こうとしたのだ。それは米国の支援を取りつけるためだった」。エシュコルは、ハルマンへの電報に直筆で「アリバイのため」と書き加えていた。Segev, *1967*, 256-257.

82ページ 戦争を避けようとした

5月26日の晩、エバンと会談したジョンソンが彼に渡した覚書は、「イスラエルが敵対行為開始の責任を負わないようにすることが必要だと強調しなくてはならない。イスラエルが単独で行動しようとしなければ、孤立することはない。イスラエルがそのような決断をするとは想像できな

い」と締めくくられていた。Brecher, *Decisions in Israel's Foreign Policy*, 393から引用した。ジョンソンは、エシュコル宛ての5月28日付の書簡でも同様の警告を繰り返した。

83ページ 事実上イスラエルによる攻撃への“黄色信号”

ウィリアム・クアンドによれば、ジョンソンは「6月5日の朝、戦争勃発というニュースで起こされた時、別段驚く理由もなかった。何と云っても、5月26日の『赤色信号』は黄色に変わったことをイスラエルに請け負っていたのだ……『黄色信号』は6月3日にエシュコル（イスラエル首相）に宛てた書簡で暗に示しており、（アブラハム・）フォータスや（アーサー・）ゴールドバーグの発言の中で繰り返されていた。これは、『気をつけよ』『厄介なことになったからといって米国を頼るな』ということだ。が、ドライバーの多くにとってそうであるように、黄色信号は青色信号と同じなのだ。またクアンドは、「ジョンソンはイスラエルに青色信号を示したわけではなかったが、彼らの行動に対する拒否権は解除していた」とも記している。Peace Process, 38, 41-42; and Cheryl Rubenberg, *Israel and the American National Interest: A Critical Examination* (Urbana: University of Illinois Press, 1986), 120.

83ページ 役割を演じた

オレンの *Six Days of War* の書評で、クアンドはこう記している。「ジョンソンはイスラエルに単独行動をするなど伝え、しばらくの間は、文字通りそういう意味だったようだ。だが、5月末までには、明らかに気が変わっていた。イスラエルはこの変化にいち早く気がついた。彼らにとってはこれが非常に重要で、戦争を決意したのだ。しかし、なぜジョンソンが当初はそれほどまでにためらっていたのか、イスラエルに厳しい姿勢をとっていたのかわからないし、また、なぜその後は気を変えたのかもわからない」。“Book Review: *Six Days of War*,” *Journal of Cold War Studies* 6, no. 4 (Summer 2004): 147. 投書キャンペーンなどジョンソンに対する別の圧力については、Segev, *1967*, 253-254, 264-265, 304を参照のこと。

83ページ ジョンソン政権は……はっきり表明した

Quandt *Peace Process*, 43-44.

83ページ 議論はいまだに続いている

1967年6月8日、6日戦争の最中、イスラエル空軍機と魚雷艇がシナイ半島沖の公海上にいた米海軍調査艦リバティ号を攻撃した。この攻撃により、米国人乗組員34人が死亡し、同艦船にも甚大な被害が生じた。イスラエルは誤認による事故だったと主張して、米国に謝罪し、1300万ドルの賠償金を支払った。生存者、米海軍将校、米政府高官（リチャード・ヘルムズCIA長官、ディーン・ラスク国務長官など）は、この攻撃は意図的だったと確信しており、これに同調する人々は、その後に行われた捜査は通り一遍の不十分なものだったと主張している。その他、イスラエルによる事件の概要を擁護し、これを不運な事件だったと見なすコメントもある。その他の意見については、以下を参照のこと。James Bamford, *Body of Secrets: Anatomy of the Ultra Secret National Security Agency* (New York: Random House, 2002). [邦訳：バムフォード『すべては傍受されている 米国国家安全保障局の正体』瀧澤一郎訳、角川書店、2003年]; A. Jay Cristol, *The Liberty Incident: The 1967 Attack on the U.S. Navy Spy Ship* (Washington, DC: Potomac Books, 2002); James M. Ennes Jr., *Assault on the Liberty: The True Story of an Israeli Attack on an American Intelligence Ship* (Gaithersburg, MD:

Reintree Press, 2003); Oren, *Six Days of War*, 263–271; and Segev, *1967*, 386.

84ページ 受け入れるよう説得を行った

“消耗戦争”を巡る外交上の駆け引きについては、Lawrence Whetten, *The Canal War: Four-Power Conflict in the Middle East* (Cambridge, MA: MIT Press, 1974) に要約されている。イスラエルの視点で参照すべきものとしては、以下を参照のこと。Ya'acov Bar-Siman-Tov, *The Israeli-Egyptian War of Attrition, 1969–1970* (New York: Columbia University Press, 1980); and Jonathan Shimshoni, *Israel and Conventional Deterrence: Border Warfare from 1953 to 1970* (Ithaca: Cornell University Press, 1988), chap. 4.

84ページ 武器提供の“黄金時代”と名付けている

Quandt, *Decade of Decisions*, 147. 以下も参照のこと。Pollock, *Politics of Pressure*, 112–114, 124, 126–127; and Brecher, *Decisions in Israel's Foreign Policy*, 510.

85ページ (キッシンジャーの記述)

Henry Kissinger, *Years of Upheaval* (Boston: Little, Brown, 1982), 468. [邦訳: キッシンジャー 『キッシンジャー激動の時代』(読売新聞・調査研究本部訳、小学館)]

85ページ 補助金をこの支払いにあてた

戦場でイスラエルを優勢にするため、ニクソンとキッシンジャーはエジプトとシリアを説得して停戦を受け入れさせ、ソ連の支援には限界があることを認識させようとした。Quandt, *Peace Process*, 113–115, 118.

85ページ 締めくくるのに役立った

以下を参照のこと。Kenneth W. Stein, *Heroic Diplomacy*, 78–79.

86ページ (スタインの記述)

Kenneth W. Stein, *Heroic Diplomacy*, 86, 90; William Burr, ed., *The October War and U.S. Policy* (Washington, DC: National Security Archive, October 7, 2003); and Quandt, *Peace Process*, 118.

87ページ 軍事的侵攻を続けられるように時間を稼ぐ

“Kissinger Gave Green Light for Israeli Offensive Violating 1973 Cease-Fire,” National Security Archive press release, October 7, 2003; and Quandt, *Peace Process*, 120, 461nn62, 63. ケネス・スタインは、「キッシンジャーはイスラエル指導部に、エジプト第3軍を兵糧攻めにするつもりなら、米国は『手を引く』と告げた。しかし、イスラエルに軍事上の地の利をいかさなとは言わなかった。ダヤンにはあと72時間の猶予が必要だったし、キッシンジャーはこれを黙認した」と書いている。スタインは、「罰せられることはなかったし、キッシンジャーの承認もありイスラエルは停戦決議を破った。キッシンジャーによる承認についてサダトは知らなかった」とも書いている。 *Heroic Diplomacy*, 92.

87ページ 法律になった

以下を参照のこと。“U.S.-Israel Memorandum of Understanding, September 1, 1975”。議会立法 (Section 535, P.L. 98-473、1984年10月12日) には、PLOが「テロを放棄する」条項が追加された。Clyde Mark, “Palestinians and Middle East Peace: Issues for the United States,” *Issue Brief for Congress*, Congressional Research Service, October 24, 2002, 2.

88ページ 成立した協定を……と名付けた

Shlaim, *Iron Wall*, 337-340. スティーヴン・スピーゲルが書いているように、「ここでも米国はイスラエルと統一の戦略を採ることを約束しており、単独でPLOと交渉する余地を制限している」。Other *Arab-Israeli Conflict*, 302. 1984年の議会の動きについては、以下を参照のこと。Clyde Mark, “Israeli-United States Relations,” *Issue Brief for Congress*, Congressional Research Service, April 28, 2005, 9.

88ページ 忠告を与えていた

開戦の口実は、駐英イスラエル大使の暗殺未遂だった。これはイスラエル・レバノン国境の状況と関係がなく、ヤセル・アラファトやファタハではなくアブ・ニダル率いるパレスチナ反体制派が命じたものだったことから、暗殺未遂はヘイグの基準を満たすものではなかった。シュロモ・ベンアミは、ヘイグが「シャロンとの会話で必要以上に曖昧な表現を使っており、イスラエルの政治家がニュアンスや控えめな表現にとりわけ敏感というわけではないことに気がついてはいたはずだ」と述べている。以下を参照のこと。Ben-Ami, *Scars of War*, 179; Quandt, *Peace Process*, 250-251; Ze'ev Schiff, “The Green Light,” *Foreign Policy* 50 (Spring 1983); Ze'ev Schiff and Ehud Ya'ari, *Israel's Lebanon War*, trans. Ina Friedman (New York: Simon & Schuster, 1984), 71-73; Avner Yaniv, *Dilemmas of Security: Politics, Strategy, and the Israeli Experience in Lebanon* (New York: Oxford University Press, 1987), 102-103, 105; and James McCartney, “Officials Say Haig Let Israel Think U.S. Condoned Invasion of Lebanon,” *Philadelphia Inquirer* (online), January 23, 1983.

89ページ 2000人にのぼるといふ

Avi Shlaim, *The Iron Wall*, 416.

89ページ 書かれていなかった

停戦実施までには、イスラエル人の歴史家イタマル・ラビノヴィッチは、「IDFはレバノンのシリア軍を破り、衝突の範囲を狭めることに成功した。……どちらも同じくらい重要で、シリアが早期の停戦を求めたおかげで、イスラエルはバイルートに集中できた。停戦後の数日間で、イスラエルはバイルート南部および東部に侵攻を続け、レバノン軍と領土的につながったのだ」。 *War for Lebanon*, 138.

89ページ (ラビノヴィッチの記述)

ラビノヴィッチはこう続ける。「とくに、6月後半にバイルートの状況が不透明になると、高まる非難の中でこの方針を維持することは徐々に難しくなった。こうした困難によって……政権は確実にイスラエルから距離を置くようになったが、方針の本質は変えなかった」。 *War for Lebanon*, 146.

90ページ (シュルツの記述)

George P. Shultz, *Turmoil and Triumph: My Years as Secretary of State* (New York: Scribner, 1993), 112.

91ページ 唯一の道だと信じていた

Quandt, *Peace Process*, 258–259.

91ページ (キッシンジャーの発言)

Edward R. F. Sheehan, *The Arabs, Israelis and Kissinger: A Secret History of American Diplomacy in the Middle East* (Pleasantville, NY: Reader's Digest Press, 1976), 199.

91ページ そのような態度だった

和平プロセスに関する書籍の中で米国側交渉責任者デニス・ロスは、バラク首相が好んだ交渉戦術をクリントン政権が承諾した例を多数あげている。シリアとの和平条約成立に向けた失敗例がとくに多い。Ross, *Missing Peace*, 530–532, 539, 550–551, 578–580. アガとマレーはキャンプ・デービッドに関する議論で、「しかし結局のところ、こうした疑問の残る戦略的判断のほぼすべてについて、自分のやり方に固執するバラクを、米国はあきらめたか譲歩したかで不承不承諾した」と書いている。“Camp David: The Tragedy of Errors,” 60.

92ページ 米国のこの傾向は.....よく見られた

Ron Pundak, “From Oslo to Taba: What Went Wrong?” *Survival* 43, no. 3 (Autumn 2001): 40–41

92～93ページ 安値ぎりぎりの線を示す

Agha and Malley, “Camp David: The Tragedy of Errors,” 62–63.

93ページ 役目を果たしすぎた

“Lessons of Arab-Israeli Negotiating: Four Negotiators Look Back and Ahead,” パネルディスカッション筆記録, Middle East Institute, April 25, 2005; Nathan Guttman, “U.S. Accused of Pro-Israel Bias at 2000 Camp David,” *Ha'aretz*, April 29, 2005; and Aaron D. Miller, “Israel's Lawyer,” *Washington Post*, May 23, 2005.

93ページ 他のどの国よりも多い

“A History of Foreign Leaders and Dignitaries Who Have Addressed the U.S. Congress,” http://clerk.house.gov/art_history/art_artifacts/foreignleaders.html. 連邦議会で演説を行った最初のイスラエル指導者は、1976年のイツハク・ラビンだ。その他、この時期に国会で複数回の演説を行ったのは、インド（4人）、アイルランド（3人）、イタリア（3人）、韓国（3人）である。48年（イスラエル建国の年）から数えるならば、イスラエルはフランス、イタリアと並んで6回である。

94ページ 並外れた結びつきである

Bard and Pipes, “How Special Is the U.S.-Israel Relationship?” 41.

94ページ これと同意見である

この質問は、「米国の中東方針についてのあなたの意見をお聞きします。公正だと思いますか？それとも親イスラエル、あるいは親パレスチナだと思いますか？」というものだった。Pew Global Attitudes Project, *Views of a Changing World 2003* (Washington, DC: Pew Research Center for the People and the Press, 2003),” 5; and Pew Global Attitudes Project, “Wave 2 Update Survey; 21 Publics Surveyed, Final Topline (2003), T-151, <http://pewglobal.org/reports/pdf/185topline.pdf>.

第二章 イスラエルは戦略上の“資産”か“負債”か？

96ページ 安い買い物だ

以下を参照のこと。A.F.K. Organski, *The \$36 Billion Bargain: Strategy and Politics in U.S. Assistance to Israel* (New York: Columbia University Press, 1990); Steven L. Spiegel, “Israel as a Strategic Asset,” *Commentary*, June 1983; Steven L. Spiegel, *The Other Arab-Israeli Conflict: Making America’s Middle East Policy from Truman to Reagan* (Chicago: University of Chicago Press, 1985); and Steven L. Spiegel, “U.S.-Israel Relations after the Gulf War,” *Jerusalem Letter/ Viewpoints* 117, Jerusalem Center for Public Affairs, July 15, 1991。以下も参照。Steven Rosen, “The Strategic Value of Israel,” *AIPAC Papers on U.S.-Israel Relations* (Washington, DC: American Israel Public Affairs Committee, 1982).

96ページ (ブックバインダーの発言)

Ben Bradlee Jr., “Israel’s Lobby,” *Boston Globe*, April 29, 1984.

96ページ (AIPAC の発言)

以下を参照のこと。

http://aipac.org/Publications/AIPACAnalysesIssueBriefs/The_U.S.-Israel_Strategic_Partnership.pdf; and http://aipac.org/Publications/AIPACAnalysesIssueBriefs/The_U.S.Israel_Relationship.pdf.

96ページ 米国にとって不可欠な構成要素である

Project for the New American Century, “Letter to President Bush on the War on Terrorism,” September 20, 2001, <http://www.newamericancentury.org/Bushletter.htm>; and “Mission Statement,” Jewish Institute for National Security Affairs, <http://www.jinsa.org/about/agenda/agenda.html>.

96ページ (クレイマーの発言)

Martin Kramer, "The American Interest," *Azure* 5767, no. 26 (Fall 2006):24-25.

97ページ (インバルの発言)

Efraim Inbar, "Still a Strategic Asset for the US," *Jerusalem Post*, October 8, 2006.

97ページ ロビー活動の結果であるとも見てはいない

驚くことではないが、スピーゲル、オーガンスキー、クレイマーなどの学者は国内政治やイスラエル支援に関わるロビー団体の影響を軽視するか無視している。オーガンスキーは、「イスラエルに関する米国の方針決定は、主に、大統領と外交エリートによって行われてきた。どちらも自分たち自身の理屈に従って自分たちで決めてきた」と主張する。クレイマーは、「イスラエルのロビー団体が明日なくなるとしても、米国やその他の西洋諸国の支援は衰えそうにない」と言う。スピーゲルは、親イスラエルロビー団体には「伝説」として「多大な影響力」があるという確信について書いている。こうした主張にもかかわらず、スピーゲルの研究には、主だった最終決定者の認識や行為を左右するロビー団体を多数あげている。クレイマー自身の経歴をみれば、彼が自分の論拠を確信していないことがわかる。米国のイスラエル支援を擁護し、それに異議を唱える者に反論するのに相当な時間と努力を費やしているからだ。Organski, *\$36 Billion Bargain*, 27; Spiegel, *Other Arab-Israeli Conflict*, 386, 388; and Kramer, "American Interest," 31.

98ページ 内政上の利益が得られることを知っていたから

複数の学者がトルーマンの決定を幅広く分析し、国内政治の重要性やユダヤ人の見解を敏感に感じ取っていたという様々な結論に達している。トルーマンがパレスチナの複雑な状況を切り開こうとしていたことからすると、これが彼の行動に影響した唯一の要因でないことは明らかで、米国系ユダヤ人の政治的優先（1948年の選挙を控え、優先度は高くなっていた）を十分考慮した結果、その打算に行きついたというのがほぼすべてに共通する結論だ。Spiegel, *Other Arab-Israeli Conflict*, 47-48; Kenneth Ray Bain, *The March to Zion: United States Policy and the Founding of Israel* (College Station: Texas A & M Press, 1979), 195-197, 202; Zvi Ganin, *Truman, American Jewry, and Israel, 1945-1948* (New York: Holmes & Meier, 1979); and Michael B. Oren, *Power, Faith and Fantasy: America in the Middle East 1776 to the Present* (New York: Norton, 2007), 484, 488-489, 499.

98～99ページ ケナンは具体的に……論じている

Jerome Slater, "Ideology vs. the National Interest: Bush, Sharon, and U.S. Policy in the Israeli-Palestinian Conflict," *Security Studies* 12, no. 1 (Autumn 2002): 167.

99ページ 支援するに値すると結論づけた

Warren Bass, *Support Any Friend: Kennedy's Middle East and the Making of the U.S.-Israel Alliance* (New York: Oxford University Press, 2003), 148-149; and David Schoenbaum, *The United States and the State of Israel* (New York: Oxford University Press, 1993), 136-137.

99ページ 有効な方法と見なした

ニクソン、キッシンジャーの戦略は以下にまとめられている。William B. Quandt, *Peace*

Process: American Diplomacy and the Arab-Israeli Conflict in 1967, 3rd ed. (Washington, DC: Brookings Institution Press, 2005), 69–70, 92–94; Henry Kissinger, *White House Years* (Boston: Little, Brown, 1979), 1279, 1289–1291, chap. 10; and Henry Kissinger, *Years of Upheaval* (Boston: Little, Brown, 1982), 195–205. [邦訳：キッシンジャー『キッシンジャー秘録』斎藤弥三郎他訳、小学館、1978年および『キッシンジャー激動の時代』読売新聞・調査研究本部訳、小学館、1982年]

99ページ 危機を処理することも手伝った

1958年のヨルダン危機の際、イスラエルは西洋諸国の航空機のイスラエル領空の飛行を許可し、70年のフセイン国王とPLOの衝突ではシリアの介入に続き、フセインを支援するために介入を要請した米国に同意した。結局、ヨルダン空軍は独自でシリアを攻撃し、シリアはイスラエルが反応するまでもなく撤退した。米国政府高官はどちらにおいてもイスラエルの支持に感謝したが、アラン・ドーティが言うように、70年危機に向けたイスラエルの貢献は「次善策」だった。ナイジェル・アシュトン、この危機の最中フセインはイスラエルを潜在的脅威と見なし、米国政府高官が「実際にはアラブ同士のもめごとにすぎなかった冷戦で勝利したのは、イスラエルが米国に手を貸したからだと考えた」ことを示唆している。Alan Dowty, *Middle East Crisis: Decisionmaking in 1958, 1970, and 1973* (Berkeley: University of California Press, 1984), 177; Nigel J. Ashton, “Pulling the Strings: King Hussein’s Role During the Crisis of 1970 in Jordan,” *International History Review* 28, no. 1 (March 2006): 109; and Quandt, *Peace Process*, 79–83.

100ページ 調査する権限を米国に提供した

Dan Raviv and Yossi Melman, *Friends in Deed: Inside the U.S.-Israel Alliance* (New York: Hyperion, 1994), 66–68, 114–115.

100ページ 単純明快ではない

ベテランの行政管理予算局軍事支援部門長は「戦略的財産」を巡る議論に共感しつつも懐疑的に分析している。Harry Shaw, “Strategic Dissensus,” *Foreign Policy*, 61 (Winter 1985–86).

101ページ 方向転換されたのだ

ガザ攻撃は、エジプトからの侵入者がイスラエル人サイクリストを殺害した事件の報復だったとされているが、イスラエルの士気を高めるためのベングリオンの手口だった、ベングリオンが自らの権力復帰を演出したのだ、大きくなりつつあったナセルの威光を減じるためだったなどの解釈もある。しかし、シュロモ・ベンアミが述べるように、「戦争戦略へのエジプトの関与を終わらせたというより、(ガザ作戦は)それを拡大する結果になった」。Scars of War, *Wounds of Peace: The Israeli-Arab Tragedy* (New York: Oxford University Press, 2006), 77; Avi Shlaim, *The Iron Wall: Israel and the Arab World* (New York: Norton, 2001), 123–129; Michael Brecher, *Decisions in Israel’s Foreign Policy* (New Haven: Yale University Press, 1975), 254–255, esp. note 1; and E.L.M. Burns, *Between Arab and Israeli* (New York: Ivan Obolensky, 1963), 20. この時期、同様の理由でシリアもソ連製武器を入手したいと考えており、とりわけ1955年12月のイスラエルの強硬襲撃によって、支援を求める要望は強くなった。Stephen M. Walt, *The Origins of Alliances* (Ithaca: Cornell University Press, 1987), 62,

esp. note 36.

101ページ 懐疑心を抱きながらであってもだ

アラブ同盟諸国とのソ連の不穏な関係については、以下を参照のこと。Mohamed Heikal, *The Sphinx and the Commissar: The Rise and Fall of Soviet Influence in the Middle East* (New York: Harper, 1976); Alvin Z. Rubinstein, *Red Star on the Nile: The Soviet-Egyptian Influence Relationship Since the June War* (Princeton: Princeton University Press, 1977); and Ya'acov Roi, ed., *From Encroachment to Involvement: A Documentary Study of Soviet Foreign Policy in the Middle East, 1945–1973* (New Brunswick, NJ: Transaction Books, 1974).

102ページ 合図を送っていたことだ

この点で説得力のある議論としては、以下を参照のこと。Jerome Slater, “The Superpowers and an Arab-Israeli Political Settlement: The Cold War Years,” *Political Science Quarterly* 105, no. 4 (Winter 1990–91).

102ページ (キッシンジャーの発言)

“Kissinger Memorandum: ‘To Isolate the Palestinians,’” MERIP Reports no. 96 (May 1981): 24. これはキッシンジャーといわゆるクルツニック・グループとの間で1975年に交わされた会話のメモである。クルツニック・グループとは、“ブナイ・ブリス” B'nai B'rith Internationalの前会長で、元米国商務長官でもあったフィリップ・クルツニックを中心としたユダヤ系米国人団体である。以下も参照のこと。Quandt, *Peace Process*, 103–104.

102ページ (マクディーシの発言)

Ussama Makdisi, “‘Anti-Americanism’ in the Arab World: An Interpretation of a Brief History,” *Journal of American History* 89, no. 2 (September 2002): 538–539. 議会調査サービスのアルフレッド・ブラドスは、「中東に遅れて乗り込んできた米国は、欧州諸国が19世紀から20世紀初頭にかけて築き上げた以上の好印象をこの地域で勝ち得ている」と述べ、同意している。“Middle East: Attitudes toward the United States,” *Report for Congress*, Congressional Research Service, December 31, 2001, 2.

103ページ 手を貸してしまったのである

Shibley Telhami, *The Stakes: America and the Middle East* (Boulder, CO: Westview, 2002), 50–59; and Makdisi, “‘Anti-Americanism’ in the Arab World,” 548–550.

103ページ (ショーの発言)

Shaw, “Strategic Dissensus,” 137.

104ページ (ダヤンの発言)

Moshe Dayan: Story of My Life (New York: William Morrow, 1976), 512–513. [邦訳：ダヤン『イスラエルの鷹 モシエ・ダヤン自伝』込山敬一郎訳、読売新聞社、1978年]

104ページ 深刻な懸念が生じた

「石油という武器」による総コストは巨額だった。インフレ、実質歳入、生産性向上に長期的な影響を与えただけでなく、投資、為替変動、その他の要因に間接的な影響を及ぼしたからだ。しかし、こうした影響の大きさについては経済学者の間でも大きく意見が分かれる。石油輸入については、以下を参照のこと。Dominick Salvatore, “Petroleum Prices and Economic Performance in the G-7 Countries,” in Siamack Shojai and Bernard S. Katz, eds., *The Oil Market in the 1980s: A Decade of Decline* (New York: Praeger, 1992), 94; and Mancur Olson, “The Productivity Slowdown, the Oil Shocks and the Real Cycle,” *Journal of Economic Perspectives* 2, no. 4 (Fall 1988): 43–69. OECD諸国のコストとしては、石油純輸入高が1973年の350億ドルから1974年には1000億ドル超に押し上がったことだ。以下を参照のこと。Robert J. Lieber, *The Oil Decade: Conflict and Cooperation in the West* (New York: Praeger, 1983), 21. GDP予測は、連邦エネルギー庁および複数の経済学者のものである。以下を参照のこと。Edward N. Krapels, *Oil Crisis Management: Strategic Stockpiling for International Security* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1980), 34; and Fiona Venn, *The Oil Crisis* (London: Longman, 2002), 154–155. 2000年に相当するドル換算には、以下のデータを使用した。Louis D. Johnston and Samuel H. Williamson, “The Annual Real and Nominal GDP for the United States, 1790–Present,” Economic History Services, October 2005.

105ページ (元CIA職員の発言)

Jeffrey Richelson, *The U.S. Intelligence Community*, 2nd ed. (Cambridge, MA: Ballinger, 1989), 277.

106ページ ナセルにもっと圧力を加える

Roland Popp, “Stumbling Decidedly into the Six Day War,” *Middle East Journal* 60, no. 2 (Spring 2006): 300に引用されている。トム・セゲフはロストウの評価は基本的に正しかったと認めている。Segev, *1967: Israel, the War and the Year That Transformed the Middle East*, trans. Jessica Cohen (New York: Metropolitan Books, 2007), 256–258.

106ページ 誤算する原因をつくったのだ

以下を参照のこと。Shlomo Brom, “The War in Iraq: An Intelligence Failure,” *Strategic Assessment* (Jaffee Center for Strategic Studies, Tel Aviv University) 6, no. 3 (November 2003); “Selections from the Media, 1998–2003,” *ibid.*, 17–19; Gideon Alon, “Report Slams Assessment of Dangers Posed by Libya, Iraq,” *Ha’aretz*, March 28, 2004; Dan Baron, “Israeli Report Blasts Intelligence for Exaggerating the Iraqi Threat,” *JTA.org*, March 28, 2004; Greg Myre, “Lawmakers Rebuke Israeli Intelligence Services over Iraq,” *New York Times*, March 29, 2004; and James Risen, *State of War: The Secret History of the CIA and the Bush Administration* (New York: Simon & Schuster, 2006), 72–73. [邦訳：ライゼン『戦争大統領 CIAとブッシュ政権の秘密』伏見威蕃訳、毎日新聞社、2006年]

106ページ コストを低く見積もっている

Kramer, “American Interest,” 24–25.

107ページ あり得ないことを認識していた

ショーは、「たとえ短期で終わった勝利戦だったとしても、犠牲者を出したことはわずか400万人の国としては負担だったと、すべてのイスラエル人が鋭く感じている。コストをかけて隣国より遠くへ軍事侵攻に出かけ、犠牲にしてもよいような要員などイスラエルにはいない」とも書いている。“Strategic Dissensus,” 130.

107ページ (国防総省元職員の証言)

以下を参照のこと。Duncan L. Clarke, Daniel B. O'Connor, and Jason D. Ellis, *Send Guns and Money: Security Assistance and U.S. Foreign Policy* (Westport, CT: Praeger, 1997), 173. 別の国防総省職員は、イスラエルが「書面で考える場合は別にして、湾岸に隣接しているというだけでは戦闘拠点としては物足りない。実際に軍事的な不測事態が起きる場合に備えて、私たちはもっと近くにいる必要がある。だからこそ、オマーンに基地を置くよう前進したいと考えている」と記している。イスラエルの貢献としては整備と、医療施設を提供する可能性に留まるだろう。Joe Stork, “Israel as a Strategic Asset,” in MERIP Reports no. 105, *Reagan Targets the Middle East* (May 1982), 12.

108ページ (ショーの記述)

Shaw, “Strategic Dissensus,” 133.

108ページ 演じる役どころはなかった

アーネスト・ウィル作戦に関する議論については、以下を参照のこと。

www.globalsecurity.org/military/ops/earnest_will.htm; and Dilip Hiro, *The Longest War: The Iran-Iraq Military Conflict* (New York: Routledge, 1991), 129–132, 166, 186–191, 202–204.

109ページ (キッシンジャーの発言)

“Kissinger Memorandum,” 25.

109ページ 人道的意見を引き合いに出した

1980年の選挙運動中、レーガンは米国ユダヤ人報道協会 (American Jewish Press Association) で、「イスラエルは米国にとって戦略上の資産であり、私たちはこの点を明確にした方針を持つべきだと確信している」と発言した。Stork, “Israel as a Strategic Asset,” 3; and Ronald Reagan, *An American Life* (New York: Simon & Schuster, 1990), 410. [邦訳: レーガン『わがアメリカンドリーム レーガン回想録』尾崎浩訳、読売新聞社、1993年]

110ページ 米国政治におけるユダヤ人社会の大きな役割

後者の要素について、フェルドマンは、「この現象を最も表しているものは、大きな影響力を持つ米国イスラエル広報委員会 (AIPAC) の独特な役割だ」と述べている。Feldman, *The Future of U.S.-Israel Strategic Cooperation* (Washington, DC: Washington Institute for Near East Policy, 1996), 5–6.

111ページ (アートの記述)

以下を参照のこと。Bernard Lewis, "Rethinking the Middle East," *Foreign Affairs* 71, no. 4 (Fall 1992):110–111; Bernard Reich, *Securing the Covenant: United States-Israeli Relations After the Cold War* (Westport, CT: Praeger, 1995), 123; and Robert J. Art, *A Grand Strategy for America* (Ithaca: Cornell University Press, 2003), 137.

111ページ “厄介者” と言う人さえいる

ワルデグレイブは、David Kimche, *The Last Option: After Nasser, Arafat, and Saddam Hussein, the Quest for Peace in the Middle East* (New York: Scribner, 1991), 236; Lewis, "Re-thinking the Middle East," 110–111に引用されている。2003年の第2次湾岸戦争で、歴史が繰り返された。米国はこの予防戦争を正当なものに見せるため、大規模な連合軍を組織する必要があった。そのため、「自発的な連合軍」に軍隊を派遣するよう数々の国を説得するのに時間を費やした。しかし、指導層や国民がこの戦争を強く支持していたにもかかわらず、イスラエルはこの対象国から除外されていた。この点については第8章で取り上げる。

112ページ 負傷者1498人と急増する

データは、Memorial Institute for the Prevention of Terrorismのデータベースに依拠した。
www.tkb.org.

112ページ 始まっていなかったのだ

ダニエル・ベンジャミンとスティーブン・サイモンは、クリントン政権の複数の閣僚がテロ対策を重視していたことを示しているが、1990年代はこの優先事項を実施することがいかに困難であったかについてもまとめている。彼らいわく、「これが困難であったのは、テロを第一級の脅威だと見なしてこなかった政府には、この脅威を担当する組織も法律もなかったからだ。多くの組織においてテロ対策担当部局は官僚の職場としては僻地で、そうした部署のマネージャーには地理的領域や武器管理といった注目を浴びる問題を担当する部局のような影響力などなかった」。ブッシュ政権が就任した際、テロリズムを重視していなかったことも興味深い。以下を参照のこと。Daniel Benjamin and Steven Simon, *The Age of Sacred Terror* (New York: Random House, 2002), 221, 327–329; and Richard A. Clarke, *Against All Enemies: Inside America's War on Terror* (New York: Free Press, 2004), 227–236. [邦訳：クラーク『爆弾証言 9・11からイラク戦争へ すべての敵に向かって』楡井浩一訳、徳間書店、2004年]

112ページ たった3%にすぎなかった

言い換えると、米国の防衛予算はこの4カ国の経済活動合計の半分を超える（購買力平価にもとづいて測定）。数値については以下を参照した。*The Military Balance 2000–2001* (London: International Institute for Strategic Studies, 2001); and Central Intelligence Agency, *World Factbook 2000* (online).

113ページ 真剣に行われたが成功しなかった

対イラク、対イランの米国方針、また、ならず者国家一般に対する方針を鋭く分析したものとしては以下がある。Robert Litwak, *Rogue States and U.S. Foreign Policy: Containment after the Cold War* (Washington, DC: Woodrow Wilson Center Press, 2000).

[邦訳：リトワク『アメリカ「ならず者国家」戦略』佐々木洋訳、窓社、2002年] .
共和党優勢の議会はイラン、イラクに対する強硬方針に賛同し、厳しい制裁や反体制派の亡命者を支持するように投票することがあるが、クリントン政権が真剣に体制変更を求めたことはない。

113ページ 多国間外交交渉を通じて行われたものだった

以下を参照のこと。Bruce W. Jentleson and Christopher A. Whytock, “Who ‘Won’ Libya? The Force-Diplomacy Debate and Its Implications for Theory and Policy,” *International Security* 30, no. 3 (Winter 2005–2006); Ronald Bruce St. John, “Libya Is Not Iraq: Preemptive Strikes, WMD, and Diplomacy,” *Middle East Journal* 58, no. 3 (Summer 2004); and Flynt Leverett, “Why Libya Gave Up on the Bomb,” *New York Times*, January 23, 2004.

113ページ 本質的に重みが増す

Litwak, *Rogue States and U.S. Foreign Policy*, 168–169.

115ページ (シャロンの発言)

シャロンについては、William Safire, “Israel or Arafat,” *New York Times*, December 3, 2001、某高官については、Robert G. Kaiser, “Bush and Sharon Nearly Identical on Mideast Policy,” *Washington Post*, February 9, 2003 にそれぞれ引用されている。以下も参照のこと。Nathan Guttman, “A Marriage Cemented by Terror,” *Salon.com*, January 24, 2006.

116ページ (ネタニヤフの記述)

以下を参照のこと。“Netanyahu Speech Before the U.S. Senate,” April 10, 2002, www.netanyahu.org/netspeacins.html; and Benjamin Netanyahu, “Three Principles Key to Defeat of Terrorism,” *Chicago Sun-Times*, January 7, 2002.

116ページ (バラクの発言)

以下を参照のこと。Ehud Barak, “Democratic Unity Is the Only Answer to Terrorism,” *Times* (London), September 13, 2001.

116ページ (オルメルトの発言)

以下を参照のこと。“Entire Text of Olmert Speech to Congress,” *Jerusalem Post*, May 24, 2006.

117ページ (サトロフの記述)

以下を参照のこと。Robert Satloff, “Israel’s Not the Issue, Pass It On,” *Los Angeles Times*, October 10, 2001.

117ページ (シューマーの発言)

以下を参照のこと。“Peace Can Only Come Once the US Gives Israel the Green Light to Eliminate Hamas and the Hezbollah,” press release, Office of Charles Schumer, U.S.

Senate, December 3, 2001,

www.senate.gov/~schumer/1-Senator%20Schumer%20Website%20Files/pressroom/press_releases/PR00766.html.

117ページ 共通の戦いに取り組んでいる

以下を参照のこと。HR Res. 392 (May 2, 2002); and S Res. 247 (April 22, 2002).

117ページ 両国にとって共通であることが強調された

ある発言によると、「複数の発言者が即座に対処すべき問題としてアラファトを槍玉にあげたとしても、イラン、イラク、シリアも含めたより大きな『軍事連合』においては、アラファトも1人のパートナーとして描かれていた……こうした脅威を緩和するという点では、体制変革は好ましい選択肢だった」。Dana Hearn, “AIPAC Policy Conference, 21–23 April, 2002,” *Journal of Palestine Studies* 31, no. 4 (Summer 2002):67–68.

118ページ (ブッシュ大統領への公開書簡)

“Letter to President Bush on Israel, Arafat, and the War on Terrorism,” Project for the New American Century, April 3, 2002,

www.newamericancentury.org/Bushletter-040302.htm. この公開書簡を中心となって書いたのはウィリアム・クリストルで、イスラエルによるレバノン2006年戦争の最中、「シリアとイランはイスラエルの敵だが米国の敵でもある。これは私たちの戦争でもある」と結び、同様の見解を披露した。William Kristol, “It’s Our War,” *Weekly Standard*, July 24, 2006.

120ページ 目下のところハマスは米国を標的にしてはいない

マオズとシールについては、Susan Taylor Martin, “Experts Disagree on Dangers of Syria,” *St. Petersburg Times* (online), November 3, 2002に引用されている。以下も参照のこと。Benjamin and Simon, *Age of Sacred Terror*, 194.

121ページ イスラエルは無慈悲に弾圧している

いくつか研究はあるが、なかでも、Tanya Reinhart, *Israel/Palestine: How to End the War of 1948*, expanded 2nd ed. (New York: Seven Stories Press, 2005); and Tanya Reinhart, *The Road Map to Nowhere: Israel/Palestine Since 2003* (London: Verso, 2006) を参照のこと。

121ページ 反撃するときの普通のやり方だ

ロバート・ペイブがもっとも示したように、自爆テロは様々な政治運動が利用した戦術だ。通常、これを利用するのは弱者で、彼らテロリストが違法だと見なしている占領に関わる民主的な相手側を打倒するためだ。Robert A. Pape, *Dying to Win: The Strategic Logic of Suicide Terrorism* (New York: Random House, 2005).

122ページ (ポドレーツの発言)

以下を参照のこと。Satloff, “Israel’s Not the Issue”; Kramer, “American Interest,” 29; Norman Podhoretz, “Israel Isn’t the Issue,” *Wall Street Journal*, September 20, 2001;

Norman Podhoretz, "World War IV: How It Started, What It Means, and Why We Have to Win," *Commentary*, September 2004; Andrea Levin, "Don't Scapegoat Israel," *Boston Globe*, October 6, 2001; and Dennis Ross, "Bin Laden's Terrorism Isn't About the Palestinians," *New York Times*, October 12, 2001. 私たちの最初の原稿に対してこの点を指摘したものとしては、他にも以下のようなものがある。Alan Dershowitz, "Debunking the Newest-and Oldest-Jewish Conspiracy: A Reply to the Mearsheimer-Walt 'Working Paper,'" John F. Kennedy School of Government Faculty Research Working Paper, Harvard University, April 2006, 29; Marc Landy, "Zealous Realism: Comments on Mearsheimer and Walt," *Forum* (Berkeley Electronic Press) 4, issue 1, article 6 (2006); and Steven Simon, "Here's Where 'The Israel Lobby' Is Wrong," *Daily Star*, May 4, 2006.

123ページ だが中心にある不満だ

Abdel Mahdi Abdallah, "Causes of Anti-Americanism in the Arab World: A Socio-Political Perspective," *Middle East Review of International Affairs* 7, no. 4 (December 2003).

123ページ イスラエルを支援するからである

1948年に訪米した際にクトゥブの米国の印象はできあがったが、彼は66年、エジプト政府によって処刑された。Yvonne Y. Haddad, "Sayyid Qutb: Ideologue of Islamic Revival," in *Voices of Resurgent Islam*, ed. John Esposito (New York: Oxford University Press, 1983), 67-98.

123～124ページ (ファドララーの発言)

Makdisi, "Anti-Americanism' in the Arab World," 555.

125ページ 私にいろいろと語りかけた

以下を参照のこと。Steve Coll, *Ghost Wars: The Secret History of the CIA, Afghanistan, and Bin Laden, from the Soviet Invasion to September 10, 2001* (New York: Penguin Press, 2004), 250-251, 273; and "Transcript: The Yasin Interview," *60 Minutes*, June 2, 2002, www.cbsnews.com/stories/2002/06/02/60minutes/printable510847.shtml.

125ページ (シヨアーの発言)

Anonymous [Michael Scheuer], *Through Our Enemies' Eyes: Osama bin Laden, Radical Islam, and the Future of America* (Washington, DC: Brassey's, 2002), 87.

125ページ (ビン・ラディンの母親の発言)

Lawrence Wright, *The Looming Tower: Al Qaeda and the Road to 9/11* (New York: Knopf, 2006), 75-76.

125～126ページ (ローレンスの説明)

Messages to the World: The Statements of Osama bin Laden, ed. Bruce Lawrence (London: Verso, 2005), 4. [邦訳：ローレンス編『オサマ・ビン・ラディン発言』鈴木主税・中島由華訳、河出書房新社、2006年]

126ページ “米国とイスラエルの共謀”だと非難している

Benjamin and Simon, *Age of Sacred Terror*, 140–141.

126ページ (ビン・ラディンの発言)

Osama bin Laden, “From Somalia to Afghanistan” (March 1997), in Lawrence, *Messages to the World*, 46. [邦訳：ローレンス編『オサマ・ビン・ラディン発言』]

イスラエルを支援していた米国に対する 9・11 以前の糾弾でこれ以外のものとして、また、米国がイスラエルと共謀していると非難するものとしては、同文献所収の以下を参照のこと。

“Declaration of Jihad” (August 23, 1996), 30; “The World Islamic Front” (February 23, 1998), 60–61; “A Muslim Bomb” (December 1998), 66–70。以下も参照のこと。“Jihad against Jews and Crusaders” and “New Osama bin Laden Video Contains Anti-Israel and Anti-American Statements”。名誉毀損防止連盟 (ADL) のウェブサイトに掲載されている。

www.adl.org/terrorism_america/bin_l_print.asp.

126ページ (ローデンベックの記述)

Max Rodenbeck, “Their Master’s Voice,” *New York Review of Books*, March 9, 2006, 8. 書評にあげられている2冊は、Peter L. Bergen, *The Osama bin Laden I Know: An Oral History of al Qaeda’s Leader* (New York: Free Press, 2006), and Lawrence, *Messages to the World*. [邦訳：ローレンス編『オサマ・ビン・ラディン発言』]

127ページ イスラエルを支援することを罰したかった

“Outline of the 9/11 Plot,” Staff Statement no. 16, National Commission on Terrorist Attacks Upon the United States, June 16, 2004, 18. 以下も参照のこと。Nathan Guttman, “Al-Qaida Planned Attacks during PM’s Visit to White House,” *Ha’aretz*, June 17, 2004; and Marc Perelman, “Bin Laden Aimed to Link Plot to Israel,” *Forward*, June 25, 2004.

127ページ 再び作戦を早めようと試みた

“Outline of the 9/11 Plot,” 18.

127ページ 米国の政策の源と受け取られていたからだ

“Outline of the 9/11 Plot,” 4.

127～128ページ (9・11調査委員会)

The 9/11 Commission Report: Final Report of the National Commission on Terrorist Attacks Upon the United States (New York: Norton, 2004), 145, 147.

128ページ はっきりと目に見えるようになったことがあげられる

第1次インティファダについては、以下を参照のこと。Joost R. Hiltermann, *Behind the Intifada: Labor and Women’s Movements in the Occupied Territories* (Princeton: Princeton University Press, 1991); *Intifada: The Palestinian Uprising Against Israeli Occupation*, ed. Zachary Lockman and Joel Beinin (Boston: South End Press, 1989); Benny Morris, *Righteous Victims: A History of the Zionist-Arab Conflict, 1881–2001* (New York: Vintage,

2001), chap. 12; and Ze'ev Schiff and Ehud Ya'ari, *Intifada: The Palestinian Uprising, Israel's Third Front*, ed. and trans. Ina Friedmann (New York: Simon & Schuster, 1991).

128ページ こうした理由があつたことだ

Michael Slackman, "As Crowds Demand Change, Lebanese Premier Is Puzzled," *New York Times*, December 11, 2006.

129ページ 58%の差があつた

Pew Global Attitudes Project, *A Year After Iraq War: Mistrust of America in Europe Even Higher, Muslim Anger Persists* (Washington, DC: Pew Research Center for the People and the Press, March 16, 2004), 21.

129ページ (全世界意識調査の報告)

Pew Global Attitudes Project, *What the World Thinks in 2002* (Washington, DC: Pew Research Center for the People and the Press, December 2002), 54.

129ページ

Shibley Telhami, *The Stakes: America and the Middle East* (Boulder, CO: Westview Press, 2002), 96. 以下も参照のこと。Ami Eden, "9/11 Commission Finds Anger at Israel Fueling Islamic Terrorism Wave," *Forward*, July 30, 2004.

129ページ (マクディーシの記述)

マクディーシはこう続ける。「アラブ世界の反米主義について解説したもののうち、アラブがイスラエルをどのように理解しているかについて正面から取り上げていないものは、その本質や根深さ、米国に向けられたアラブの怒りの激しさを伝えることはできない。」

"'Anti-Americanism' in the Arab World," 552.

130ページ イスラエル支援に対する見方は非常に否定的だ

以下を参照のこと。"Impressions of America 2004: How Arabs View America, How Arabs Learn About America" (Washington, DC: Zogby International, June 2004), 3-5; "Five Nation Survey of the Middle East" (Washington, DC: Arab-American Institute/ Zogby International, December 2006), 4; and Prados, "Middle East: Attitudes Toward the United States," 8.

130ページ (イエメン人のある客員物理学者の発言)

Peter Ford, "Why Do They Hate Us?" *Christian Science Monitor*, September 27, 2001.

130ページ (9・11調査委員会の報告)

Report of the Defense Science Board Task Force on Strategic Communication (Washington, DC: Office of the Undersecretary of Defense for Acquisition, Technology, and Logistics, September 2004), 40; and *9/11 Commission Report*, 376.

130ページ (ゾグビー・インターナショナルの調査報告)

“Impressions of America 2004: A Six Nation Survey” (Washington, DC: Zogby International, 2004); Shibley Telhami, “Arab Public Opinion: A Survey in Six Countries,” *San Jose Mercury* (online), March 16, 2003; John Zogby, *The Ten Nation Impressions of America Poll* (Utica, NY: Zogby International, April 11, 2002); and Shibley Telhami, “Arab Attitudes Towards Political and Social Issues, Foreign Policy, and the Media.” 2005年10月、アンワール・サダト・平和発展講座 (Anwar Sadat Chair of Peace and Development) メリランド大学、ゾグビー・インターナショナルによって行われた世論調査。
www.bsos.umd.edu/sadat/pub/survey-2005.htm.

130～131ページ (諮問グループの報告)

Changing Minds, Winning Peace: A New Strategic Direction for U.S. Public Diplomacy in the Arab and Muslim World, Report of the Advisory Group on Public Diplomacy for the Arab and Muslim World (アラブとイスラム教徒にとっての開かれた外交に関する諮問団体の報告書) 2003年10月1日、米国議会下院歳出委員会に提出されたもの。以下も参照のこと。Pew Global Attitudes Project, *Views of a Changing World 2003: War With Iraq Further Divides Global Publics* (Washington, DC: Pew Research Center for the People and the Press, June 3, 2003).

131ページ (ムバラクの発言)

Warren Hoge, “U.N. Distances Itself from an Envoy’s Rebuke of Israel and the U.S.,” *New York Times*, April 24, 2004; “Brahimi’s Israel Comments Draw Annan, Israeli Fire,” *Ha’aretz*, April 23, 2004; and “Egyptian Prez: Arabs Hate US,” www.cbsnews.com/stories/2004/04/20/world/printable612831.shtml.

131ページ (アブドゥラー2世の発言)

David Shelby, “Jordan’s King Abdullah Stresses Urgency of Mideast Peace Process,” March 7, 2007, <http://usinfo.state.gov/>.

136ページ (ブッシュの発言)

“President Discusses War on Terror and Operation Iraqi Freedom,” Cleveland, Ohio (White House, Office of the Press Secretary, March 20, 2006).

137ページ (クラウトハマーの発言)

Charles Krauthammer, “The Tehran Calculus,” *Washington Post*, September 15, 2006; Bernard Lewis, “August 22,” *Wall Street Journal*, August 8, 2006. イスラエルの学者2人による同様の見解については、以下を参照のこと。Yossi Klein Halevi and Michael B. Oren, “Contra Iran,” *New Republic*, February 5, 2007. サダム・フセインも不合理な人物で、核による抑止は効果がなかったという議論としては、以下を参照のこと。Kenneth M. Pollack, *The Threatening Storm: The Case for Invading Iraq* (New York: Random House, 2002).

138ページ 実際は慎重なことがやがて判明した

核を入手するまでは、毛沢東は核戦争について関心がないような発言をしていたが、これは他の核所有国が中国政府に圧力をかけないようにするためだった。以下を参照のこと。Alice Langly Hsieh, *Communist China's Strategy in the Nuclear Era* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1962)。ラスクの発言は、*The China Reader*, Vol. 3: *Communist China*, ed. Franz Schurmann and Orville Schell (New York: Vintage, 1967), 508で見ることができる。ソ連に関する典型的な発言は、Richard Pipes, "Why the Soviet Union Thinks It Can Fight and Win a Nuclear War," *Commentary*, July 1977に拠る。

139ページ 同様の手紙を書いた

英国外交官の書簡については、以下を参照のこと。"Doomed to Failure in the Middle East," *Guardian*, April 27, 2004。以下も参照。Nicholas Blanford, "US Moves Inflamm Arab Moderates," *Christian Science Monitor*, April 26, 2004; Rupert Cornwell, "Allies Warn Bush That Stability in Iraq Demands Arab-Israeli Deal," *Independent*, June 10, 2004; Glenn Kessler and Robin Wright, "Arabs and Europeans Question 'Greater Middle East' Plan," *Washington Post*, February 22, 2004; and Robin Wright and Glenn Kessler, "U.S. Goals for Middle East Falter," *Washington Post*, April 21, 2004。米国の書簡は、www.wrmea.com/letter_to_bush.htmlで見ることができる。

139ページ (シフの発言)

Ze'ev Schiff, "Fitting into America's Strategy," *Ha'aretz*, August 1, 2003。

140ページ (ある外交官の発言)

Jay Solomon, "Religious Divide: To Contain Iran, U.S. Seeks Help from Arab Allies," *Wall Street Journal*, November 24, 2006。

140ページ (超党派イラク研究グループの報告)

James A. Baker III and Lee H. Hamilton, co-chairs, *The Iraq Study Group Report* (Washington, DC: U.S. Institute of Peace, December 2006), 39

141ページ 米国の全体的利益にとっては有害だった

ラヴォン事件については、Schoenbaum, *The United States and the State of Israel*, 107–108を参照のこと。イスラエルとイランの様々な取引については、以下を参照。"Israel-Iran Oil Deal Disclosed and Tied to Captives," *New York Times*, December 20, 1989; Youssef M. Ibrahim, "Oil Sale Disclosure Upsets Israeli-Iranian Contacts," *New York Times*, December 21, 1989; Bishara Bahbah, "Arms Sales: Israel's Link to the Khomeini Regime," *Washington Report on Middle East Affairs* (online) January 1987; and Benjamin Beit-Hallahmi, *The Israeli Connection: Who Israel Arms and Why* (New York: Pantheon Books, 1987), 3–22, 108–175。レーガン政権は、悪評高いイラン・コントラ疑惑の一環で武器を提供していたが、この秘密作戦はレバノンで人質となっていた米国人を確実に解放させるためだった。この計画が暴露されると、米国の様々な利益に反すると見なされた。

141ページ (国務省査察官の報告)

Duncan L. Clarke, "Israel's Unauthorized Arms Transfers," *Foreign Policy* 99 (Summer 1995):94.

142ページ (会計検査院の報告)

Richard C. Stiener, "Foreign Military Aid to Israel: Diversion of U.S. Funds and Circumvention of U.S. Program Restrictions," 米国議会下院エネルギー通商委員会、監視調査小委員会での証言、(Washington, DC: U.S. General Accounting Office, October 1993), 22. 以下も参照のこと。Edward T. Pound, "Israel Is Impeding U.S. Dotan Probe, Documents Show," *Wall Street Journal*, July 29, 1992; and Edward T. Pound, "U.S. Says Israel Withheld Help in Dotan Probe," *Wall Street Journal*, July 25, 1992.

142ページ (ファイスの発言)

この長期に及んだ議論については、以下を参照のこと。Aluf Benn and Amnon Barzilai, "Pentagon Official Wants Yaron Fired," *Ha'aretz*, December 16, 2004; Caroline B. Glick and Arieh O'Sullivan, "Pentagon Denies It Wants Yaron Dismissed," *Jerusalem Post*, December 16, 2004; Nina Gilbert, "Yaron Won't Give Info on Arms Sales to China," *Jerusalem Post*, December 30, 2004; "Israeli, U.S. Talks on Weapons Deals with China End Without Result," *Ha'aretz*, June 29, 2005; Marc Perelman, "Spat Over Sales of Weapons Chilling Ties Between Jerusalem and Beijing," *Forward*, December 24, 2004; Marc Perelman, "China Crisis Straining U.S.-Israel Ties," *Forward*, August 5, 2005; Marc Perelman, "Israel Miffed over Lingering China Flap," *Forward*, October 7, 2005; Ze'ev Schiff, "U.S.-Israel Crisis Deepens over Defense Exports to China," *Ha'aretz*, July 27, 2005; and Janine Zacharia, "'Something Wrong' in US-Israeli Military Ties as Split Deepens on China," *Jerusalem Post*, December 26, 2004.

142ページ 何かずいぶん悪くなりつつある

Zacharia, "US-Israeli Military Ties."

142ページ スパイ活動を米国に対して行っている

Duncan L. Clarke, "Israel's Economic Espionage in the United States," *Journal of Palestine Studies* 27, no. 4 (Summer 1998): 21. 以下も参照のこと。Bob Drogin and Greg Miller, "Israel Has Long Spied on U.S. Say Officials," *Los Angeles Times*, September 3, 2004; "FBI Says Israel a Major Player in Industrial Espionage," *Jewish Bulletin* (online), January 16, 1998; Mark, "Israeli-United States Relations," November 9, 2004, 14-15; and Joshua Mitnick, "U.S. Accuses Officials of Spying," *Washington Times*, December 16, 2004.

142ページ (ポラード事件)

ジャーナリスト、セイモア・ハーシュは、イスラエルが盗み出した情報の一部をソ連に手渡したのは、ソ連のユダヤ人の出国ビザを得るためだったと主張している。この主張に異議を唱える者もいるが、ハーシュは自説を貫いた。Seymour M. Hersh, *The Samson Option: Israel's Nuclear Arsenal and American Foreign Policy* (New York: Random House, 1991), 285-305. [邦訳: ハーシュ『サムソン・オプション』]; and Seymour M. Hersh, "Why Pollard Should

Never Be Released,” *New Yorker*, January 18, 1999.

143ページ イスラエルを米国内で2番目に活発に活動している外国諜報機関

これらの事件については、Edward T. Pound and David Rogers, “Inquiring Eyes: An Israeli Contract with a U.S. Company Leads to Espionage,” *Wall Street Journal*, January 17, 1992を参照のこと。

143ページ 公判に入る予定になっている

フランクリン事件の概要については、Jeffrey Goldberg, “Real Insiders: A Pro-Israel Lobby and an F.B.I. Sting,” *New Yorker*, July 4, 2005 を参照のこと。ローゼンとワイスマンは容疑を否認し、この事件はいまだに係争中である。

第三章 道義的根拠も消えてゆく

145～146ページ (ブッシュの演説)

“President Speaks to the American Israel Public Affairs Committee,” Washington Convention Center, Washington, DC (White House, Office of the Press Secretary, May 18, 2004).

147ページ (ウィゼールの発言)

Mark Chmiel, “Elie Wiesel and the Question of Palestine,” *Tikkun.org*, November/December 2002.

147ページ 『エクソダス』の描く物語が……根強く影響を与えている

Paul Breines, *Tough Jews: Political Fantasies and the Moral Dilemma of American Jewry* (New York: Basic Books, 1990), 54–59; Michelle Mart, *Eye on Israel: How America Came to View Israel as an Ally* (Albany: State University of New York Press, 2006), 169–174; Melani McAlister, *Epic Encounters: Culture, Media, and U.S. Interests in the Middle East, 1945–2000* (Berkeley: University of California Press, 2001), 159–165; Edward Tivnan, *The Lobby: Jewish Political Power and American Foreign Policy* (New York: Simon & Schuster, 1987), 50–51; and David Twersky, “Novelist Leon Uris Taught Jewish Readers to Stand Tall,” *Forward*, June 27, 2003.

148ページ この神話を……徹底的に解体してきた

主だった神話については、Simha Flapan, *The Birth of Israel: Myths and Realities* (New York: Pantheon Books, 1987) で解説と反論がされている。

148ページ “新しい歴史” と呼ばれるこの歴史観は……知られてはいない

“新しい歴史”を簡潔かつ見事にまとめた要約としては、Avi Shlaim, “The New History of 1948 and the Palestinian Nakba,” *Miftah.org*, March 18, 2004を参照のこと。

148ページ 数百万発のクラスター爆弾を投下した

Meron Rappaport, “IDF Commander: We Fired More Than a Million Cluster Bombs in Lebanon,” *Ha’aretz*, September 12, 2006; and “Shooting Without a Target,” *Ha’aretz* editorial, September 14, 2006.

150ページ 最も強固な神話

Benny Morris, *1948 and After: Israel and the Palestinians* (New York: Oxford University Press, 2003), 13. Flapan, *Birth of Israel*, 187–199も参照のこと。

151ページ (モリスの発言)

Morris, *1948 and After*, 14. モリスは、私たちの“The Israel Lobby”第一稿について、非常に長い論文 (“And Now for Some Facts: The Ignorance at the Heart of an Innuendo,” *New Republic*, May 8, 2006)の中で、史実に関する間違いが多々あると酷評した。とくに、1948年独立戦争時の軍事バランス、および、シオニストやイスラエル史で鍵となるエピソードの解釈を批判した。モリスの批評は、非常に重要な彼自身の初期の研究（およびその他の一流歴史家の研究）と矛盾する。これらの研究は、イスラエル建国、イスラエルとアラブ近隣諸国およびパレスチナ人との関係を解明するのに非常に役に立っている。彼の研究はイスラエルの軍事的優位性や領土への執着、難民に対する方針についての私たちの主張を裏づけるものだと確信している。モリスの主張については、John J. Mearsheimer and Stephen M. Walt, “Setting the Record Straight: A Response to Critics of ‘The Israel Lobby,’” December 12, 2006, 26–46で取り上げた。<http://www.israellobbybook.com/> で見ることができる。

151ページ 圧倒的有利な状況にあった

1948年戦争の軍事バランスについては、以下を参照のこと。Trevor N. Dupuy, *Elusive Victory: The Arab-Israeli Wars, 1947–1974* (New York: Harper, 1978), 3–19, 121–125; Rashid Khalidi, “The Palestinians and 1948: The Underlying Causes of Failure,” in *The War for Palestine: Rewriting the History of 1948*, ed. Eugene L. Rogan and Avi Shlaim (New York: Cambridge University Press, 2001), 12–36; Rashid Khalidi, *The Iron Cage: The Story of the Palestinian Struggle for Statehood* (Boston: Beacon Press, 2006), chap. 4; Haim Levenberg, *Military Preparations of the Arab Community in Palestine, 1945–1948* (Portland, OR: Frank Cass, 1993); Benny Morris, *The Birth of the Palestinian Refugee Problem Revisited* (New York: Cambridge University Press, 2004), chaps. 1, 3; Benny Morris, *Righteous Victims: A History of the Zionist-Arab Conflict, 1881–1999* (New York: Knopf, 1999), 187–189, 191–196, 215–223, 235–236, 241–242; Morris, *1948 and After*, 13–16; and Martin Van Creveld, *The Sword and the Olive: A Critical History of the Israeli Defense Forces* (New York: Public Affairs, 1998), 77–82.

151ページ (パペの発言)

Ilan Pappé, *The Ethnic Cleansing of Palestine* (Oxford: Oneworld Publications, 2006), 45.

151ページ (ヤディンの発言)

Ilan Pappé, *The Ethnic Cleansing of Palestine*, 22. シオニストは、彼らの軍事力がパレスチナ人よりも明らかに優勢だったということを理解しており、パレスチナ人に対する敵対的な方針を貫くことができたのはそうした状況があったからだ。これを示す証拠としては、同文献を参照。とくに、22–23, 26, 41, 44–46, 70, 79, 84.

152ページ 5月半ばに…… (モリスの発言)

Morris, *1948 and After*, 15.

152ページ 勝敗を決したのは…… (モリスの発言)

Morris, *1948 and After*

153ページ 空軍も…… (モリスの発言)

Morris, *Righteous Victims*, 393.

153ページ 無力でなかったことも物語っている

1956年(第2次中東戦争)、67年(第3次中東戦争)、73年(第4次中東戦争)の軍事バランスについては、以下を参照のこと。Dupuy, *Elusive Victory*, 146–147, 212–214, 231–244, 333–340, 388–390, 597–605, 623–633; Morris, *Righteous Victims*, 286–291, 311–313, 393–395; and Van Creveld, *The Sword and the Olive*, 137–138, 179–182, 239–243.

153ページ ほとんど脅威にもなっていない

2000年10月に第2次インティファダが始まると、01年から02年にかけてイスラエル経済は下降線を辿った。しかし専門家の多くは、この停滞は世界的な経済破綻が主な原因だとしている。2002年5月下旬の *Forbes* の記事は、世間の一般的な見解を簡潔に解説している。

「イスラエル政府と複数の経済学者は、イスラエルのGDP成長率が2000年の6.4%から現在の0%まで急下降した原因の3分の2は、テロリズムではなく、ハイテクが率いた世界的な不況だと推定している」

David Simons, “Cold Calculation of Terror,” *Forbes*, May 28, 2002. パレスチナ人の民衆蜂起が続いていたにもかかわらず、03年から05年にかけてイスラエル経済は上向いた。以下も参照のこと。Emma Clark, “Israel’s Neglected Economy,” *BBC News* (online), September 2, 2002; Nadav Morag, “The Economic and Social Effects of Intensive Terrorism: Israel, 2000–2004,” *Middle East Review of International Affairs* 10, no. 3 (September 2006); Neal Sandler, “Israel’s Economy: As if the Intifada Weren’t Enough,” *Business Week*, June 18, 2001; and Linda Sharaby, “Israel’s Economic Growth: Success Without Security,” *Middle East Review of International Affairs* 6, no. 3 (September 2002).

153～154ページ 質的な差をさらに拡大し続けている

Amos Harel, “Israel Maintains Its Strategic Advantage, Says Jaffee Center,” *Ha’aretz*, November 23, 2005. 以下も参照。Uri Bar-Joseph, “The Paradox of Israeli Power,” *Survival* 46, no. 4 (Winter 2004–05); and Martin Van Creveld, “Opportunity Beckons,” *Jerusalem*

Post, May 16, 2003. 現在、“ジャフィーセンター”は“国家戦略研究センター” National Strategic Studies に統合されている。

154ページ アラブ側が突然戦争をしかけた

Alan Dershowitz, “Debunking the Newest—and Oldest—Jewish Conspiracy: A Reply to the Mearsheimer-Walt ‘Working Paper,’” John F. Kennedy School of Government Faculty Research Working Paper, Harvard University, April 2006, 22; and Martin Peretz, “Killer Angels: Murdering Jews, Then and Now,” *New Republic*, April 15, 2002, 17–18.

154～155ページ (モリスの記述)

Morris, *1948 and After*, 11–12. この段落のこれ以降のモリスの引用については、同文献13より。

155～156ページ (ベンアミの証言)

Shlomo Ben-Ami, *Scars of War, Wounds of Peace: The Israeli-Arab Tragedy* (New York: Oxford University Press, 2006), 35–36. Flapan, *Birth of Israel*, 119–152も参照のこと。

156ページ イスラエル攻撃を準備していた、と言われている

この世間一般的な見解は下記でも垣間見える。Michael B. Oren, “Did Israel Want the Six-Day War?” *Azure* 5759, no. 7 (Spring 1999); and Michael B. Oren, *Six Days of War: June 1967 and the Making of the Modern Middle East* (New York: Oxford University Press, 2002).

156ページ イスラエルを滅ぼそうとしていなかった

1967年戦争の発端に関する最近の研究で最良のものとしては、以下がある。Ben-Ami, *Scars of War*, 96–114; Norman G. Finkelstein, “Abba Eban with Footnotes,” *Journal of Palestine Studies* 32, no. 3 (Spring 2003); Roland Popp, “Stumbling Decidedly into the Six-Day War,” *Middle East Journal* 60, no. 2 (Spring 2006); and Tom Segev, *1967: Israel, the War, and the Year That Transformed the Middle East*, trans. Jessica Cohen (New York: Metropolitan Books, 2007).

156ページ エジプトのナセルは…… (シュレイムの発言)

Avi Shlaim, *The Iron Wall: Israel and the Arab World* (New York: Norton, 2000), 237.

156ページ これまでこの問題についての定説は…… (シュレイムの発言)

Avi Shlaim, *The Iron Wall: Israel and the Arab World*, 235。Stephen S. Rosenfeld, “Israel and Syria: Correcting the Record,” *Washington Post*, December 24, 1999も参照のこと。

157ページ (ベンアミの発言)

Ben-Ami, *Scars of War*, 100.

157ページ イスラエルの抑止力を強化する目的だった

Segev, 1967, 202–212, 295–296.

157ページ (ワイツマンの発言)

Segev, 1967, 300. また、387–388も参照のこと。

157ページ (ベギンの発言)

Ben-Ami, *Scars of War*, 76–77.

158ページ (モリスの発言)

Morris, *Righteous Victims*, 387. John J. Mearsheimer, *Conventional Deterrence* (Ithaca: Cornell University Press, 1983), 155–162も参照のこと。

158ページ (バドリの発言)

Mearsheimer, *Conventional Deterrence*, 159.

159ページ サダム・フセインですらこれを支持した

Yoram Meital, *Peace in Tatters: Israel, Palestine, and the Middle East* (Boulder, CO: Lynne Rienner, 2006), 148–152; Charles A. Radin, “Arabs Offer to Accept Israel with Conditions,” *Boston Globe*, March 29, 2002; and Howard Schneider, “Arab Countries Unanimously Endorse Saudi Peace Plan,” *Washington Post*, March 29, 2002.

160ページ ユダヤ人かどうかは.....通常は血縁関係

「帰郷法」によると、「ユダヤ人」とは「母親がユダヤ系であるか、ユダヤ教に改宗し他の宗教の信者でない人」である。この法と関連する修正はイスラエル外務省のウェブサイトで見ることができる。

www.mfa.gov.il/MFA/MFAArchive/1950_1959/Law%20of%20Return%205710-1950. 最近、母親ではなく父親がユダヤ系であればユダヤ人と認めるとする法について議論が交わされた。Shahar Ilan, “Bill Would Recognize Judaism Through Father,” *Ha'aretz*, March 12, 2006を参照のこと。

160ページ イスラエル国家建国宣言

イスラエル国家建国宣言は、John Norton Moore, ed., *The Arab-Israeli Conflict: Readings and Documents* (Princeton: Princeton University Press, 1977), 934–937で見ることができる。

161ページ (ベングリオンの発言)

David Ben-Gurion, *Israel: A Personal History*, trans. Nechemia Meyers and Uzy Nystar (New York: Funk and Wagnalls, 1971), 839. [邦訳：ベングリオン『ユダヤ人はなぜ国を創ったか イスラエル国家誕生の記録』中谷和男・入沢邦雄訳、サイマル出版会、1972年]

161ページ パレスチナ人はユダヤ人より出生率が高い

これらの統計値は、イスラエル中央統計局 (CBS) *Statistical Abstract of Israel, 2006*, Table 2.1, www1.cbs.gov.il/reader/; and Palestinian Academic Society for the Study of

International Affairs, *Palestine Facts and Info*, “Population,”

www.passia.org/palestine_facts/facts_and_figures/0_facts_and_figures.htmにもとづく。

CBSが「その他」に分類するイスラエル在住の人々は約30万人にのぼる。その多くはユダヤ系移民の家族であるが、ユダヤ系の子孫ではあるが母親がユダヤ人ではない人々であり、それゆえにイスラエル政府からユダヤ人と認められない。これらの人々もユダヤ人であるとするならば、イスラエルのユダヤ人総数は、CBSが主張する530万人ではなく560万人になる。

161ページ 潜在的な人口上の脅威

2007年2月から3月にかけて行われたイスラエル系ユダヤ人に関する世論調査の結果は、「この人口統計学的課題は多くのユダヤ人口にとって喫緊の問題であり、国家安全問題の全体的な取り組みを決定するのに役立つ」というものだった。Yehuda Ben Meir and Dafna Shaked, “The People Speak: Israeli Public Opinion on National Security, 2005–2007, Memorandum no. 90 (Tel Aviv: Institute for National Security Studies, May 2007), 10, 64–65. 以下も参照のこと。Aluf Benn, “Israel’s Identity Crisis,” *Salon.com*, May 16, 2005; Larry Derfner, “Sounding the Alarm About Israel’s Demographic Crisis,” *Forward*, January 9, 2004; Jon E. Dougherty, “Will Israel Become an Arab State?” *NewsMax.com*, January 12, 2004; Lily Galili, “A Jewish Demographic State,” *Ha’aretz*, June 28, 2002; and Gideon Levy, “Wombs in the Service of the State,” *Ha’aretz*, September 9, 2002.

161ページ 人間の尊厳と自由についての基本法

Shulamit Aloni, “A Country for Some of Its Citizens?” *Ha’aretz*, February 24, 2007. 人間の尊厳と自由に関する基本法は、イスラエル国会のウェブサイトで見ることができる。

www.knesset.gov.il/laws/special/eng/basic3_eng.htm.

162ページ 際立った対照をなすものである

Jonathan Cook, *Blood and Religion: The Unmasking of the Jewish and Democratic State* (Ann Arbor, MI: Pluto Press, 2006), 17–18. 以下も参照のこと。Adalah and the Arab Association for Human Rights, “Equal Rights and Minority Rights for the Palestinian Arab Minority in Israel”、市民的および政治的自由に関する国際規約第26条および27条のイスラエルの施行状況について国連人権委員会に向けた報告書、1998年7月; As’ad Ghanem, Nadim Rouhana, and Oren Yiftachel, “Questioning ‘Ethnic Democracy’: A Response to Sammy Smooha,” *Israel Studies* 3, no. 2 (Fall 1998); David B. Green, “The Other Israelis,” *Boston Globe*, February 25, 2007; Human Rights Watch, *Second Class: Discrimination Against Palestinian Arab Children in Israel’s Schools* (New York, September 2001), chap. 8; Frances Raday, “Religion, Multiculturalism and Equality: The Israeli Case,” in *Israel Yearbook on Human Rights*, Vol. 25 (1995), ed. Yoram Dinstein (The Hague: Martinus Nijhoff, 1996), 193–241; Ahmad H. Sa’di, “Israel as Ethnic Democracy: What Are the Implications for the Palestinian Minority?” *Arab Studies Quarterly* 22, no. 1 (Winter 2000); and Sammy Smooha, “Ethnic Democracy: Israel as an Archetype,” *Israel Studies* 2, no. 2 (Fall 1997).

162ページ 差別的な振る舞いをしている

“The Official Summation of the Or Commission Report,” published in *Ha’aretz*, September 2, 2003を参照のこと。この報告書の結論や勧告に多くのイスラエル人がどれほど反感を持ったかについての証拠は、以下を参照のこと。“No Avoiding the Commission Recommendations,” *Ha’aretz* editorial, September 4, 2003; and Molly Moore, “Israelis Look Inward After Critical Report,” *Washington Post*, September 3, 2003. 以下も参照。Bernard Avishai, “Saving Israel from Itself: A Secular Future for the Jewish State,” *Harper’s*, January 2005; Ian Lustick, *Arabs in the Jewish State: Israel’s Control of a National Minority* (Austin: University of Texas Press, 1980); and Chris McGreal, “Worlds Apart,” *Guardian*, February 6, 2006..

162ページ 07年3月に行われた世論調査

Roe Nahmias, “Marriage to an Arab Is National Treason,” *Ynetnews.com*, March 27, 2007; and Yoav Stern, “Poll: 50% of Israeli Jews Support State-Backed Arab Emigration,” *Ha’aretz*, March 27, 2007. 2006年に行われた世論調査では、同様の結果になった。以下を参照のこと。Eli Ashkenazi and Jack Khoury, “Poll: 68% of Jews Would Refuse to Live in Same Building as an Arab,” *Ha’aretz*, March 22, 2006; Chris McGreal, “41% of Israel’s Jews Favor Segregation,” *Guardian*, March 24, 2006; Sharon Roffe-Ofir, “Poll: Israeli Jews Shun Arabs,” *Ynetnews.com*, March 22, 2006; and Kenneth J. Theisen, “Racism Alive and Well in Israel?” Pittsburgh Independent Media Center (online), June 1, 2006.

162ページ (イスラエル民主政治研究所の報告)

Israeli Democracy Institute, “The Democracy Index: Major Findings 2003.” この報告書の要約は、www.idi.org.il/english/article.asp?id=1466で見ることができる。

162ページ 重要ではない大臣職だった

2007年の世論調査によると、イスラエル系ユダヤ人63%がアラブ人の大臣を入閣させることに反対だった。04年は反対が75%、05年、06年は60%だった。Ben Meir and Shaked, “The People Speak,” 80. 以下も参照のこと。Ibid., 22, 79–82; Orly Halpern, “Arab Cabinet Pick Stirs ‘Zionism-Racism’ Debate,” *Forward*, January 19, 2007; Gil Hoffman, “‘Majadleh Slot the End of Zionism,’” *Jerusalem Post*, January 10, 2007; Ronny Sofer, “Cabinet Approves First Arab Minister,” *Ynetnews.com*, January 28, 2007; and Scott Wilson, “In First, Arab Muslim Joins Israeli Cabinet,” *Washington Post*, January 29, 2007.

163ページ 人種差別的法律

Justin Huggler, “Israel Imposes ‘Racist’ Marriage Law,” *Independent*, August 1, 2003. 以下も参照のこと。James Bennet, “Israel Blocks Palestinians from Marrying into Residency,” *New York Times*, July 31, 2003; “Racist Legislation,” *Ha’aretz* editorial, July, 19, 2004; “Racist Legislation,” *Ha’aretz* editorial, January 18, 2005; and Shahar Ilan, “Law Denying Family Unification to Israelis and Palestinians Extended,” *Ha’aretz*, March 21, 2007. 名誉毀損防止連盟 (ADL) ですら、やんわりとではあるが、この法律を非難している。Nathan Guttman, Yair Ettinger, and Sharon Sadeh, “ADL Criticizes Law Denying Citizenship to Palestinians Who Marry Israelis,” *Ha’aretz*, August 5, 2003.

163ページ 国民の自由を損なう急激で極端な動き

Tovah Tzimuki, "Government Supports Revocation of Citizenship," *Ynetnews.com*, January 8, 2007. 以下も参照のこと。Saed Bannoura, "Israeli Knesset Passes Law to Revoke Citizenship of 'Unpatriotic' Israelis," International Middle East Media Center (online), January 10, 2007; Sheera Claire Frenkel, "'Disloyalty' Bill Passes First Hurdle," *Jerusalem Post*, January 10, 2007; Tom Segev, "Conditional Citizenship," *Ha'aretz*, January 11, 2007; and Yuval Yoaz, "Government to Back Bill Allowing Court to Rescind Traitors' Citizenship," *Ha'aretz*, January 7, 2007.

163ページ (ネタニヤフの発言)

Larry Derfner, "Rattling the Cage: A Bigot Called Bibi," *Jerusalem Post*, January 3, 2007. 以下も参照のこと。Aluf Benn and Gideon Alon, "Netanyahu: Israel's Arabs Are the Real Demographic Threat," *Ha'aretz*, December 18, 2003; Ron Dermer, "The Nerve of Bibi," *Jerusalem Post*, January 9, 2007; Karina's Kolumn (Karina Robinson), "Benjamin Netanyahu: Israel's Prime Minister in Waiting," *Banker* (online), July 1, 2004; and Neta Sela, "Netanyahu: Pensions Cut—Arabs' Birth Rate Declined," *Ynetnews.com*, January 3, 2007.

164ページ "ガン" のようだ

こうした^{たと}譬えは珍しいものではない。たとえば、2004年はじめ、ゼエヴ・ボイム国防次官は、パレスチナ人のテロリズムは「遺伝子に欠陥がある」からだと発言した。別のイスラエル国会議員は、パレスチナ人にはテロリズムの「血が流れている」からアラブ人に「背中を向け」たら「刺される」と言い、この意見を支持した。初期の研究でイスラエルの対パレスチナ政策の真相を暴いた歴史家ベニー・モリスでさえ、パレスチナ人は「連続殺人鬼」のように扱うべき「野蛮人」だと呼んだ。ベギンの発言はAmnon Kapeliuk, "Begin and the 'Beasts,'" *New Statesman*, June 25, 1982, 12から、エイタンの発言はDavid K. Shipler, "Most West Bank Arabs Blaming U.S. for Impasse," *New York Times*, April 14, 1983; and Uzi Benziman, *Sharon: An Israeli Caesar* (New York: Adama Books, 1985), 264から、ヤーロンの発言はAri Shavit, "The Enemy Within," *Ha'aretz*, August 27, 2002から引用した。ボイムと賛同者の発言はYuval Yoaz, "AG: Ethics Committee to Probe Racist Comments Made by MKs," *Ha'aretz*, August 10, 2004から、モリスの発言はAri Shavit, "Survival of the Fittest," *Ha'aretz*, January 9, 2004から引用した。

165ページ (ダーフナーの発言)

Larry Derfner, "Rattling the Cage: The Racism of Israeli Youth," *Jerusalem Post*, January 17, 2007. 以下も参照のこと。Ahiya Raved, "Youth Believe Arabs Dirty, Uneducated," *Ynetnews.com*, January 9, 2007.

165ページ 最初のイスラエル閣僚ではない

Ben Lynfield, "The Rise of Avigdor Lieberman," *Nation*, December 14, 2006. 以下も参照のこと。Uri Avnery, "The Lovable Man? Lieberman and the Decline of Israeli Democracy,"

Antiwar.com, November 3, 2006; Akiva Eldar, "Let's Hear It for the Haiders," *Ha'aretz*, October 30, 2006; Leonard Fein, "The Fantasies of Avigdor Lieberman," *Forward*, October 20, 2006; Gershom Gorenberg, "The Minister for National Fears," *Atlantic*, May 2007; and Henry Siegman, "Hurricane Carter," *Nation*, January 22, 2007. エフィ・エイタム（前国家宗教党党首）とレハバム・ゼエビ（極右国家統一党を創設したイスラエル人将校）は移送に賛同した元閣僚だ。

166ページ（アラブの移民を推奨するイスラエル国民の割合）

"The Democracy Index: Major Findings 2003"; Yulie Khromchenko, "Survey: Most Jewish Israelis Support Transfer of Arabs," *Ha'aretz*, June 22, 2004; Yoav Stern, "Poll: Most Israeli Jews Say Israeli Arabs Should Emigrate," *Ha'aretz*, April 4, 2005; McGreal, "41% of Israel's Jews"; Amiram Barkat and Jack Khoury, "Poll: Gov't Should Help Arab Citizens Emigrate," *Ha'aretz*, May 10, 2006; and Roffe-Ofir, "Poll." 以下も参照。Uzi Arad, "Swap Meet: Trading Land for Peace," *New Republic*, November 28 and December 5, 2005; Amnon Barzilai, "More Israeli Jews Favor Transfer of Palestinians, Israeli Arabs—Poll Finds," *Ha'aretz*, October 10, 2005; Arik Carmon, "A Blot on Israeli Democracy," *Ha'aretz*, December 12, 2005; Evelyn Gordon, "No Longer the Political Fringe," *Jerusalem Post*, September 14, 2006; Ben Lynfield, "Israeli Expulsion Idea Gains Steam," *Christian Science Monitor*, February 6, 2002; Stern, "Poll: 50% of Israeli Jews"; Matthew Wagner, "New Proposal: Transfer-for-Cash Plan," *Jerusalem Post*, January 21, 2007; and Steven I. Weiss, "Israeli Rightist Calls for Transfer of Arabs," *Forward*, September 15, 2006.

166ページ だが今なお実質的な支配を続けている

B'Tselem, "The Scope of Israeli Control in the Gaza Strip," http://www.btselem.org/english/Gaza_Strip/Gaza_Status.asp; David Sharrock, "Israel's 'Invisible Hand' Still Controls Gaza, Says Report," *Times* (London), January 15, 2007; and Scott Wilson, "For Gaza, a Question of Responsibility," *Washington Post*, March 21, 2007.

166ページ（エリッソンの発言）

Jan Egeland and Jan Eliasson, "La catastrophe humaine de Gaza est une bombe à retardement," *Figaro* (online), September 28, 2006. 以下も参照のこと。Steven Erlanger, "As Parents Go Unpaid, Gaza Children Go Hungry," *New York Times*, September 14, 2006; Steven Erlanger, "Years of Strife and Lost Hope Scar Young Palestinians," *New York Times*, March 12, 2007; Donald Macintyre, "Gaza in Danger of Turning into a 'Giant Prison,' Says Mideast Envoy," *Independent*, November 14, 2005; Rory McCarthy, "Occupied Gaza Like Apartheid South Africa, Says UN Report," *Guardian*, February 23, 2007; Sara Roy, "The Economy of Gaza," *Znet* (online), October 9, 2006; Mohammed Samhuri, "Looking Beyond the Numbers: The Palestinian Socioeconomic Crisis of 2006," Middle East Brief no. 16, Crown Center for Middle East Studies, Brandeis University, February 2007; United Nations Office for the Coordination of Humanitarian Affairs (OCHA), "Statement on Gaza by United Nations Humanitarian Agencies Working in the Occupied Palestinian Territory," August 3, 2006; and OCHA, "The Humanitarian Monitor:

Occupied Palestinian Territory,” no. 10, February 2007.

167ページ (『ハアレツ』の社説)

“Making the Law a Laughingstock,” *Ha’aretz* editorial, December 31, 2006.

167ページ 個人財産の保護をも侵害している

Steven Erlanger, “West Bank Sites on Private Land, Data Shows,” *New York Times*, March 14, 2007; Nadav Shragai, “Peace Now: 32% of Land Held for Settlements Is Private Property,” *Ha’aretz*, March 14, 2007. 以下も参照のこと。Greg Myre, “For West Bank, It’s a Highway to Frustration,” *New York Times*, November 18, 2006; and “Legitimization of Land Theft,” *Ha’aretz* editorial, February 27, 2007.

169ページ 17000人のユダヤ人しか住んでいなかった

欧州系ユダヤ人がパレスチナにやってきた第一波は1882年から1903年までで、第1次アリヤーと呼ばれている。オスマン帝国が行った人口調査によると、1882年当時、パレスチナには15000人強のユダヤ人が住んでいた。Justin McCarthy, *The Population of Palestine: Population History and Statistics of the Late Ottoman Period and the Mandate* (New York: Columbia University Press, 1990), 10–13. この書籍は、1850年から1915年までのデータを網羅している。しかし、オスマン帝国の人口調査結果にもとづくマッカーシーの数値は「以前から有していた市民権を維持したユダヤ人移民の数は不明」として、これを除いている。さらに、「そうした初期にはごく少数の非市民のユダヤ人がいたであろう」とし、その数は「せいぜい1000から2000人」と予測した。よって、1882年当時のパレスチナには最大で17000人のユダヤ人がいたであろう。Mark Tessler, *A History of the Israeli-Palestinian Conflict* (Bloomington: Indiana University Press, 1994), 124も参照のこと。

169ページ アラブ人は人口のおよそ95%を構成

1893年当時のパレスチナ人の総人口は約53万人で、そのうちの19000人(3.6%)がユダヤ人だった。残りの人口の多数はアラブ人だった。McCarthy, *Population of Palestine*, 10.

169ページ 別の人々に占有されていた

1980年代半ば、ジョーン・ピーターズが *From Time Immemorial: The Origins of the Arab-Jewish Conflict over Palestine* (New York: Harper, 1984). [邦訳：『ユダヤ人は有史以来 パレスチナ紛争の根源』滝川義人訳、サイマル出版会、1988年] を出版し、このテーマを再び取り上げた。彼女は、ヨーロッパからパレスチナにユダヤ人が到着した頃は、一般に言われているほどのアラブ人はパレスチナにはおらず、アラブ人がパレスチナに大挙して押し寄せたのは、ユダヤ人が土地を開拓し始めてからだったと主張する。彼女のこの書籍は著名な米国系ユダヤ人の多数が熱烈に支持した。しかし、出版後まもなく多数の学者がこの書籍は「参照可能な資料を非常に偏向的に利用しているか無視している」のみならず、その主張が完全に間違っていることを指摘した。Yehoshua Porath, “Mrs. Peters’s Palestine,” *New York Review of Books*, January 16, 1986. 優れたイスラエルの歴史家ポラスは、*New York Times* での対談でピーターズの書籍について、「完全なでっち上げ」で、イスラエルでは「ごみ同然として例外なく無視されている。ただし、プロパガンダに使われる場合を除いては」と発言した。Colin Campbell,

“Dispute Flares over Book on Claims to Palestine,” *New York Times*, November 28, 1985.
以下も参照のこと。Norman G. Finkelstein, *Image and Reality of the Israel-Palestine Conflict* (London: Verso, 2001), chap. 2.

169ページ わずか1万人しかパレスチナには行かなかった

Laurence J. Silberstein, *The Postzionism Debates: Knowledge and Power in Israeli Culture* (New York: Routledge, 1999), 51.

169ページ 満たすことすらできなかった

Ben-Ami, *Scars of War*, 9.

169ページ 土地の7%を所有していたにすぎなかった

1948年当時のパレスチナには、65万人のユダヤ人に加えて約120万人のパレスチナ人が住んでいた。人口比にするとパレスチナ人が65%、ユダヤ人が35%だ。Morris, *1948 and After*, 14を参照のこと。フラパンはユダヤ人を33%とし (*Birth of Israel*, 44) モリスは37%としている (*Righteous Victims*, 186)。

169～170ページ 当初から……ユダヤ人国家を創ろうと決めていた

ベングリオン派は、ヴラディミール・ジャボチンスキーのような修正派ほど領土獲得に熱心でなかった。しかし、アヴィ・シャレイムが明らかにしたように、「(ベングリオンと)修正派との違いは、ベングリオンが小イスラエル主義で、修正派が大イスラエル主義であったということではなく、修正派が一か八かのやり方に固執したのに比べて、ベングリオンが漸進主義的アプローチを追求したということだ」。Shlaim, *Iron Wall*, 21. シオニストは、アラブ人や英国人を怒らせて計画がぶち壊しになることを恐れ、パレスチナにおける究極の目標について公言しないよう注意している。とはいえ、ベングリオンはイスラエル国境構想をイディッシュ語で書かれた共著で披露し、この書籍は1918年に米国で発売された。ベングリオンの構想では、今日のイスラエルに加え占領地域、レバノン南部からリタニ川、シリア南部の一部、ヨルダンの大部分、シナイ半島までが含まれている。Morris, *Righteous Victims*, 75.

170ページ 人口の85%を占めるユダヤ人国家を創ることにあった

Flapan, *Birth of Israel*, 103–104; and Morris, *Birth Revisited*, 69.

171ページ われわれのものになるに違いないのだ

これらは、Flapan, *Birth of Israel*, 22; and Shlaim, *Iron Wall*, 21から引用した。分割に関するシオニストの初期の思惑について詳細に論じたものとしては、Mearsheimer and Walt, “Setting the Record Straight,” 33–37を参照のこと。

171ページ (ベンエリエゼルの記述)

Uri Ben-Eliezer, *The Making of Israeli Militarism* (Bloomington: Indiana University Press, 1998), 150.

172ページ 国家を与えることを拒否する

Avi Shlaim, *The Politics of Partition: King Abdullah, the Zionists, and Palestine, 1921–1951* (New York: Oxford University Press, 1998). 以下も参照のこと。Morris, *1948 and After*, 10; Benny Morris, *The Road to Jerusalem: Glubb Pasha, Palestine and the Jews* (London: I. B. Tauris, 2002); Ilan Pappé, *Britain and the Arab-Israeli Conflict, 1948–1951* (New York: St. Martin's Press, 1988); and Mary C. Wilson, *King Abdullah, Britain and the Making of Jordan* (New York: Cambridge University Press, 1987).

173ページ 建国を求めるものだったからだ

Benny Morris, “Revisiting the Palestinian Exodus of 1948,” in *The War for Palestine: Rewriting the History of 1948*, ed. Eugene L. Rogan and Avi Shlaim (New York: Cambridge University Press, 2001), 40. Ben-Ami, *Scars of War*, 33–34; and Shlaim, *Iron Wall*, 25も参照のこと。

173ページ 人口問題を解決する唯一の現実的方法

Nur Masalha, *Expulsion of the Palestinians: The Concept of “Transfer” in Zionist Political Thought, 1882–1948* (Washington, DC: Institute for Palestine Studies, 1992); Morris, *Birth Revisited*, chap. 2; Morris, “Revisiting the Palestinian Exodus,” 39–48.

173ページ 想像することは不可能である

Masalha, *Expulsion of the Palestinians*, 128に引用されている。Morris, *Righteous Victims*, 140, 142, 168–169も参照のこと。ベングリオンの発言は、1942年5月にニューヨークのビルトモアホテルで行われたシオニスト会議に先立って書き留められたメモによる。

173ページ (ベングリオンの発言)

Michael Bar-Zohar, *Facing a Cruel Mirror: Israel's Moment of Truth* (New York: Scribner, 1990), 16に引用されている。

174ページ もちろん…… (モリスの発言)

Shavit, “Survival of the Fittest”に引用されている。また、Benny Morris, “A New Exodus for the Middle East?” *Guardian*, October 3, 2002も参照のこと。1947年12月30日、ベングリオンはヒスタドルート中央委員会にこう語った。「ユダヤ国家に割り当てられた地域にはユダヤ人はせいぜい52万人で、非ユダヤ人は約35万人いた。ほとんどはアラブ人だった。エルサレムに住むユダヤ人とあわせても、建国当時の総人口はおよそ100万人で、その40%が非ユダヤ人だった。このような人口構成はユダヤ国家のゆるぎない基盤とはなりえない。そうした(人口統計的)事実は明白で緊急だという点でとらえられなくてはならない。この(人口)構成では、多数派ユダヤ人が確実に支配する側にいられると確信することすらできない。多数派ユダヤ人がわずか60%にすぎないのであれば、安定した強固なユダヤ国家足りえない」。Masalha, *Expulsion of the Palestinians*, 176に引用されている。

174ページ われわれシオニストは…… (ベングリオンの発言)

Morris, *Righteous Victims*, 169に引用されている。

174～175ページ ベングリオンや他の指導者が……（モリスの発言）

Morris, “Revisiting the Palestinian Exodus,” 43, 44.

175ページ 彼らの故郷から追い出した

この事件については、モリスの*Birth Revisited* とパペの*Ethnic Cleansing of Palestine* が詳述している。以下も参照のこと。Meron Benvenisti, *Sacred Landscape: The Buried History of the Holy Land Since 1948*, trans. Maxine Kaufman-Lacusta (Berkeley: University of California Press, 2000), chaps. 3–4; and Masalha, *Expulsion of the Palestinians*, chap. 5. モリスは、「1937年以前の移送に関する偶発的考え方と1937年以降続いたそれを支持する事実上の合意は1948年の出来事につながった。というのもそれがシオニスト指導者を、さらにその指導の下にあった新国家の文民、軍事組織を動かす官僚や指揮官らをも、実施された移送に向けて動かしていったからだ。程度の差はあれ、移送と追放という考えとその実施に心理的抵抗を感じないまま、これらの人々は48年に結集したが、それは継続的反シオニストであるアラブの暴力に負うところが大きかった。その暴力とは、中央ヨーロッパや東欧で増大しつつあったユダヤ人に対する迫害という中で展開していたものだ」と述べている。Morris, “Revisiting the Palestinian Exodus,” 48.

175ページ 逃亡させる結果になった

Erskine Childers, “The Other Exodus,” *Spectator*, May 12, 1961; Flapan, *Birth of Israel*, 81–118; Walid Khalidi, “Why Did the Palestinians Leave Revisited,” *Journal of Palestine Studies* 34, no. 2 (Winter 2005); Walid Khalidi, “The Fall of Haifa,” *Middle East Forum* 35, no. 10 (December, 1959); Morris, *Birth Revisited*; and Pappé, *Ethnic Cleansing of Palestine*, 131. 銃撃戦に巻き込まれないよう、パレスチナ民族浄化に関わっていたシオニスト勢力に殺害されないよう、戦闘中は家を離れて避難するようにパレスチナ市民に命じたアラブ人指導者も確かにいた。悪名高いデイル・ヤシン村の大虐殺後はとくに、ユダヤ人に殺害される恐怖は村を捨てて避難しようという大きな動機になった。この大虐殺は1948年4月9日、100人から110人のパレスチナ人が殺害されたものだ。Morris, *Righteous Victims*, 209. モリスが伝えているように、「イスラエル国防軍諜報機関は、デイル・ヤシンをアラブ民間人の大脱出を『確実に後押しした要因』と呼んだ」。Morris, *Righteous Victims*, 209. こうした類の避難命令は自発的避難や指導者らの命令による避難だったという俗説とは関係がない。Ben-Ami, *Scars of War*, 43–44を参照のこと。

175ページ 帰郷を妨げなければならない

Morris, *Birth Revisited*, 318に引用されている。パレスチナ難民の帰郷に反対するシオニストの詳細については、同文献, chap. 5を参照のこと。

175ページ 土地の93%を所有した

Baruch Kimmerling, *Zionism and Territory: The Socio-Territorial Dimensions of Zionist Politics* (Berkeley, CA: Institute of International Studies, 1983), 143.

175ページ 都市居住地区から住民が追い出された

Pappé, *Ethnic Cleansing of Palestine*, xiii. Walid Khalidi, ed., *All That Remains: The*

Palestinian Villages Occupied and Depopulated by Israel in 1948 (Washington, DC: Institute for Palestine Studies, 1992) も参照のこと。これは破壊された村は531ではなく418だったとしている。この違いは、パレスチナ人の村を構成するものは何か、という定義が異なった結果である。パペやその他のパレスチナ人歴史家は小さな共同体も村落に含めたが、ハーリーディは含めなかった。Correspondence between authors and Ilan Pappé, May 15, 2007.

175ページ (ダヤンの発言)

Khalidi, *All That Remains*, xxxiに引用されている。

176ページ (ベングリオンの発言)

Nahum Goldmann, *The Jewish Paradox*, trans. Steve Cox (New York: Grosset and Dunlap, 1978), 99に引用されている。

176ページ (ジャボチンスキーの記述)

Ian Lustick, "To Build and To Be Built By: Israel and the Hidden Logic of the Iron Wall," *Israel Studies* 1, no. 1 (Spring 1996): 200に引用されている。

176ページ シオニストの事業は征服事業である

Ben-Ami, *Scars of War*, 12に引用されている。

176ページ パレスチナ人の国家樹立の望みを何度も拒絶してきた

以下を参照のこと。Geoffrey Aronson, *Israel, Palestinians, and the Intifada: Creating Facts on the West Bank* (London: Kegan Paul International, 1990); Amnon Barzilai, "A Brief History of the Missed Opportunity," *Ha'aretz*, June 5, 2002; Amnon Barzilai, "Some Saw the Refugees as the Key to Peace," *Ha'aretz*, June 11, 2002; Moshe Behar, "The Peace Process and Israeli Domestic Politics in the 1990s," *Socialism and Democracy* 16, no. 2 (Summer-Fall 2002); Jimmy Carter, *Palestine: Peace Not Apartheid* (New York: Simon & Schuster, 2006); Adam Hanieh and Catherine Cook, "A Road Map to the Oslo Cul-de-Sac," *Middle East Report Online*, May 15, 2003; "Israel's Interests Take Primacy: An Interview with Dore Gold," in *bitterlemons.org*, "What Constitutes a Viable Palestinian State?" March 15, 2004, edition 10; Baruch Kimmerling, *Politicide: The Real Legacy of Ariel Sharon* (London: Verso, 2003). [邦訳: キマーリング『ポリティサイド アリエル・シャロンの対パレスチナ人戦争』脇浜義明訳、柘植書房新社、2004年]; Nur Masalha, *Imperial Israel and the Palestinians: The Politics of Expansion* (London: Pluto Press, 2000); Tanya Reinhart, *The Road Map to Nowhere: Israel/Palestine Since 2003* (London: Verso, 2006); Sara Roy, "Erasing the 'Optics' of Gaza," *Daily Star* (online), February 14, 2004; and "36 Years, and Still Counting," *Ha'aretz*, September 26, 2003.

176ページ パレスチナ人などというものはいない

Rashid Khalidi, *Palestinian Identity: The Construction of Modern National Consciousness* (New York: Columbia University Press, 1997), 147に引用されている。メリアは、「自分たちはパレスチナ人であると考えていた人々がパレスチナにいて、私たちがやってきて彼らを追い出

し、彼らの国を奪ったというわけではなかった。そういう人々は存在しなかったのだ」とも語っている。Masalha, *Imperial Israel*, 47に引用されている。

177ページ 西岸地区を手に入れることに執心していた

ダヤンについては、Benny Morris, *Israel's Border Wars, 1949–1956* (New York: Oxford University Press, 1997), 12に引用されている。その他のイスラエル国防軍将校の見解についても同文献を参照のこと。ベングリオンの意見についてはMorris, *Righteous Victims*, 261, 290を参照のこと。

177ページ 確かにその通りだった

Morris, *Israel's Border Wars*, 11.

177ページ (ラビンの演説)

Hanieh and Cook, “Road Map”に引用されている。以下も参照のこと。Akiva Eldar, “On the Same Page, Ten Years On,” *Ha'aretz*, November 5, 2005; David Grossman, “The Night Our Hope for Peace Died,” *Guardian*, November 4, 2005; and Michael Jansen, “A Practice That ‘Prevents the Emergence of a Palestinian State,’” *Jordan Times* (online), November 10, 2005. シュロモ・ベンアミは、ラビンだけでなくラビンの後継者シモン・ペレスもパレスチナ国家の創設には反対だったことを明らかにしている。 *Scars of War*, 220. 最終的には、ラビンの首相在任中（1992年から95年）、圧倒的多数のイスラエル人がパレスチナ国家の創設に反対だった。少なくとも半数のイスラエル系ユダヤ人がパレスチナ国家の創設を支持するようになったのは、97年になってからである。93年のオスロ合意の頃は、パレスチナ国家創設に賛成だったのは35%だった。Ben Meir and Shaked, “The People Speak,” 64–65.

178ページ 他の国家と同じ地位を……と弁明した

ヒラリー・クリントンの発言はTom Rhodes and Christopher Walker, “Congress Tells Israel to Reject Clinton’s Pullout Plan,” *Times* (London), May 8, 1998に引用されている。ホワイト・ハウスの反応については、James Bennet, “Aides Disavow Mrs. Clinton on Mideast,” *New York Times*, May 8, 1998を参照。以下も参照のこと。Robin Dorf, “News Analysis: What Motivated Hillary’s Call for a Palestinian State?” *JTA.org*, May 15, 1998; “Hillary’s Folly,” *Jewish Week* editorial, May 15, 1998; and Brian Knowlton, “Mrs. Clinton Starts Storm by Backing ‘Palestine,’” *International Herald Tribune*, May 8, 1998.

178ページ 半主権のパレスチナ国家なら好ましいと思う

“Ex-PM Shamir Objects to Palestinian State, but Still Supports Sharon,” *Ha'aretz*, November 26, 2002; Benjamin Netanyahu, “A Limited Palestinian State,” *Washington Post*, June 20, 2003. 1998年のインタビューで、シャミールは、イスラエルの国境は「ヨルダン王国国境から地中海まで」であり、イスラエル人が直面する「最大の危険」とは「イスラエル国内にパレスチナ国家を創設すること」だと発言した “Yitzhak Shamir: A Lifetime of Activism,” *Middle East Quarterly* 6, no. 2 (June 1999) を参照のこと。

178ページ イスラエルの存在が危ぶまれているわけではないのだ

2005年10月、アフマディネジャド大統領は、演説の中で、イスラエルは「地図から抹消されるべきだ」と発言したと報じられた。この発言は、ユダヤ国家とその住民を物理的に破壊するよう脅迫しているものと幅広く解釈された。アフマディネジャドの発言をより正確に訳すと、「エルサレムを巡る占領体制は時間の一ページから姿を消すべきだ（あるいは、「歴史の一ページから抹殺されるべきだ」）」となる。イスラエルを物理的に破壊することを呼びかける代わりに、アフマディネジャドは、エルサレムとパレスチナに対するイスラエルの支配は、ソ連の東ヨーロッパ支配やイランの国王体制のように、覆されるべき一時的状態と見なされるべきだと提案した。挑発的で非常に好ましくない発言だが、パレスチナにあるユダヤ国家を政治的に解体するよう求めることは、イスラエルやその住民を物理的に破壊するよう求めることと同じではない。以下を参照のこと。Ethan Bronner, “Just How Far Did They Go, Those Words Against Israel?” *New York Times*, June 11, 2006; Jonathan Steele, “Lost in Translation,” *Guardian*, June 14, 2006; and “Iranian President at Tehran Conference: ‘Very Soon, This Stain of Disgrace [i.e., Israel] Will Be Purged from the Center of the Islamic World—and This Is Attainable,’” Middle East Media Research Institute, Special Dispatch Series no. 1013, October 28, 2005.

180ページ 同じテロを行う集団

“Bombs,” *New Republic* editorial, August 27 & September 3, 2001; Martin Peretz, “Good Fight,” *New Republic*, May 27, 2002; and Martin Peretz, “Blows to Israel Must Never Go Unanswered,” *Los Angeles Times*, September 5, 2003. ダーショウィッツについて、最も関連する著作としては、*The Case for Israel* (Hoboken, NJ: John Wiley, 2003) がある。この書籍を辛辣に批判したものとしては、Norman G. Finkelstein, *Beyond Chutzpah: On the Misuse of Anti-Semitism and the Abuse of History* (Berkeley: University of California Press, 2005) を参照のこと。以下も参照。Michael Desch, “The Chutzpah of Alan Dershowitz,” *American Conservative*, December 5, 2005; and “Dershowitz v. Desch,” *American Conservative*, January 16, 2006.

180ページ IDFは世界で最も人道的な軍隊である

Yaakov Katz, “IDF the Most Moral Army in the World,” *Jerusalem Post*, June 11, 2006; Leslie Susser, “Israelis Question Army Morality,” *JewishJournal.com*, December 17, 2004; and “Cabinet Communique,” Israeli Ministry of Foreign Affairs, December 12, 2004, www.mfa.gov.il/MFA/Government/Communiques/2004/Cabinet%20Communique%2012-Dec-2004. Richard Cohen, “Truth Massacred,” *Washington Post*, August 6, 2002; and Neve Gordon, “Israel’s Slippery Moral Slope,” *In These Times* (online), January 31, 2003.

180ページ 元エルサレム市助役の……要素となっている

Meron Benvenisti, “The Model of the Mythological Sabra,” *Ha’aretz*, September 12, 2002も参照のこと。

180ページ 学問業績により明らかにされている

Morris, *Righteous Victims*, chaps. 2–5.

180ページ 私がアラブ人だとしたら..... (ベングリオンの発言)

Shabtai Teveth, *Ben-Gurion: The Burning Ground, 1886–1948* (Boston: Houghton Mifflin, 1987), 544に引用されている。

180ページ 明白な民族浄化行為があったこと

Morris, *Birth Revisited*. 1948年の事件に関連するイスラエルの文書の多くは機密扱いのままだ。モリスは、「年月がたってイスラエル側の記録がもっと入手できるようになれば、追放や残虐行為に関する事実がもっと明らかになるだろう」と推測する。Morris, “Revisiting the Palestinian Exodus,” 49. 実際、彼が把握している強姦事件などは「氷山の一角にすぎない」という。Shavit, “Survival of the Fittest” を参照のこと。

181ページ 今は強烈な荒療治が必要だ..... (ベングリオンの日記)

Pappe, *Ethnic Cleansing of Palestine*, 69. For background on Ben-Gurion’s comment, 同書 61–72を参照のこと。

181ページ “一連の残虐行為” につながった

Morris, *Israel’s Border Wars*, 432. また、同文書126–153, 178–184も参照のこと。

181ページ 数百人のエジプト軍捕虜を殺害している

Gabby Bron, “Egyptian POWs Ordered to Dig Graves, Then Shot by Israeli Army,” *Yedioth Ahronoth*, August 17, 1995; Ronal Fisher, “Mass Murder in the 1956 Sinai War,” *Ma’ariv*, August 8, 1995 (この2つは *Journal of Palestine Studies* 25, no. 3 [Spring 1996]: 148–155に掲載されている); Galal Bana, “Egypt: We Will Turn to the International War Crimes Tribunal in the Hague if Israel Will Not Compensate Murdered Prisoners of War,” *Ha’aretz*, July 24, 2002; Zehavit Friedman, “Personal Reminiscence: Remembering Ami Kronfeld,” in Jewish Voice for Peace, *Jewish Peace News* (online), September 25, 2005; Katherine M. Metres, “As Evidence Mounts, Toll of Israeli Prisoner of War Massacres Grows,” *Washington Report on Middle East Affairs* (online), February/ March 1996; Roe Nahmias, “Egypt May Petition Hague over ‘Murder of POWs,’” *Ynetnews.com*, March 6, 2007; Roe Nahmias, “Former Meretz Leader Decries 1967 War Crimes,” *Ynetnews.com*, March 3, 2007; Meron Rapoport, “Into the Valley of Death,” *Ha’aretz*, February 13, 2007; and Segev, 1967, 371–376.

182ページ シリア人をゴラン高原から追放した

Avnery, “Crying Wolf?” *CounterPunch.org*, March 15, 2003; Robert Blecher, “Living on the Edge: The Threat of ‘Transfer’ in Israel and Palestine,” MERIP, *Middle East Report Online* 225 (Winter 2002); Kimmerling, *Politicide*, 28. [邦訳：キマーリング『ポリティサイド アリエル・シャロンの対パレスチナ人戦争』]、以下も参照のこと。Noam Chomsky, *Fateful Triangle: The United States, Israel and the Palestinians*, 2nd ed. (Cambridge, MA: South End Press, 1999), 97; Morris, *Righteous Victims*, 328–339; Tanya Reinhart, *Israel/Palestine: How to End the War of 1948* (New York: Seven Stories Press, 2002), 8; Tom Segev, “The Spirit of the King David Hotel,” *Ha’aretz*, July 23, 2006; and Segev, 1967,

400–412, 523–542. モリスは、1967年戦争直後、12万人のパレスチナ人が帰郷を申請したがイスラエルが許可したのはわずか17000人だけだったとしている。 *Righteous Victims*, 329.

182ページ 見つけ次第彼らを射殺した

Avnery, “Crying Wolf?”; Ami Kronfeld, “Avnery on Ethnic Cleansing and a Personal Note,” in *Jewish Voice for Peace*, *Jewish Peace News* (online), March 17, 2003; and Metres, “As Evidence Mounts.”

182ページ 1万軒を超える家屋を破壊した

Danny Rubinstein, “Roads, Fences and Outposts Maintain Control in the Territories,” *Ha’aretz*, August 12, 2003.

182ページ これらの残虐行為に “個人的責任” を負っている

“Report of the Commission of Inquiry into the Events at the Refugee Camps in Beirut,” February 7, 1983. 同報告書は、イツハク・カーン委員長にちなみカーン報告書と呼ばれている。Morris, *Righteous Victims*, 542–549; Shlaim, *Iron Wall*, 415–417も参照のこと。イスラエル兵はサブラとシャティラで起きた殺害に加わっていない。イスラエルと共謀したレバノンのキリスト教徒民兵（ファランジスト）が実行犯だった。イスラエル国防軍（IDF）がこの2つのパレスチナ難民キャンプを包囲すると、シャロンは「ファランジストをキャンプに入れるようIDFに命令した」。ファランジストとパレスチナ人は敵同士であり、さらに、ファランジストの指導者が殺害されたばかりということもあって彼らの頭の中には復讐しかなかった。彼らがパレスチナ人を虐殺することは確実であり、これはこの作戦に関わったイスラエル指導者層であればわかっていた、あるいはわかっていたはずだ。殺害が始まると、イスラエル兵士はすぐに虐殺が起きていることに気づいたが「止めようとしなかった」。Shlaim, *Iron all*, 416. プッシュ大統領はアリエル・シャロン首相を「平和の人」と賞賛したが、シャロンには民間人に対する暴力を巡って、もう何年も疑惑がついて回っている。たとえば、53年にヨルダンのキビヤを襲撃し、69人の民間人を殺害した部隊を率いていたのはシャロンだった。この時の犠牲者の3分の2は女性や子どもだった。ベニー・モリスは、「村人は地下や屋根裏部屋に隠れており、軍隊が建物を爆破したときにはこれに気がつかなかった、と後になってシャロンとIDFは主張した。しかし実際のところは、軍隊は家から家へとまわって、窓やドアから家の中を銃撃していた。ヨルダン人の病理学者は、犠牲者のほとんどは崩れた壁の下敷きになったか、爆発によって死亡したというよりは、銃や爆弾の破片によって死亡していたと報告している。いずれにせよ、中央執行部から実行部隊への作戦命令は明らかに『破壊せよ、殺せるだけ殺せ』というものだった」としている。 *Righteous Victims*, 278。以下も参照のこと。同文献 276–279, 294–295, 494–560; Benziman, *Sharon*; Uzi Benziman, “The Cock’s Arrogance,” *Ha’aretz*, June 15, 2003; Thomas L. Friedman, *From Beirut to Jerusalem* (New York: Anchor Books, 1990), chaps. 6–7. [フリードマン 『ベイルートからエルサレムへ NYタイムズ記者の中東報告』 鈴木敏・鈴木百合子訳、朝日新聞社、1993年]; Kimmerling, *Politicide*. [邦訳：キマーリング 『ポリテイサイド アリエル・シャロンの対パレスチナ人戦争』]; Ze’ev Schiff and Ehud Ya’ari, *Israel’s Lebanon War*, trans. Ina Friedman (New York: Simon & Schuster, 1984), 250–285; and Shlaim, *Iron Wall*, 90–92, 149–150, 384–423.

182ページ 軍事占領とは質が違う

Perry Anderson, "Scurrying Towards Bethlehem," *New Left Review* 10 (July–August 2001):5.

182ページ 他のすべての占領と同じように.....などからなるものだった

Morris, *Righteous Victims*, 341. 占領地域でイスラエル人がパレスチナ人をどのように扱っているかについて、詳細は、Amira Hass, *Reporting from Ramallah: An Israeli Journalist in an Occupied Land*, ed. and trans. Rachel Leah Jones (Los Angeles: Semiotext(e), 2003).

[邦訳：ハス『パレスチナから報告します 占領地の住民となって』くぼたのぞみ訳、筑摩書房、2003年]を参照のこと。イスラエルによる拷問については、以下を参照のこと。B'Tselem and Hamoked (Center for the Defense of the Individual), "Utterly Forbidden: The Torture and Ill-Treatment of Palestinian Detainees," draft report, Jerusalem, April 2007; Glenn Frankel, "Prison Tactics a Longtime Dilemma for Israel," *Washington Post*, June 16, 2004; Ron Kampeas, "State Report Claims Israel Tortures Palestinian Detainees," *JTA.org*, March 8, 2007; Public Committee Against Torture in Israel, "'Ticking Bombs': Testimonies of Torture Victims in Israel," draft report, Jerusalem, May 2007; William F. Schulz, "An Israeli Interrogator, and a Tale of Torture," letter to *New York Times*, December 27, 2004; and Aviram Zino, "Report: High Court Permits Torture of Palestinians," *Ynetnews.com*, May 30, 2007. B'Tselemは、イスラエルはパレスチナ人の子どもを人間の盾として使っているとして非難している。"Israeli Soldiers Use Palestinian Minors and an Adult as Human Shields in the Operation in Nablus," B'Tselem news release, Jerusalem, March 8, 2007を参照。

182～183ページ たとえば、87～91年.....範囲内で射殺されている

当段落および次段落で使用したデータと引用は、Swedish Save the Children, "The Status of Palestinian Children During the Uprising in the Occupied Territories," Excerpted Summary Material, Jerusalem, January 1990, in *Journal of Palestine Studies* 19, no. 4 (Summer 1990) :136–146に拠る。以下も参照のこと。Joshua Brilliant, "Officer Tells Court Villagers Were Bound, Gagged and Beaten. 'Not Guilty' Plea at 'Break Bones' Trial," *Jerusalem Post*, March 30, 1990; Joshua Brilliant, "'Rabin Ordered Beatings,' Meir Tells Military Court," *Jerusalem Post*, June 22, 1990; Jackson Diehl, "Rights Group Accuses Israel of Violence Against Children in Palestinian Uprising," *Washington Post*, May 17, 1990; James A. Graff, "Crippling a People: Palestinian Children and Israeli State Violence," *Alif* 13 (1993); Morris, *Righteous Victims*, 586–595; and Ronald R. Stockton, "Intifada Deaths," *Journal of Palestine Studies* 19, no. 4 (Summer 1990).

183ページ 『ハアレツ』紙でさえこう書いたほどである

"Unbridled Force," Ha'aretz editorial, March 16, 2003. その他の証拠としては、以下を参照のこと。Jonathan Cook, "Impunity on Both Sides of the Green Line," MERIP, *Middle East Report Online*, November 23, 2005; "When Everything Is Permissible," Ha'aretz editorial, June 6, 2005; "It Can Happen Here," Ha'aretz editorial, November 22, 2004; Chris McGreal, "Snipers with Children in Their Sights," *Guardian*, June 28, 2005; Chris

McGreal, "Israel Shocked by Image of Soldiers Forcing Violinist to Play at Roadblock," *Guardian*, November 29, 2004; Greg Myre, "Former Israeli Soldiers Tell of Harassment of Palestinians," *New York Times*, June 24, 2004; Reuven Pedatzur, "The Message to the Soldiers Was Clear," *Ha'aretz*, December 13, 2004; and Conal Urquhart, "Israeli Soldiers Tell of Indiscriminate Killings by Army and a Culture of Impunity," *Guardian*, September 6, 2005.

184ページ 妥当な対応というにはほど遠い

Reuvan Pedatzur, "More than a Million Bullets," *Ha'aretz*, June 29, 2004; Clayton E. Swisher, *The Truth About Camp David: The Untold Story About the Collapse of the Middle East Peace Process* (New York: Nation Books, 2004), 387–388.

184ページ IDFは暴動の最初の数日で.....残りの309人は軍人だった

ここにあげた数字は2000年9月29日から05年12月31日までのものであり、06年1月4日付のB'Tselemのニュースリリースに拠る。

184ページ 押し潰された23歳の米国人女性も含まれている

Nathan Guttman, "It's a Terrible Thing, Living with the Knowledge That You Crushed Our Daughter," *Ha'aretz*, April 30, 2004; Joshua Hammer, "The Death of Rachel Corrie," *MotherJones.com*, September/October 2003; Adam Shapiro, "Remembering Rachel Corrie," *Nation*, March 18, 2004; and Tsahar Rotem, "British Peace Activist Shot by IDF Troops in Gaza Strip," *Ha'aretz*, April 11, 2003.

184ページ イスラエル政府がこれらの.....犯人を罰することなどはまずない

アムネスティ・インターナショナルの報告によると、2000年秋に第2次インティファダが始まってから、「イスラエル軍や入植者によるパレスチナ人の違法な殺害やその他の人権侵害の申し立てを、イスラエル当局は通常捜査しない。.....イスラエル軍は数千人ものパレスチナ人を殺害しており、その多くは違法な殺害だ。しかしそうした事件のほとんどは適切に捜査されず、加害者を裁いた事例はほとんどない。.....イスラエル当局がパレスチナ人の殺害事件を真剣に捜査したごくわずかな例にしても、起訴に至らないか、判決に辿りついたとしても罪の重さに比べて軽すぎる刑に終わっている」。Amnesty International, "Road to Nowhere," December 2006, 27–28.

184ページ イスラエルの行動について.....異論が出ていない

パレスチナ人に対するイスラエル人の対応について、様々な人権団体による報告書を活用した詳細な議論については、Finkelstein, *Beyond Chutzpah*, chaps. 4–9を参照のこと。

184ページ イスラエルの国内治安組織.....とさえ呼んだ

Molly Moore, "Ex-Security Chiefs Turn on Sharon," *Washington Post*, November 15, 2003; "Ex-Shin Bet Heads Warn of 'Catastrophe' Without Peace Deal," *Ha'aretz*, November 15, 2003に引用されている。これらの発言は2003年11月14日のイスラエル紙 *Yedioth Ahronoth* とのインタビューに拠る。"We Are Seriously Concerned About the Fate of the State of

Israel”と題されたインタビューはGlobal Policy Forumのウェブサイトに掲載されている。
www.globalpolicy.org/security/issues/israel-palestine/2003/1118fate.htm.

185ページ これまでに数百人もパレスチナ人を殺害している

たとえば、B'Tselemは、「(2006年)7月、イスラエル軍はガザ地区でパレスチナ人163人を殺害した。そのうちの78人(48%)は殺害された時、敵対行為を行っていなかった。死者のうちの36人は未成年で、20人は女性だった。西岸地区では、7月、イスラエル軍によって15人のパレスチナ人が殺害された。7月のパレスチナ人の犠牲者数は、2002年4月以来、最多だった」と報告している。August 3, 2006, press release,

www.btselem.org/english/Press_Releases/20060803.asp。アムネスティ・インターナショナルの報告によると、IDFがガザ地区に再侵攻した2006年6月27日から11月末まで、イスラエル軍は「ガザ地区で400人以上のパレスチナ人を殺害し、1500人以上を負傷させた。これには、非武装の民間人多数が含まれている。犠牲者のうち約80人は子どもで、負傷した子どもは300人以上だ。この間、パレスチナ武装勢力がガザから発射したロケット弾により、イスラエル南部で2人のイスラエル民間人が殺害され、20人あまりが負傷した」。「Road to Nowhere,” 8-9.

185ページ 人権侵害はきわめて大きい

Rory McCarthy, “UN Condemns Massive Human Rights Abuses in Gaza Strip,” *Guardian*, November 21, 2006に引用されている。IDFがガザ在住のパレスチナ人に与えている苦痛についての記述は、以下を参照のこと。Amnesty International, “Road to Nowhere,” 7-13; Gideon Levy, “Gaza’s Darkness,” *Ha’aretz*, September 3, 2006; and OCHA, “The Humanitarian Monitor.”

186ページ テロリストの組織に加わっていただろう

Bill Maxwell, “U.S. Should Reconsider Aid to Israel,” *St. Petersburg Times* (online), December 16, 2001に引用されている。また、Ron Pundak, “From Oslo to Taba: What Went Wrong?” *Survival* 43, no. 3 (Autumn 2001): 37も参照のこと。

186ページ ほぼ間違いなく同じ戦術をとるだろう

実際のところ、イスラエルが1967年の六日戦争に負けて、アラブ人支配者によって現在パレスチナ人が耐えているのと同じ状況に置かれたとしたら、イスラエル人は抑圧者に対して間違いなくテロをしかけることだろう。アイルランド系米国人や海外にいるタミル人が祖国のテロ集団を支援するのと同様に、故郷を離れたユダヤ人も、まず間違いなく、故国に残る同胞を支援するために動くだろう。

186ページ (モリスの推測)

Morris, *Righteous Victims*, 147, 201. 以下も参照のこと。Lenni Brenner, *The Iron Wall: Zionist Revisionism from Jabotinsky to Shamir* (London: Zed Books, 1984), 100; and Yehoshua Porath, *The Palestinian Arab National Movement: From Riots to Rebellion*, Vol. 2, 1929-1939 (London: Frank Cass, 1977), 238. モリスは、48年の戦争中、主だったユダヤ人テロ集団は「女性や子どもを含む非戦闘員を殺害する目的で、バス停留所に爆弾を意図的にしかけた」と記している。 *Birth Revisited*, 80.

186ページ 多くの罪のない市民を巻き添えにした

以下を参照のこと。J. Bowyer Bell, *Terror Out of Zion: The Fight for Israeli Independence 1929–1949* (New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, 1996), 103–253; Johann Hari, “Israel Should Remember Its Own ‘Terrorist’ Origins,” *Independent*, July 24, 2006; Joseph Heller, *The Stern Gang: Ideology, Politics and Terror, 1940–1949* (Portland, OR: Frank Cass, 1995); Bruce Hoffmann, *The Failure of British Military Strategy Within Palestine, 1939–1947* (Israel: Bar-Ilan University, 1983); Morris, *Righteous Victims*, 173–180; and Tom Segev, *One Palestine, Complete: Jews and Arabs Under the British Mandate*, trans. Haim Watzman (New York: Henry Holt, 2000), chap. 22. ハイム・レーベンバーグによると、46年にパレスチナでユダヤ人のテロにより犠牲となった429人のうちの210人は民間人だった。残りの219人は警官や兵士だった。Levenberg, *Military Preparations*, 72を参照のこと。

186ページ ベルナドットの提案に反対したからだ

Bell, *Terror Out of Zion*, 336–340.

187ページ (シャミールの発言)

以下に引用されている。Chomsky, *Fateful Triangle*, 485–486; and Bell, *Terror Out of Zion*, 340. シャミールについては、Avishai Margalit, “The Violent Life of Yitzhak Shamir,” *New York Review of Books*, May 14, 1992 を参照のこと。また、自らが「最も誇る成果」として「努力したおかげで、イスラエル解放のために戦うすべての地下組織を完全に統一した」ことだとも語った。“Shamir: Lifetime of Activism”を参照のこと。

187ページ ザ・テロリスト(テロリストの中のテロリスト)

Barzilai, “Brief History.”

188ページ パレスチナ側が望むほとんどすべてのことを申し出た

“Palestinian Authority,” *New Republic* editorial, February 18, 2002, 7.

189ページ それが正確ではないことだ

キャンプ・デービッドの結果とその後半年間の経緯に関する最も客観的な文献としては、以下がある。Charles Enderlin, *Shattered Dreams: The Failure of the Peace Process in the Middle East, 1995–2002*, trans. Susan Fairfield (New York: Other Press, 2003); Jeremy Pressman, “Visions in Collision: What Happened at Camp David and Taba?” *International Security* 28, no. 2 (Fall 2003); Pundak, “From Oslo to Taba”; Jerome Slater, “What Went Wrong? The Collapse of the Israeli-Palestinian Peace Process,” *Political Science Quarterly* 116, no. 2 (July 2001); Deborah Sontag, “Quest for Mideast Peace: How and Why It Failed,” *New York Times*, July 26, 2001; and Swisher, *Truth About Camp David*.

189ページ (バラクの提案)

当段落および次段落であげた数字は、Pressman, “Visions in Collision,” 16–18から引用した。バラクの提案には、1%を西岸以外の土地と交換するというものも含まれていた。このため、バ

ラクの提案は91%ではなく92%だとする評論家もいた。

190ページ 彼らはすでに93年の.....同意してしまっていたことだ

第1次世界大戦終了時に結ばれた条約で英国に割り当てられたそもそもの領土には、ヨルダン川の東西両岸地区が含まれていた。しかし、1922年、英国は東岸地区にトランスヨルダン王国（後のヨルダン・ハシミテ王国）を成立させた。これ以降、パレスチナにおける英国の委任統治には、現在のイスラエル、ガザ地区、西岸地区に相当する領域も含まれた。本書でパレスチナ委任統治という場合、22年以降の領域を指す。この領域のうち、78%がイスラエルで、22%が占領地域である。

190ページ （バラクの発言）

キャンプ・デービッドを振り返るエフロード・バラクとの長時間インタビューについて説明する一方で、ベニー・モリスは以下のようにも書いている。「バラク氏いわく、西岸では、パレスチナ人は一続きの自治領域を約束されたのだということです。エルサレムからマアレ・アドミム入植地を經由してヨルダン川までつながる細長いイスラエルの土地を除いてですが」。Benny Morris, "Camp David and After: An Exchange (1. An Interview with Ehud Barak)," *New York Review of Books*, June 13, 2002, 44. Pundak, "From Oslo to Taba," 46に掲載されている地図も参照のこと。パレスチナ人の立場からその地図がどのように見えるかについては、Orient House (Jerusalem), "Israel's Concessions," *Le Monde Diplomatique*, December 2000, Dennis Ross, *The Missing Peace: The Inside Story of the Fight for Middle East Peace* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 2004)に掲載されている地図"Palestinian Characterization of the Final Proposal at Camp David"を参照のこと。バラクやパレスチナ人に反して、ロスは、キャンプ・デービッドで最終的に合意した地図では、西岸地区の一区画の支配権がパレスチナ人に与えられていたと主張する。同文献 "Map Reflecting Actual Proposal at Camp David" を参照。ロスの主張には説得力がないが、バラクですらエルサレムとヨルダン渓谷を結ぶイスラエル管理下の道路は西岸を分断しただろうと認めている。イスラエルが戦略的に重要な渓谷を支配する限り、十分に警備された少なくとも一筋の接続道路で到着できるようにしておく必要があるだろう。バラクがエルサレムから東へ向かう一筋の道路を想定する一方で、パレスチナ人もアリエル入植地からヨルダン渓谷へと東に向かう二筋めの道路を思い描いていることは明らかだった。イスラエルがヨルダン渓谷を明け渡す場合、こうした接続道路を放棄するのではないかという議論もあるかもしれない。しかしすでに記述があるように、イスラエルが渓谷から出ていく保証はなく、仮に出ていったとしても接続道路を放棄するという保証はない。キャンプ・デービッドでの最終合意地図がどういったものだったのか混乱が続く理由は、公式な地図が提示されず、「バラクのように、筆記録がない」からである。Jerome Slater, "The Missing Pieces in the Missing Peace," *Tikkun.org*, May/ June 2005.

190ページ 接続道路地帯によってつなぐことになっただろう

Pressman, "Visions in Collision," 18.

191ページ 恒久的に阻むものであった

Enderlin, *Shattered Dreams*, 243–251; Slater, "What Went Wrong?"; and Sontag, "Quest for Mideast Peace."

191ページ キャンプ・デービッドの提案を拒否したろう

“Norman Finkelstein & Former Israeli Foreign Minister Shlomo Ben-Ami Debate: Complete Transcript,” *Democracy Now!* radio and TV broadcast, February 14, 2006に引用されている。

191ページ よく聞かされる主張も証拠と合わない

アラファトが第一次インティファダを始めたという証拠もない。Morris, *Righteous Victims*, 561を参照のこと。モリスいわく、「インティファダの主な原動力は、ガザ地区に65万人、西岸に90万人、東エルサレムに13万人いた住民の国民的願望が不満になったものだ。彼らは、残酷な外国の軍事占領下で国を持たない住民として生きるのではなく、パレスチナ国家で生きることを望んでいたのだ」。同文献562。

191ページ 両首脳は意外に……交渉に対しても楽天的だった

Enderlin, *Shattered Dreams*, 284–285.

191ページ 実施指令を出したりしてはいない

Jeremy Pressman, “The Second Intifada: Background and Causes of the Israeli-Palestinian Conflict,” *Journal of Conflict Studies* 22, no. 2 (Fall 2003): 116に引用されている。以下も参照のこと。Yezid Sayigh, “Arafat and the Anatomy of a Revolt,” *Survival* 43, no. 3 (Autumn 2001); Henry Siegman, “Partners for War,” *New York Review of Books*, January 16, 2003, 24; Henry Siegman, “Sharon and the Future of Palestine,” *New York Review of Books*, December 2, 2004, 12; and Slater, “Missing Pieces.”

191～192ページ 和平プロセスの再開をまかされていた

Sharm El-Sheikh Fact-Finding Committee, *Final Report*, April 30, 2001, 7.

192ページ それを防ぎたいと思っていたからに他ならない

Sharm El-Sheikh Fact-Finding Committee, *Final Report*, April 30, 2001, 5.

192ページ シャロンの訪問直後の……対応が加わった

Ian S. Lustick, “Through Blood and Fire Shall Peace Arise,” *Tikkun.org*, May/June 2002; Pressman, “The Second Intifada”; Mouin Rabbani, “A Smorgasbord of Failure: Oslo and the Al-Aqsa Intifada,” in *The New Intifada: Resisting Israel’s Apartheid*, ed. Roane Carey (London: Verso, 2001), 69–89; Sara Roy, “Why Peace Failed: An Oslo Autopsy,” *Current History* 101, no. 651 (January 2002); and Sara Roy, “Ending the Palestinian Economy,” *Middle East Policy* 9, no. 4 (December 2002).

192ページ (ベンアミの記述)

Ben-Ami, *Scars of War*, 264.

193ページ 入植者人口を約10万人増やして、これを倍増させた

Roy, "Why Peace Failed," 9.

193ページ イスラエルは躊躇することなく……火器を撃ち込んだ

Ron Dudai, "Trigger Happy: Unjustified Shooting and Violation of the Open-Fire Regulations During the al-Aqsa Intifada," B'Tselem draft report, March 2002.

193～194ページ 90年には……示そうと懸命だった

Yasser Arafat, "The Palestinian Vision of Peace," *New York Times*, February 3, 2002;

Yasser Arafat, text of press conference, Geneva, December 14, 1988, in *Journal of*

Palestine Studies, 18, no. 3 (Spring 1989), 180–181; "Palestinians Affirm Israel's Right to

Exist," *CNN.com*, December 14, 1998; Pressman, "Visions in Collision," 24–27; Yezid

Sayigh, *Armed Struggle and the Search for State: The Palestinian National Movement,*

1949–1993 (New York: Oxford University Press, 1997); and Jerome M. Segal, *Creating the*

Palestinian State: A Strategy for Peace (Chicago: Lawrence Hill Books, 1989), chap. 1.

アラファトがパレスチナ人の帰郷権にこだわっていたのは、彼が依然としてイスラエル破壊を念頭に置いていたからだという議論もある。しかし、大勢のパレスチナ人のイスラエル帰郷を認めるような和平合意に賛成するイスラエル指導者はいないことを、アラファトは確実に認識していた。これは同時に、交渉しないうちから帰郷権についての姿勢を軟化させることはないというもっともな理由ともなり、アラファトはこの問題を切り札として利用することができたのだ。驚くことではないが、パレスチナ人指導者（死去前のアラファトも含め）が、最終合意を得るにはこの重要問題で大幅な譲歩をせざるを得ないと認識していたことを示す十分な証拠がある。以下を

参照のこと。Akiva Eldar and David Landau, "Arafat: Israel Is Jewish; Won't Cite Figure

on Refugees," *Ha'aretz*, June 18, 2004; Associated Press, "PA Minister Sha'ath:

Palestinian Right of Return Is Negotiable," *Ha'aretz*, August 20, 2003; Pressman, "Visions

in Collision," 28–33; and M. J. Rosenberg, "Intractable Issue?" Weekly Opinion Column,

Issue #144, Israel Policy Forum, Washington, DC, July 18, 2003.

194ページ 西岸地区とガザ地区に創ろうとしているだけ

以下を参照のこと。Akiva Eldar, "Popular Misconceptions," *Ha'aretz*, June 11, 2004; Akiva

Eldar, "While They Were Sleeping," *Ha'aretz*, September 17, 2001; Danny Rubenstein,

"The Stronger Side Creates Reality," *Ha'aretz*, June 16, 2004; and Emmanuel Sivan,

"What the General Is Allowed," *Ha'aretz*, June 14, 2004.

194ページ もしアラファトと……という

Pressman, "Visions in Collision," 25.

194ページ いくつかのことで態度を保留した

"Official Palestinian Response to the Clinton Parameters (and letter to international community)," January 1, 2001を参照のこと。以下のサイトに掲載されている。

www.robat.scl.net/content/NAD/negotiations/clinton_parameters/param2.php.

195ページ 演説で、この点を確認している

以下を参照のこと。“Excerpts: White House Spokesman on Clinton-Arafat Talks,” issued by Press Section, U.S. embassy in Israel, January 3, 2001; Transcript of “Clinton Speech on Mideast Peace Parameters (January 7, 2001),” Office of the White House Press Secretary, January 8, 2001; and Enderlin, *Shattered Dreams*, 344. 以下も参照。Akiva Eldar, “The Battle for Public Opinion,” *Ha’aretz*, June 24, 2002, and Pressman, “Visions in Collision,” 20. この両方で、イスラエルもまたクリントンの示した条件に重大な保留をしたことが明らかになっている。

195ページ パラクはこれまでと感じたのだ

Sontag, “Quest for Mideast Peace”; and Enderlin, *Shattered Dreams*, 349–350.

196～197ページ イスラエルへの連帯意識は……傾向がそれを示しています

Jeff Jacoby, “America Takes Side of Israel,” *Boston Globe*, March 26, 2006. ブロックの発言は、Tony Czuczka, “Under Fire, Israel Lobby Rallies US Backers,” *EUX.TV: The Europe Channel* (online), March 10, 2007に引用されている。以下も参照のこと。Mart, *Eye on Israel*; Martin Peretz, “Oil and Vinegar: Surveying the Israel Lobby,” *New Republic*, April 10, 2006.

197ページ 拠り所であったことは過去にほとんどない

歴史家ミシェル・マートによると、冷戦中に「イスラエル人はアメリカナイズされ」、この変容は「ユダヤ教徒とキリスト教徒の共有」感によるところが大きい。Michelle Mart, “The Cultural Foundations of the US/Israel Alliance,” *Tikkun.org*, November 11, 2006.

198ページ さらにには……37%の低さだった

Jodie T. Allen and Alec Tyson, “The U.S. Public’s Pro-Israel History,” Pew Research Center, July 19, 2006; “Americans’ Support for Israel Unchanged by Recent Hostilities,” Pew Research Center press release, July 26, 2006; and Robert Ruby, “A Six-Day War: Its Aftermath in American Public Opinion,” Pew Research Center, May 30, 2007.

198ページ イスラエルを援護することは世界中で米国のイメージを損なっている

Allen and Tyson, “The U.S. Public’s Pro-Israel History”; Pew Research Center for the People and the Press in Association with the Council on Foreign Relations, “America’s Place in the World 2005: An Investigation of the Attitudes of American Opinion Leaders and the American Public About International Affairs,” November 2005, 11–12.

198～199ページ 米国攻撃を決定した要因になっている

“Conspiracy Theories and Criticism of Israel in Aftermath of Sept. 11 Attacks,” Anti-Defamation League press release, November 1, 2001.

199ページ 60%の米国民は……肩入れすべきではないと言っている

Steven Kull (Principal Investigator), “Americans on the Middle East Road Map (Program on International Policy Attitudes,” University of Maryland, May 30, 2003), 9–11, 18–19.

199ページ 肩入れすべきではないと考えている

“American Attitudes Toward Israel and the Middle East”2005年3月18日から25日にかけて、また6月19日から23日にかけて、名誉毀損防止連盟（ADL）のマーティラ・コミュニケーション・グループ（Marttila Communications Group）が行った世論調査。

199ページ 米国は中立的役割を果たすことを好んでいる

Andrew Kohut, “American Views of the Mideast Conflict,” *New York Times*, May 14, 2002.

199ページ 米国医はどちらの側にもつくべきではない

第2次レバノン戦争に対するイスラエルの責任については、2006年8月3日から6日にかけて行われたABC News、*Washington Post*による世論調査、および、06年7月21日から25日にかけて行われたCBS News、*New York Times*による世論調査を参照のこと。どちらも、“Israel, the Palestinians,” *PollingReport.com*で見ることができる。米国がどちらの肩も持たないという点については、同サイトの*USA Today*、Gallupによる世論調査、06年8月11日から15日にかけて行われたZogby世論調査を参照のこと。この結果は“Zogby Poll: U.S. Should Be Neutral in Lebanon War,” Zogby International press release, August 17, 2006にまとめられている。

第四章 イスラエル・ロビー とは何か？

202ページ 誰もが心配するのも道理だろう

以下を参照のこと。Andrew C. Revkin, “Bush Aide Edited Climate Reports,” *New York Times*, June 8, 2005; Andrew C. Revkin and Matthew Wald, “Material Shows Weakening of Climate Reports in Hundreds of Instances,” *New York Times*, March 20, 2007.

204ページ 慣用的に用いられているからだ

民族的なロビー活動や、それが外交政策に及ぼす影響についての重要な研究としては以下がある。Tony Smith, *Foreign Attachments: The Power of Ethnic Groups in the Making of American Foreign Policy* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2000); *Ethnicity and U.S. Foreign Policy*, 2nd ed., ed. A. A. Said (New York: Praeger, 1981); *Ethnic Groups and U. S. Foreign Policy*, ed. M. E. Ahrari (New York: Greenwood Press, 1987); Paul Watanabe, *Ethnic Groups, Congress, and American Foreign Policy: The Politics of the Turkish Arms Embargo* (Westport, CT: Greenwood Press, 1984); and R. Hrair Dekmejian and Angelos Themelis, “Ethnic Lobbies in U.S. Foreign Policy: A Comparative Analysis of the Jewish, Greek, Armenian and Turkish Lobbies,” Occasional Research Paper no. 13, Institute of International Relations, Panteion University of Social and Political Sciences, Athens, Greece, October 1997.

204ページ 境界線上の個人……存在するものだ

これは政治分析を行う際に決まって問題となる点だ。たとえば、「リベラル」と「コンサーヴァティヴ」の概念はよく理解されており議論の余地もなく典型例をあげることは容易だ（たとえば、「リベラル」であればエドワード・ケネディ上院議員、「コンサーヴァティヴ」であればニュート・ギングリッチ前下院議員）。しかし、ジョセフ・リーバーマン上院議員や故スクーブ・ジャクソン上院議員など、国内問題についてはリベラル、外交方針問題についてはコンサーヴァティヴなど区別が難しい議員もいる。

207ページ （ウロフスキー、ローゼンタールの記述）

Melvin I. Urofsky, *American Zionism from Herzl to the Holocaust* (Garden City, NY: Anchor Press, 1975), 1; and Steven T. Rosenthal, “Long Distance Nationalism: American Jews, Zionism, and Israel,” in *The Cambridge Companion to American Judaism*, ed. Dana Evan Kaplan (New York: Cambridge University Press, 2005), 209を参照のこと。

207ページ （トライスの記述）

Robert H. Trice, “Domestic Interest Groups and the Arab-Israeli Conflict,” in Said, *Ethnicity and U.S. Foreign Policy*, 121–122.

208ページ ある調査によると…… “まったく好きではない” と答えている

Steven M. Cohen, *The 2004 National Survey of American Jews* (Jewish Agency for Israel’s Department of Jewish-Zionist Educationが資金提供), February 24, 2005を参照のこと。また、*2006 Annual Survey of American Jewish Opinion* (2006年9月25日～10月16日実施), American Jewish Committee, October 18, 2006; Steven M. Cohen, “Poll: Attachment of U.S. Jews to Israel Falls in Past 2 Years,” *Forward*, March 4, 2005; and M. J. Rosenberg, “Letting Israel Sell Itself,” Weekly Opinion Column, Issue #218, Israel Policy Forum, Washington, DC, March 18, 2005. 米国ユダヤ人委員会向けに用意された最近の報告書によると、「イスラエルは若いユダヤ人のアイデンティティの中心ではないという合意がいくつかの研究で一致した」。Jacob B. Ukeles et al., “Young Jewish Adults in the United States Today,” American Jewish Committee, September 2006, 34. また、Amiram Barkat, “Young American Jews Are More Ambivalent Toward Israel, Study Shows,” *Ha’aretz*, March 7, 2005も参照のこと。

209ページ ユダヤ系米国人の……親近感を持ち続けている

主要なユダヤ人団体である“全米ユダヤ広報団体顧問会議”（NJCRAC）合同事業計画が1957年に言ったように、「米国社会は、米国系ユダヤ人がイスラエルに関心を寄せるのは自然なことで同情や感情的一体感にもとづく関心が当然に表れたものと受け止めている。この一体感はある意味、多くの米国人に共通して見られるものだ」。Jack Wertheimer, “Jewish Organizational Life in the United States Since 1945,” *American Jewish Yearbook 1995* (New York: American Jewish Committee, 1995), 13に引用されている。

209ページ 広く知られている

Rosenthal, “Long Distance Nationalism,” 211; and Thomas A. Kolsky, *Jews Against*

Zionism: The American Council for Judaism, 1942–1948 (Philadelphia: Temple University Press, 1990).

209ページ 当初それを批判した

改革派ラビの団体である“米国ラビ中央会議”（Central Conference of American Rabbis, CCAR）の立場が変貌し、この転換をうまくとらえている。1897年、CCARは「私たちはユダヤ国家を樹立しようとするいかなる試みにも真っ向から反対する。そうした試みはイスラエルの使命を誤解させるものだ」と宣言し、1917年のバルフォア宣言を承認しなかった。これとは対照的に67年、CCARは「イスラエル国家とイスラエル国民との連帯」を宣言し、「彼らの勝利は私たちの勝利だ。彼らの試練は私たちの試練だ。彼らの運命は私たちの運命だ」と宣言した。Chaim I. Waxman, “All in the Family: American Jewish Attachments to Israel,” in *A New Jewry? America Since the Second World War*, Studies in Contemporary Jewryに引用されている。An Annual, Vol. VIII, ed. Peter Y. Medding (New York: Oxford University Press for the Institute of Contemporary Jewry, Hebrew University, 1992), 140も参照のこと。

209～210ページ （ローゼンタールの記述）

Rosenthal, “Long Distance Nationalism,” 212.

210ページ （ワックスマンの報告）

Waxman, “All in the Family,” 134. 一例を示すと、米国ユダヤ人会議の中心議題として最初にあげられていた項目は、「イスラエルと世界のユダヤ人コミュニティの安全保障」であった。www.ajcongress.org/site/PageServer?pagename=aboutを参照のこと。状況は今日もあまり変わっていない。2005年度版年鑑には「イスラエル関連」とされたグループが90以上も掲載されている。

210～211ページ 掲げる任務には……などが含まれている

「当団体について」「活動内容」は“全米主要ユダヤ人団体代表者会議”（CPMAJO）のウェブサイトwww.conferenceofpresidents.org/content.asp?id=52から引用した。CPMAJOは、多数あるユダヤ人団体に対応するのは困難なため窓口を一つにしてもらえたら非常にありがたいという、ヘンリー・バイロード国務次官補の苦情を受けて1954年に創立された。Edward Tivnan, *The Lobby: Jewish Political Power and American Foreign Policy* (New York: Simon & Schuster, 1987), 40–41を参照のこと。

211ページ およそ300万ドル（3億6000万円）の寄付をした

この数字は個人献金を除外しているため、親イスラエル派キャンペーンによる献金の役割を過小評価している。www.crp.org/pacs/industry.asp?txt=Q05&cycle=2006を参照のこと。「隠れ親イスラエル」の一般的現象については、Richard H. Curtiss, *Stealth PACs: Lobbying Congress for Control of U.S. Middle East Policy*, 4th ed. (Washington, DC: American Educational Trust, 1996) を参照のこと。

211ページ ヘビー級のロビーよりは上位だった

Jeffrey H. Birnbaum, “Washington’s Power 25,” *Fortune*, December 8, 1997. AIPACは、01

年に行われた同様の調査で4位だった。Jeffrey H. Birnbaum and Russell Newell, “Fat and Happy in D.C.,” *Fortune*, May 28, 2001を参照のこと。

211ページ AARPと同点の2位だった

Richard E. Cohen and Peter Bell, “Congressional Insiders Poll,” *National Journal*, March 5, 2005; and James D. Besser, “Most Muscle? It’s NRA, Then AIPAC and AARP,” *Chicago Jewish Star*, March 11–24, 2005.

211～212ページ (ディマリーとハミルトンの発言)

ディマリーは、Robert Pear with Richard L. Berke, “Pro-Israel Group Exerts Quiet Might as It Rallies Supporters in Congress,” *New York Times*, July 7, 1987に引用されている。ハミルトンは、George D. Moffett III, “Israeli Lobby Virtually Unmatched,” *Christian Science Monitor*, June 28, 1991に引用されている。

212ページ ユダヤ人の友人と顧問たちによる仲介の影響を受けた

ブランダイス、ワイズその他が果たした役割については、以下を参照のこと。Irvine Anderson, *Biblical Interpretation and Middle East Policy: The Promised Land, America and Israel, 1917–2002* (Gainesville: University Press of Florida, 2005), 61–62; and Peter Grose, *Israel in the Mind of America* (New York: Knopf, 1983), 67–71. トルーマンのビジネスパートナーであったエディー・ヤコブソンは、1948年、ハイム・ヴァイツマンに会うようトルーマンを説得した。デイヴィッド・ナイルズ、クラーク・クリフォードといったシオニスト系アドバイザーは1947年の分割案を支持し、1948年には新国家を承認するようトルーマンを説得する一翼を担った。トルーマンの決定に様々な影響を与えたその他の見解については以下を参照のこと。Peter L. Hahn, *Caught in the Middle East: U.S. Policy Toward the Arab-Israeli Conflict, 1948–1961* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2006), 26–31 and chaps. 2–3; Zvi Ganin, *Truman, American Jewry, and Israel, 1945–1948* (New York: Holmes and Meier, 1979); Steven L. Spiegel, *The Other Arab-Israel Conflict: Making America’s Middle East Policy from Truman to Reagan* (Chicago: University of Chicago Press, 1985), chap. 2; Kenneth Ray Bain, *The March to Zion: United States Policy and the Founding of Israel* (College Station: Texas A & M Press, 1979); and Warren Bass, *Support Any Friend: Kennedy’s Middle East and the Making of the U.S.-Israeli Alliance* (New York: Oxford University Press, 2003), 23–34.

213ページ “ケネンのルール” に従った

Lloyd Grove, “The Men with Muscle: the AIPAC Leaders, Battling for Israel and Among Themselves,” *Washington Post*, June 14, 1991.

213ページ 個人的友人にユダヤ人が多くいたからだ

J. J. Goldberg, *Jewish Power: Inside the American Jewish Establishment* (New York: Basic Books, 1996), 158.

213ページ (アイゼンシュタットの発言)

Stuart Eizenstat, "Loving Israel, Warts and All," *Foreign Policy* 81 (Winter 1990–91):92.

213～214ページ 表明しない理由はほとんどなかった

Stuart Eizenstat, "Loving Israel, Warts and All," *Foreign Policy* 81 (Winter 1990–91); and Melvin I. Urofsky, *We Are One! American Jewry and Israel* (Garden City, NY: Doubleday, 1978).

214ページ 「イスラエルに的を絞った」態度が強まった

ジャック・ウェルサイマーは、「六日戦争勃発時、組織化されたユダヤ人コミュニティの先入観や雰囲気大きな変化を経験したことに疑問の余地はない。……米国系ユダヤ民族はイスラエルに完全な一体感を感じていた。コミュニティを刺激したこの一体感のおかげで、これまでにないほどの慈善寄付やボランティアが集まった」としている。"Jewish Organizational Life," 32; and Menahem Kaufman, "Envisaging Israel: The Case of the United Jewish Appeal," in *Envisioning Israel: The Changing Ideals and Images of North American Jews*, ed. Allon Gal (Jerusalem: Magnes Press/ Hebrew University, 1996), 232–234を参照のこと。

214ページ (ウェルトハイマーの発言)

Wertheimer, "Jewish Organizational Life," 32–33.

214ページ イスラエルのためのロビー活動……傑出したものとなった

Wertheimer, "Jewish Organizational Life," 55.

215ページ イスラエルを助けたいと思うなら、政治活動だ

Wolf Blitzer, "The AIPAC Formula," *Moment*, November 1981, 23に引用されている。

215ページ 年間予算は……になっている

AIPACは年間予算を公表していない。ここで取り上げた数字は、Blitzer, "AIPAC Formula," 23; Lloyd Grove, "On the March for Israel; The Lobbyists from AIPAC, Girding for Battle in the New World Order," *Washington Post*, June 13, 1991; Jeffrey H. Birnbaum "Pro-Israel Lobby Holds Meeting Amid Worries," *Washington Post*, May 19, 2005; Thomas B. Edsall and Molly Moore, "Pro-Israel Lobby Has Strong Voice," *Washington Post*, September 5, 2004; and James Petras, "AIPAC on Trial," *CounterPunch.org*, January 7–8, 2006を参考にした。

215ページ ある元AIPAC職員によると……その理屈だった

Goldberg, *Jewish Power*, 223に引用されている。

215ページ ウォーレン・バスが……なっていたのである

Bass, *Support Any Friend*, 147. また、Goldberg, *Jewish Power*, 197–203も参照のこと。

216ページ すでに記したように……と考えている

Goldberg, "Old Friend, Shattered Dreams," *Forward*, December 24, 2004; Esther Kaplan,

“The Jewish Divide on Israel,” *Nation*, July 12, 2004; Michael Massing, “Conservative Jewish Groups Have Clout,” *Los Angeles Times*, March 10, 2002; Eric Yoffie, “Reform the Conference,” *Forward*, August 2, 2002; and William Fisher, “U.S. Jewish Groups Press Mideast Peace,” *Antiwar.com*, November 25, 2004.

216ページ 厳しい制約を課すことになったはずだ

Daniel Levy, “Is It Good for the Jews?” *American Prospect*, July 5, 2006を参照のこと。

217ページ われわれはイスラエルの援助を……それは止まらなくなるからだ

Sharon Samber, “Congress Urged Not to Link Israel Aid to China Arms,” *JTA.org*, June 13, 2000に引用されている。

217ページ 防ぐことだけを求めている

たとえば、Americans for Peace Now, “Briefing for the 110th Congress: Securing Israel’s Future Through Peace,” 8, www.donteverstop.com/files/apn/upl/assets/APN110thBBook.pdf を参照のこと。

217ページ 説得することに努力を集中している

IPFのウェブサイトによると、「イスラエル・パレスチナ紛争の解決として二国家共存を取れば、イスラエルとアラブ諸国、そして地域全体がより安全になり、繁栄し、安定すると、イスラエル政策フォーラムは確信している」という。www.ipforum.org/display.cfm?id=1を参照。

217ページ 特筆すべき例外は……求めている

Jewish Voice for Peace, “U.S. Military Aid to Israel,” http://www.jewishvoiceforpeace.org/publish/printer_17.shtml.

218ページ 米国のユダヤ人社会は、誰かに使われる気はありません

Tivnan, *The Lobby*, 93に引用されている。

218ページ ユダヤ人社会に伝える伝達手段だった

Goldberg, *Jewish Power*, 206に引用されている。

218～219ページ (ブックバインダーの発言)

Ori Nir, “FBI Probe: More Questions Than Answers,” *Forward*, May 13, 2005; Bookbinder は、Wolf Blitzer, *Between Washington and Jerusalem: A Reporter’s Notebook* (New York: Oxford University Press, 1985), 148に引用されている。

219ページ 軍事援助の支給を退けたことである

これらの事例については、Hahn, *Caught in the Middle East*, 39–42, 46–51, 57–59, 79–82を参照のこと。

219ページ イスラエル政府は……手紙が殺到した」という

この活動（また、引用されているイスラエルとのやりとり）は、Tom Segev, *1967: Israel, the War, and the Year That Transformed the Middle East*, trans. Jessica Cohen (New York: Metropolitan Books, 2007), 254, 264–265, 304–305に詳述されている。

220ページ さらにホーンラインは.....強調したという

David Landau, “The Battle for Washington,” *Ha’aretz*, March 28, 2003に引用されている。

220ページ このユダヤ人社会集団は.....原則を受け入れている

Jonathan Marcus, “Discordant Voices: The U.S. Jewish Community and Israel During the 1980s,” *International Affairs* 66, no. 3 (July, 1990): 546. 以下も参照のこと。Sarah Bronson, “Orthodox Leader: U.S. Jews Have No Right to Criticize Israel,” *Ha’aretz*, August 2, 2004; and Daniel Ben Simon, “Storm Warnings,” *Ha’aretz*, November 14, 2003.

220ページ 数百万のユダヤ人にとって.....同調するのだ

Rosenthal, “Long Distance Nationalism” 214; ブックバインダーは、Blitzer, *Between Washington and Jerusalem*, 147–148に引用されている。歴史家デイヴィッド・ピアレは1980年代の著作の中で、「過去20年間、組織化されたユダヤ人コミュニティにおいてシオニズムは観念的な主導権を握り、その影響力でイスラエル政府の個別政策の多くに関する議論を沈静化させた」と述べている。*Power and Powerlessness in Jewish History* (New York: Schocken Books, 1986), 189.

220ページ およそ3分の2の回答者が.....ことに賛成だ

2004 Survey of American Jewish Opinion (2004年8月18日～9月1日実施), American Jewish Committee, September 21, 2004, question 16. これより先に行われた複数の世論調査でも同様の結果が得られた。

222ページ ブレイラは5年後に解散した

ブレイルの略史は、Michael E. Staub, *Torn at the Roots: The Crisis of Jewish Liberalism in Postwar America* (New York: Columbia University Press, 2002), chap. 8; Tivnan, *The Lobby*, 90–96; Wertheimer, “Jewish Organizational Life,” 39–43; and Goldberg, *Jewish Power*, 207–208に拠る。

223ページ 原則の一番目は.....行うだけにすべきである

Goldberg, *Jewish Power*, 208.

223ページ イスラエルへの全面的支持は.....必要な条件となった

Tivnan, *The Lobby*, 76. デイヴィッド・ピアレは1986年にも同様の見解を明らかにした。「組織化されたユダヤ人コミュニティにとって、イスラエルを支援しないことは国家反逆に等しい。.....イスラエルについての信念の欠如は異端と見なされる問題だ」*Power and Powerlessness*, 188.

223ページ イスラエルの政策を公然と批判する.....残っている

イツハク・シャミール首相が帰郷法改定案をあっさり容認すると、米国のユダヤ人指導者は公然と憤慨した。この改定案は、ユダヤ教正統派ラビがハラハ（ユダヤ法）に従ってユダヤ教への改宗を執り行うことを要件とするものだ。“アメリカン・リフォーム・ムーヴメント”のラビ、エリック・ヨフィーは、「もし、イスラエルにいる改革派ラビがラビでなく、彼らによる改宗が改宗でないとしたら、私たちのユダヤ教はユダヤ教ではなく、私たちは二級ユダヤ人ということになる」と表現した。Rosenthal, “Long Distance Nationalism,” 218に引用されている。Goldberg, *Jewish Power*, 337–342も参照のこと。

223～224ページ 公の討論への反対が……示している

以下を参照のこと。Lawrence Grossman, “Jewish Communal Affairs,” *American Jewish Yearbook 1998* (New York: American Jewish Committee, 1998), 110–111; Tom Tugend, “Talk by N.Y. Times’ Friedman Spurs ADL-ZOA Political Fuss,” *JTA.org*, December 6, 1996; and Tom Tugend, “N.Y. Times Columnist Applauds ADL for Not Caving in to ZOA,” *JTA.org*, December 13, 1996.

224ページ 数年後に、当時……断言している

Inigo Gilmore, “U.S. Jewish Leader Hit over Letter,” *Sunday Telegraph* (London) August 12, 2003; and Isi Liebler, “An Open Letter to Edgar Bronfman,” *Jerusalem Post*, August 6, 2003.

225ページ ことイスラエルに関しては、わが語彙に“圧力”の語はない

Isi Liebler, “When Seymour Met Condi,” *Jerusalem Post*, November 24, 2005; Ori Nir, “O.U. Chief Decries American Pressure on Israel,” *Forward*, December 2, 2005; Ori Nir, “Rice Trip Raises Concern over U.S. Pressure on Israel,” *Forward*, November 18, 2005; and Seymour D. Reich, “Listen to America,” *Jerusalem Post*, November 13, 2005から引用した。

225ページ “ブレイラ”はだめだった……10年ともたなかった

ブレイラを非難した“イスラエルの安全を求める米国人の会”のパンフレットを作成したラエル・ジーン・アイザックは、“ニュー・ジューイッシュ・アジェンダ”に対して同様の反論を書き、この米国シオニスト協会ワシントン支部長はこの団体を「親イスラエルではなく親アラブだ」と糾弾した。再度の予算不足、その他の問題に見舞われ、“ニュー・ジューイッシュ・アジェンダ”はなんとか12年間存続したものの、1992年に閉鎖した。以下を参照のこと。Jack Wertheimer, “Breaking the Taboo: Critics of Israel and the American Jewish Establishment,” in Gal, *Envisioning Israel*, 410–411; and Emily Nepon, “New Jewish Agenda: The History of an Organization, 1980–1992” (B.A. thesis, Goddard College, 2006). www.newjewishagenda.orgも参照。

225ページ 団体に研究会活動を行う場を与えることを拒否した

当段落で取り上げた事例は、Kaplan, “Jewish Divide on Israel”に拠る。これ以外の同様の事例としては、カリフォルニア大学サンタクルーズ校とイサカ・カレッジのヒルレル・プログラムディレクターが、占領に反対するイスラエル人およびパレスチナ人を支持する記事を発行して叱

責を受け、退職したようだ。

226ページ ZOАはまた報道発表を行い.....と発表している

以下を参照のこと。Ari Paul, “Zionist vs. Zionist,” *American Prospect*, January 4, 2007; Rebecca Spence, “Campus Coalition Split over Progressive Union,” *Forward*, January 19, 2007; Rebecca Spence, “Groups Flip Flop as Controversy over Liberal Zionists Continues,” *Forward*, February 2, 2007; Ben Harris, “Group That Criticized Israel to Stay in Campus Coalition Despite Protests,” *JTA.org*, January 24, 2007; “L.A. Israeli Consul General to Foreign Ministry: UPZ and Breaking the Silence Programs Harm Israel’s Image and Must Be Stopped,” Zionist Organization of America press release, January 31, 2007, www.zoa.org/2007/01/la_israeli_cons.htm.

227ページ “二国家共存”による解決策に賛成している

「現在の状況で、パレスチナ国家の樹立に賛成ですか？ 反対ですか？」という質問に、「賛成」と答えた米国系ユダヤ人は、2006年に54%、2005年は56%、2004年は57%だった。06年、05年、04年の“Annual Survey of American Jewish Opinion”はwww.ajc.org で見ることができる。

227ページ 政治的な声を牛耳ることが許された

Goldberg, *Jewish Power*, 161.

228ページ 米国のユダヤ人社会を.....放置してしまったのだ

Goldberg, *Jewish Power*, 217. 以下も参照のこと。159–162, 170–175, 216–223。Eric Alterman, “AIPAC Runs Right,” *Nation*, October 10, 2006; Goldberg, “Old Friends”; Massing, “Conservative Jewish Groups”; Rosenthal, “Long Distance Nationalism,” 217; and Mark Seal, “Sitting on the Sidelines,” *Ha’aretz*, December 24, 2004.

228ページ ホーンラインは.....懐疑的だった

とくにホーンラインは、ラマラ近郊のベテル入植地の支援金を集めるため夕食会を毎年開き、長年その司会を務めてきた。以下を参照のこと。Michael Massing, “Deal Breakers,” *American Prospect*, March 11, 2002; and Michael Massing, “The Israel Lobby,” *Nation*, June 10, 2002.

228ページ マッシングは注目している

Massing, “Deal Breakers.” J・J・ゴールドバーグも、「(トム)ダインの下で、執行委員会は3倍に膨れ上がった。かつてこの委員会はニューヨークに拠点を置くユダヤ人団体の代表が支配してきた。今や、ユダヤ人社会の指導者は少数派となり、AIPACへの寄付者が上回っている。執行委員会を拡大し、.....かつてのように、ユダヤ人社会からロビー団体を排除し、AIPACにのみ忠誠を抱くような少数の大口寄付者に完全に預けてしまった」と、同様に分析している。
Jewish Power, 201.

229ページ パレスチナ国家の承認はしていない

Michael Massing, “The Storm over the Israel Lobby,” *New York Review of Books*, June 8, 2006; and Matthew Dorf, “After Barak Win, AIPAC Reverses Opposition to a Palestinian State,” *JTA.org*, May 28, 1999.

229ページ ラビン政権もこの法案には反対だった

この事例は、Goldberg, *Jewish Power*, 54–57に詳述されている。

229ページ またAIPACは.....米国に要求するものだった

Massing, “Deal Breakers”; and Levy, “Is It Good for the Jews?”

229ページ 彼の見解がタカ派でなかったからだろう

Peter Beinart and Hanna Rosin, “AIPAC Unpacked,” *New Republic*, September 20, 1993, 20–23; and Goldberg, *Jewish Power*, 225–226.

230ページ 多くの米国ユダヤ人団体は.....必要となっているのはイスラエルである

Waxman, “All in the Family,” 143–144.

230ページ (ウーチャーの発言)

Jonathan Woocher, “The Geo-Politics of the American Jewish Community,” *Jerusalem Letter/ Viewpoints* (online), Jerusalem Center for Public Affairs, January 15, 1992, 3.

230～231ページ (フリードマンの発言)

Thomas L. Friedman, “Foreign Affairs: Mischief Makers,” *New York Times*, April 5, 1995.

231ページ 米国のユダヤ人社会を代表する声と受け取られている

マッシングが指摘するように、“イスラエル政策フォーラム”は、「影響力のある多数の議員と緊密な関係を築いてきたが、正会員ではなく、強力な資金調達組織もないため、AIPACやCPMAJOが持つ影響力に太刀打ちできない」。 Massing, “Deal Breakers.”

232ページ 新保守主義は...見解だけが問題となる

ネオ・コンサーヴァティヴに関する優れた研究としては、以下がある。Gary Dorrien, *The Neoconservative Mind: Politics, Culture, and the War of Ideology* (Philadelphia: Temple University Press, 1993); Gary Dorrien, *Imperial Designs: Neoconservatism and the New Pax Americana* (New York: Routledge, 2004); John Ehrman, *The Rise of Neoconservatism: Intellectuals and Foreign Affairs, 1945–1994* (New Haven: Yale University Press, 2005); Murray Friedman, *The Neoconservative Revolution: Jewish Intellectuals and the Shaping of Public Policy* (New York: Cambridge University Press, 2005); Francis Fukuyama, *America at the Crossroads: Democracy, Power, and the Neoconservative Legacy* (New Haven: Yale University Press, 2006) [邦訳：フクヤマ『アメリカの終わり』会田弘継訳、講談社、2006年]; Mark Gerson, *The Neoconservative Vision: From the Cold Wars to the Culture Wars* (Lanham, MD: Madison Books, 1996); Goldberg, *Jewish Power*, 159–161; Stefan Halper and Jonathan Clarke, *America Alone: The Neoconservatives and the Global*

Order (New York: Cambridge University Press, 2004); and Irving Kristol, *Neoconservatism: The Autobiography of an Idea* (New York: Free Press, 1995).

232ページ 彼らはまた……使われるべきだと考える

米国外交方針に関するネオ・コンサーヴァティヴの全般的な見解としては、John J. Mearsheimer, “Hans Morgenthau and the Iraq War: Realism Versus Neo-Conservatism,” posted May 19, 2005, opendemocracy.comを参照のこと。外交政策に関するネオ・コンサーヴァティヴの事例集としては、*Present Dangers: Crisis and Opportunity in American Foreign and Defense Policy*, ed. William Kristol and Robert Kagan (San Francisco: Encounter Books, 2000)がある。また、ネオ・コンサーヴァティヴとその外交政策に対する見解を鋭く描いたものとしては、Ian Lustick, *Trapped in the War on Terror* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2006), chap. 4がある。

232ページ “米国の力による平和”にただ乗りしている

多国間強調主義と諸機関に関するネオ・コンサーヴァティヴの典型的な発言としては、Charles Krauthammer, “Democratic Realism: An American Foreign Policy for a Unipolar World,” 2004 Irving Kristol Lecture, American Enterprise Institute, Washington, DC, February 10, 2004, 3を参照のこと。ヨーロッパに対するネオ・コンサーヴァティヴ的な見解は、Robert Kagan, *Of Paradise and Power: America and Europe in the New World Order* (New York: Knopf, 2003) [邦訳：ケーガン『ネオコンの論理 アメリカ新保守主義の世界戦略』山岡洋一訳、光文社、2003年]が例証している。

232ページ 米国の“鞍替え”しようとするだろう

便乗に関する議論としては、Stephen M. Walt, *The Origins of Alliances* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1987)を参照のこと。

234ページ イスラエルを支援することは“新保守主義”の最重要教義

Max Boot, “What the Heck Is a ‘Neocon?’” *Wall Street Journal*, December 30, 2002; Max Boot, “Think Again: Neocons,” *Foreign Policy* 140 (January–February 2004), 22. 以下も参照のこと。Don Atapattu, “Interview with Middle East Scholar Avi Shlaim,” *Nation*, June 16, 2004; Halper and Clarke, *America Alone*, 41, 58–60, 82, 167–168; Irving Kristol, “The Political Dilemma of American Jews,” *Commentary*, July 1984, 23–29; and Jim Lobe, “Energized Neocons Say Israel’s Fight Is Washington’s,” *Antiwar.com*, July 18, 2006.

234ページ (ギンスバーグの記述)

Benjamin Ginsberg, *The Fatal Embrace: Jews and the State* (Chicago: University of Chicago Press, 1993), 231.

235ページ (“クリーン・ブレイク”の提唱)

“A Clean Break: A New Strategy for Securing the Realm,” prepared by the Institute for Advanced Strategic and Political Studies, 1996, www.iasps.org/strat1.htm. この報告書を作成した研究会の代表はリチャード・パールが務めていた。その他のメンバーとしては、ジェイム

ズ・コルバート、チャールズ・フェアバンクス・ジュニア、ダグラス・ファイス、ロバート・ローウェンバーグ、ジョナサン・トロプ、デイヴィッド・ワムサー、メイラフ・ワムサーがいる。

237ページ もちろん、ネオコンは……断言している

Dorrien, *Neoconservative Mind*, 344に引用されている。以下も参照のこと。同文献 343–345; Ginsberg, *Fatal Embrace*, 231–236; John B. Judis, “The Conservative Wars,” *New Republic*, August 11 and 18, 1986.

237ページ 緊張関係はいまだに続いている

Patrick J. Buchanan, “Whose War?” *American Conservative*, March 24, 2003; Paul Craig Roberts, “Neocon Treason,” *Antiwar.com*, August 24, 2004.

237ページ 新保守主義を“ユダヤ系米国人の保守主義”と記述

Friedman, *Neoconservative Revolution*, i. ガル・ベッカーマンは、「ネオ・コンサーヴァティヴのユダヤ的部分を意識すると、常に反ユダヤ主義という赤い光が点滅してしまう……しかし、その疑惑もわからなくはない。米国には知性運動があり、それが発明したものであるとユダヤ人が唯一主張できるとすれば、それはネオ・コンサーヴァティヴだ」と記している。Gal Beckerman, “The Neoconservative Persuasion,” *Forward*, January 6, 2006.

238ページ 一連の組織を形成した

以下を参照のこと。Max Blumenthal, “Born-Again for Sharon,” *Salon.com*, October 30, 2004; Darrell L. Bock, “Some Christians See a ‘Road Map’ to End Times,” *Los Angeles Times*, June 18, 2003; Nathan Guttman, “Wiping Out Terror, Bringing On Redemption,” *Ha’aretz*, April 29, 2002; Tom Hamburger and Jim VandeHei, “Chosen People: How Israel Became a Favorite Cause of Christian Right,” *Wall Street Journal*, May 23, 2002; and Paul Nussbaum, “Israel Finds an Ally in American Evangelicals,” *Philadelphia Inquirer* (online), November 13, 2005.

239ページ 何人かの重要な英国の政治家に影響を与えた

キリスト教思想がいかにバルフォア宣言に影響を及ぼしたかについては、Anderson, *Biblical Interpretation*, 60–62を参照のこと。この思想が、ウィルソンのバルフォア宣言承認、トルーマンのイスラエル建国支持に影響を及ぼしたとする説もある。しかし、どちらも天啓史観派ではなかった。同書 87–89; and Grose, *Israel in the Mind of America*, 67–71.

239ページ 5000万部を売り上げたという

Timothy P. Weber, *On the Road to Armageddon: How Evangelicals Became Israel’s Best Friend* (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2004), 188–196.

240ページ この戦争を“神の奇跡”と見た

Weber, *On the Road to Armageddon*, 184. コリン・シンドラーは、「1970年代のキリスト教右派の拡大はイスラエル右派の拡大と平行している。どちらの現象も六日戦争に触媒されたものだ」と記している。“Likud and the Christian Dispensationalists: A Symbiotic

Relationship,” *Israel Studies* 5, no. 1 (Spring 2000): 163.

240ページ 確実にするための働きかけであった

L. ネルソン・ベルが *Christianity Today* に書いているように、「2000年以上たってはじめてユダヤ人がエルサレムを手にしたということで、神学生は感動し、聖書の正確性と正当性に対する信念を新たにした」。Weber, *On the Road to Armageddon*, 184に引用されている。

240ページ 政治的、財政的そして宗教的方法で行われた

Jane Lampman, “Mixing Prophecy and Politics,” *Christian Science Monitor*, July 7, 2004に引用されている。

241ページ キリスト教シオニストを与えて……かもしれない

Daniel Pipes, “[Christian Zionism]: Israel’s Best Weapon,” *New York Post* (online), July 15, 2003; Michael Freund, “Christian Zionists Key to Continued U.S. Support for Israel,” *Jewish Press* (online), December 27, 2006.

241ページ 多数の小規模なグループがある

ヘイギーは以下に引用されている。Bill Berkowitz, “Pastor John Hagee Spearheads Christians United for Israel,” *Media Transparency*, March 19, 2006, www.mediatransparency.org/story.php?storyID=116.

241ページ 02年にIFCJは……結成した

IFCJ website, www.ifcj.orgから引用した。

242ページ 占領地区での入植も含まれている

“The Apple of HIS Eye: Why Christians SHOULD Support Israel,” John Hagee Ministries website, <http://www.jhm.org/print-Israel.asp>; and Andrew Higgins, “A Texas Preacher Leads Campaign to Let Israel Fight,” *Wall Street Journal*, July 27, 2006.

242ページ 死海、ヨルダン川……西岸とガザも含まれている

“Zion’s Christian Soldiers,” *60 Minutes*, June 8, 2003, www.cbsnews.com/stories/2002/10/03/60minutes/printable524268/shtml.

242ページ われわれは……パレスチナ人などというものはいない

Lampman, “Mixing Prophecy and Politics”に引用されている。

242ページ もう一つ知られた例としては……基金を用意している

Weber, *On the Road to Armageddon*, 226–227; Brent Boyer, “Arvada Church Champions Israeli Cause,” *Denver Post* (online), November 22, 2002; and Danielle Haas, “U.S. Christians Find Cause to Aid Israel; Evangelicals Financing Immigrants, Settlements,” *San Francisco Chronicle* (online), July 10, 2002.

243ページ 福音派のグループは.....と書いてある

Donald Wagner, "For Zion's Sake," *Middle East Report Online* 223 (Summer 2002): 55.

243ページ (第3回キリスト教シオニスト会議の決議)

Shindler, "Likud and the Christian Dispensationalists," 175に引用されている。

243ページ (ロバートソンの発言)

"Robertson: God Punished Sharon," *Ynetnews.com*, January 6, 2006; "Robertson Suggests Stroke Is Divine Rebuke," *New York Times*, January 6, 2006; and "Robertson Apologizes to Sharon Family," *New York Times*, January 13, 2006.

244ページ 私はジュディアとサマリアを.....目にしたのはイスラエルである

Barbara Slavin, "Don't Give Up 1967 Lands, DeLay Tells Israel Lobby," *USA Today*, April 23, 2002に引用されている。

244ページ (アーメイの発言)

マッシュューズがアーメイにこれは彼の見解なのかどうか確認したところ、その答えは「そうだ」だった。その後、西岸でパレスチナ人の民族浄化を支持しているとの批判を受け、アーメイはその発言を取り消した。Matthew Engel, "Senior Republican Calls on Israel to Expel West Bank Arabs," *Guardian*, May 4, 2002; and "Richard Armeiy Supports Ethnic Cleansing of Palestinians," *Media Monitors Network*, May 2, 2002, www.mediamonitors.net/amr115.htmlを参照のこと。

244ページ (インホフの発言)

"Peace in the Middle East," floor statement of Senator Inhofe, March 4, 2002, <http://inhofe.senate.gov/pressapp/record.cfm?id=183110>.

244ページ こうして共生関係は.....両方のイデオロギーに役に立った

Shindler, "Likud and the Christian Dispensationalists," 156.

245ページ この時ベギンは.....と依頼したという

Grace Halsell, *Prophecy and Politics: Militant Evangelists on the Road to Nuclear War* (Westport, CT: Lawrence Hill, 1986), 71-76. [邦訳: ハルセル『核戦争を待望する人々 聖書根本主義派潜入記』越智道雄訳、朝日新聞社、1989年]

245ページ パット・ロバートソンと.....共同議長を務めた

"Pat Robertson Forms Alliance with Mayor of Jerusalem," *Baptist Standard* (online), November 11, 2002; and "Israel Welcomes Christian Support in Battle for Survival, Sharon Aid[e] Says," *Christian Examiner* (online), September 6, 2002.

245ページ イスラエルで最大の外国人の宗教会合

Weber, *On the Road to Armageddon*, 214-218に引用されている。

245ページ (オルメルトの演説)

Norton Mezvinsky, "The Impact of Christian Zionism on the Arab-Israeli Conflict," *NthPosition.com*, March 2005に引用されている。

246ページ (ファルウェルの警告)

Jerry Falwell, "On the Threshold of Armageddon," *WorldNetDaily.com*, July 22, 2006; and Sarah Posner, "Lobbying for Armageddon," *AlterNet.org*, August 3, 2006.

246ページ (リンゼイとハイギーについて)

Hal Lindsey, "Mushrooms over the Middle East," *WorldNetDaily.com*, January 12, 2007; and John Hagee, *Jerusalem Countdown: A Warning to the World* (Lake Mary, FL: Frontline, 2006), 17. ハイギーは分散している聖書の一節を自分なりに解釈し、それにもとづいて、イラン攻撃をきっかけにロシアがアラブ連合を率いてイスラエルに戦争をしかけてくるが、米国はこれを放置するだろう、と話す。イスラエルを侵略する者を破滅させるために神が介入するが、その結果生じた真空地帯をうめるのはキリストの敵であり、「欧州連合の長であろう」。この人物の指揮下で西洋の軍隊がイスラエルに集結し、「東の王(中国)」に対するハルマゲドンの戦闘に臨む。この時点でキリストが再び現れ、キリストの敵を打ち倒し神の王国を復活させる。ハイギーは「知っての通り、世界の終わりは急速に近づいている」と結論づける(113-122)。

246ページ ハイギーはまた.....と断言している

Christians United for Israel, "CUFI Membership Weekly Update," December 11, 2006, www.cufima.com/id10.html.

246ページ アーヴィング・クリストルから祝福さえ受けている

Shindler, "Likud and the Dispensationalists," 165-166; Kristol, "The Political Dilemma of American Jews."

246~247ページ ADLの元指導者.....常々批判している

パールマターは、Weber, *On the Road to Armageddon*, 232に引用されている。フォックスマンの発言は"Jews and Evangelicals: Support for Israel Isn't Everything," *Time*, January 16, 2007に拠る。

247ページ 米国ユダヤ人委員会.....ということだ

Bill Broadway, "The Evangelical-Israeli Connection: Scripture Inspires Many Christians to Support Zionism Politically, Financially," *Washington Post*, March 27, 2004に引用されている。

247ページ (ハイギーの発言)

ユダヤ人に対するハイギーの不穏な姿勢については*Jerusalem Countdown*, 56-57, 109を参照のこと。AIPCA方針会議に出席した際については、以下を参照。Gregory Levey, "Inside America's Powerful Israel Lobby," *Salon.com*, March 16, 2007; "Christians for Israel,"

Jerusalem Post editorial, March 14, 2007; and Sarah Posner, “The Goy Who Cried Wolf,” *American Prospect*, March 12, 2007.

247ページ ハイギーにも役割がある……支援しているのだから

James D. Besser, “Hardline Pastor Gets Prime AIPAC Spot,” *Jewish Week*, March 9, 2007 に引用されている。

247～248ページ イスラエルの要求がなければ……断っていただろう

Naomi M. Cohen, “Dual Loyalties: Zionism and Liberalism,” in Gal, *Envisioning Israel*, 326.

248ページ 穏健派ユダヤ人たちは……第四幕で消えるのだ」という

Jo-Ann Mort, “An Unholy Alliance in Support of Israel,” *Los Angeles Times*, May 19, 2002. アルファーとゴレンバーグの引用は、“Zion’s Christian Soldiers”に拠る。以下も参照のこと。Gershom Gorenberg, *The End of Days: Fundamentalism and the Struggle for the Temple Mount* (New York: Free Press, 2000); and Weber, *On the Road to Armageddon*, 231.

249ページ キリスト教徒の観光旅行は……にのぼるという

第2次インティファダおよび9・11が起きた後、観光客は減少したが、それ以降は増加している。国連統計部の推定では、2004年、イスラエルは観光によって28億ドルの収入があり、イスラエル当局によると、こうした観光客のおよそ29%がキリスト教徒だったと報告している。以下を参照のこと。United Nations, *World Tourism Organization Statistical Database and Yearbook 2005* (New York: United Nations, 2005); Eric Silver, “Return of the Tourist,” *Jerusalem Report* (online), February 21, 2005; Laurie Copans, “Israel: Tourism Surges as Christian Pilgrims Walk in the Footsteps of Jesus,” *USA Today*, December 13, 2004; and William A. Orme, “Fighting in Mideast Blocks Wave of Christian Tourism,” *New York Times*, November 11, 2000.

249ページ (アンダーソンの発言)

Anderson, *Biblical Interpretation*, 103, 138. これは、Michael B. Oren’s *Power, Faith and Fantasy: America in the Middle East 1776 to the Present* (New York: Norton, 2007) の中心テーマでもあるが、オレンは米国の方針決定に対する影響力を誇張している。

250ページ ファルウェルやその他の……見つからない

Anderson, *Biblical Interpretation*, 111, 114–115; and Ruth W. Mouly, *The Religious Right and Israel: The Politics of Armageddon* (Cambridge, MA: Political Research Associates, 1985).

250～251ページ “ホワイト・ハウスに……福音派の代表団だけだ

Zev Chafets, “The Rabbi Who Loved Evangelicals (and Vice Versa),” *New York Times Magazine*, July 24, 2005.

251ページ さらにキリスト教信仰には.....批判することを妨げるものではない

2006年8月、聖地を訪れたバチカン使節、米国聖公会主教、福音主義ルーテル教会、エルサレムのシリア正教会は、キリスト教シオニズムの教えを拒否し、「人種排除と永久戦争」を推進する運動を非難する宣言に署名した。Matthew Tostevin, “Holy Land Churches Attack Christian Zionism,” Reuters, August 31, 2006を参照。その他の主だったプロテスタント教会はイスラエルの方針に批判的で、同国で展開する企業からの「投資の選択的引き上げ」を真剣に考慮してきた。しかし、ロビー団体はこうした試みを阻止すべく懸命に動き回り、だいたいは成功している。以下参照。James D. Besser, “Church Poised to Kill Divestment,” *Jewish Week*, June 23, 2006; Alan Cooperman, “Israel Divestiture Spurs Clash,” *Washington Post*, September 29, 2004; Michael Conlon, “US Presbyterians Consider Divesting over West Bank,” *Washington Post*, February 17, 2005; Laurie Goodstein, “Presbyterians Revise Israel Investing Policy,” *New York Times*, June 22, 2006; Nathan Guttman, “A Warning Signal from the Churches,” *Ha’aretz*, November 26, 2004; Chris Moore, “Mainline Protestants Challenge Israel Lobby,” *Antiwar.com*, December 7, 2004; Marc Perelman, “Effort Eyed to Combat Divestment,” *Forward*, July 15, 2006; and Rachel Pomerance, “Episcopal View on Mideast Conflict an Improvement, Jewish Groups Say,” *JTA.org*, November 9, 2004.

251ページ キリスト教シオニストには.....メディアにおける存在感は劣る

キリスト教シオニズムが財政面で果たす役割は限定的で、レバノンで2006年に起きた戦争以後、関連団体によるイスラエル向け寄付がこれを表している。『ハアレッツ』によると、キリスト教団体はイスラエルの再興、再定住のために約2000万ドルを寄付した。一方、United Jewish Communities は3億4000万ドル以上を集めた。Daphna Berman, “Christians’ Wartime Donations of \$20m Went Largely Unheralded,” *Ha’aretz*, November 3, 2006を参照。

252ページ 公共政策に影響を及ぼす方法に不足はない

米国政治におけるロビー団体の役割については、以下を参照のこと。Frank R. Baumgartner and Beth L. Leech, *Basic Interests: The Importance of Groups in Politics and in Political Science* (Princeton: Princeton University Press, 1998); Richard L. Hall and Frank W. Wayman, “Buying Time: Moneyed Interests and the Mobilization of Bias in Congressional Committees,” *American Political Science Review* 84, no. 3 (September 1990); John Mark Hansen, *Gaining Access: Congress and the Farm Lobby, 1919–1981* (Chicago: University of Chicago Press, 1991); Ken Kollman, *Outside Lobbying: Public Opinion and Interest Group Strategies* (Princeton: Princeton University Press, 1998); Richard A. Smith, “Interest Group Influence in the U.S. Congress,” *Legislative Studies Quarterly* 20, no. 1 (February, 1995); David B. Truman, *The Governmental Process: Political Interests and Public Opinion* (New York: Knopf, 1951); and James Q. Wilson, *Political Organizations* (New York: Basic Books, 1973).

253ページ サインをしないことの.....何人かのユダヤ人を傷つけるかもしれない

Mary A. Barberis, “The Arab-Israeli Battle on Capitol Hill,” *Virginia Quarterly Review* 52, no. 2 (Spring 1976):209に引用されている。

254ページ 主要なユダヤ人グループの.....立ち上げることができる

Trice, "Domestic Interest Groups," 125-126.

254ページ ニューハンプシャー州の.....とコメントしている

Ben Bradlee Jr., "Israel's Lobby," *Boston Globe*, April 29, 1984に引用されている。

254ページ この好ましいイメージは.....認識によるものばかりではないのだ

Shai Feldman, *The Future of U.S.-Israeli Strategic Cooperation* (Washington, DC: Washington Institute for Near East Policy, 1996), 5-6.

254ページ 対抗意見は存在しない.....とは言ってくれない

Grove, "On the March for Israel." に引用されている。

255ページ (バードとトルーマンの発言)

バードとトルーマンは、Mitchell Bard, "The Israeli and Arab Lobbies,"

www.jewishvirtuallibrary.orgから引用した。以下も参照のこと。Mark N. Katz, "Where Is the Arab Lobby?" *Middle East Times* (online), July 3, 2006; Noam N. Levey, "In Politicians' Pro Israel Din, Arab Americans Go Unheard," *Los Angeles Times*, July 23, 2006; Ali A. Mazrui, "Between the Crescent and the Star-Spangled Banner: American Muslims and U.S. Foreign Policy," *International Affairs* 72, no. 3 (July 1996); Nabeel A. Khoury, "The Arab Lobby: Problems and Prospects," *Middle East Journal* 41, no. 3 (Summer 1987); and Andrea Barron, "Jewish and Arab Diasporas in the United States and Their Impact on U.S. Middle East Policy," in *The Arab-Israeli Conflict: Two Decades of Change*, ed. Yehuda Lukacs and Abdalla M. Battah (Boulder, CO: Westview, 1988), 238-259. とくに「パレスチナ・ロビー」の脆弱さについては以下の記事で取り上げられている。Nora Boustany, "Palestinians' Lone Hand in Washington," *Washington Post*, April, 19, 2002; and George Gedda, "PLO Loses D.C. Office Because of Unpaid Rent," *Chicago Tribune*, April 12, 2002.

256ページ 彼らの与える影響は.....依然として無視できる

Trice, "Domestic Interest Groups," 123.

256ページ この考えが反映されている

典型的な例としては、Harold Siddiqui, "Oil Lobby Determined to Have Its War' in Iraq," *Toronto Star* (online), January 19, 2003, www.commondreams.orgを参照のこと。

256～257ページ イスラエルの最も根強い.....よっても出されている

Stephen Zunes, "The Israel Lobby: How Powerful Is It Really?" *Foreign Policy in Focus Special Report*, May 16, 2006; Noam Chomsky, "The Israel Lobby," *Znet* (online), March 28, 2006; and Martin Peretz, "Oil and Vinegar," *New Republic*, March 30, 2006.

257ページ ブッシュ家とサウド家の.....方向に向けている

とくに以下参照。Craig Unger, *House of Bush, House of Saud: The Secret Relationship Between the World's Two Most Powerful Dynasties* (New York: Scribner, 2004). [邦訳：アングラー 『ブッシュの野望サウジの陰謀 石油・権力・テロリズム』秋岡史訳、柏書房、2004年] このテーマは、ドキュメンタリー映画話題作『華氏911』(監督マイケル・ムーア)の重要な部分でもある。

257ページ 米国経済に害を与えることになる

2006年に米国が輸入した原油の約40%は、カナダ、メキシコ、ベネズエラからだった。サウジアラビアは14%を供給したにすぎない。U.S. Department of Energy, *Petroleum Supply Monthly* (Washington, DC, February 2007), 58.

259ページ 武器関連法案の撤回を強いられた

Bernard Gwertzman, "U.S. Said to Drop Jordan Arms Sale," *New York Times*, March 21, 1984.

259ページ 彼らは自分たちの.....米国の地に根ざしていない

Congressional Quarterly, *The Middle East*, 68に引用されている。

260ページ 彼らの第一の目標は.....ずっと狭いものだ

Trice, "Domestic Interest Groups," 137-138.

261ページ この狭い範囲に焦点を.....そして中心にすえられている

www.api.org/policyを参照のこと。エクソン・モービルとプリティッシュ石油のどちらのウェブサイトに、外交政策に関する議論はほとんど言及されていない。

261ページ (アミタイの記述)

Tivnan, *The Lobby*, 194に引用されている。

261~262ページ なぜ米国企業は.....存在である

Trice, "Domestic Interest Groups," 137; and William B. Quandt, "United States Policy in the Middle East: Constraints and Choices," in *Political Dynamics in the Middle East*, ed. Paul Hammond and Sidney Alexander (New York: Elsevier, 1972), 529-530.

262ページ 評論家の中には.....考える者もいる

Danny Fortson, Andrew Murray-Watson, and Tim Webb, "Future of Iraq: The Spoils of War," *Independent*, January 7, 2007.

262ページ チェイニーは.....不平をこぼしている

"Cheney Pushed for More Trade with Iran," *FOXnews.com*, October 9, 2004, www.foxnews.com/story/0,2933,134836,00.html.

263ページ イスラエル・ロビー と同等な影響力を持っていない

Trice, "Domestic Interest Groups," 137-138.

263ページ あるいは.....語っているとおりである

これらは、Roger Hilsman, *The Politics of Policy Making in Defense and Foreign Affairs* (New York: Harper, 1971), 149; Bard, "Israeli and Arab Lobbies"; and "Pro-Israel Lobby on Capitol Hill," *BBC Newsnight* (online), May 8, 2003,

<http://news.bbc.co.uk/1/hi/programmes/newsnight/3010371.stm>から引用した。

264ページ イスラエルの政治学者.....と記している

シェファーによると、「リベラル民主主義体制、よく知られているところでは米国、カナダ、オーストラリア、デンマーク、オランダ、ノルウェーだが、こうした国のユダヤ人はパレスチナのユダヤ人社会や、後にはイスラエルとの間で、オープンで強い結びつきを維持することができていた。.....こうしたコミュニティのある一部は.....受け入れ国の社会と政府に対して完全に忠実だった。シオニスト運動やパレスチナのユダヤ人社会（イシュヴ）後のイスラエルにおけるユダヤ人社会の支援者であると公然と見なされた人々は、二重の忠誠心を抱くようになった。最も確信的なシオニストやその他のイスラエル支援者は分割された忠誠心を抱いていた。つまり、ある点では受け入れ国に忠誠心を抱き、その他の点では故国に忠誠だった。」 *Diaspora Politics: At Home Abroad* (New York: Cambridge University Press, 2003), 232-233.

265ページ ユダヤ系米国人は.....差しつかえない

Malcolm Hoenlein, "Crossing the Line of the Acceptable," *Ha'aretz*, December 31, 2004.

265ページ （キリスト教徒国際調査）

Pew Global Attitudes Project, "Muslims in Europe: Economic Worries Top Concerns About Religious and Cultural Identity," (Washington, DC: Pew Research Center for the People and the Press, July 6, 2006), 3.

266ページ 私はこの仕事に就きました.....なぜなら私はユダヤ人だからです

David K. Shipler, "On Middle East Policy, a Major Influence," *New York Times*, July 6, 1987に引用されている。

266ページ ユダヤ系米国人の指導者.....非常に深く感じているのです

Kurt Eichenwald, "U.S. Jews Split on Washington's Shift on Palestinian State," *New York Times*, October 5, 2001に引用されている。

266ページ 利害の違いが見て取れる

David S. Cloud and Helene Cooper, "Israel's Protests Are Said to Stall Gulf Arms Sale," *New York Times*, April 5, 2007.

267ページ ヘンリー・キッシンジャーが.....苦痛であるとも感じた

Henry Kissinger, *Years of Upheaval* (Boston: Little, Brown, 1982), 203. [邦訳：キッシンジ

ヤー『キッシンジャー激動の時代』]

267～268ページ ビル・クリントンの……かもしれないのですから
どちらも、Goldberg, *Jewish Power*, 232, 235から引用した。

268ページ 私たちは、米国と……孤独を感じることがある
Eric Alterman, “Can We Talk?” *Nation*, April 21, 2003.

269ページ (スタインライトの発言)

Stephen Steinlight, “The Jewish Stake in America’s Changing Demography: Reconsidering a Misguided Immigration Policy,” backgrounder, Center for Immigration Studies, Washington, DC, October 2001, 10–11. これ以前にこの見解を同様に明かしているものとして、Nathan Glazer, “McGovern and the Jews: A Debate,” *Commentary*, September 1972, 44がある。

269ページ “るつぼ” 社会の避け難い特徴だ

Samuel P. Huntington, *Who Are We? The Challenges to American National Identity* (New York: Simon & Schuster, 2004), 276–291. [邦訳：ハンチントン『分断されるアメリカ』鈴木主税訳、小学館、2004年]

270ページ 私はイスラエルの安全保障のために専念している
Massing, “Deal Breakers”に引用されている。

270ページ なぜCUFIのヘイギーは……表明するのだろうか

Hagee, “The Apple of HIS Eye”; and Wagner, “For Zion’s Sake,” 56. また、Lee Underwood, “Israel’s Right to the Land,” January 4, 2004, <http://christianactionforisrael.org/right.html>も参照。

270ページ 務めることに同意したのだろうか

Lenny Ben-Davidについては、www.israelunitycoalition.org/に拠る。

第五章 政策形成を誘導する

273ページ 政策を進んで実行するようにさせること

20年前、国務省のある高官は、ロビー団体は「考慮すべき論点を歪める傾向がある……国民はいくつかの選択肢を真剣に検討しない」と、『ニューヨーク・タイムズ』紙のデイヴィッド・シプラーに語った。レーガン政権時代の別の政府高官は、AIPACは「一因」ではあるが、彼自身は「少なくとも分析段階で、それが決定打となった事例を知らない」と発言した。しかしシプラー

ーの言葉を借りれば、この高官も、「政治的、政策決定の段階により大きな影響があったようだ」と認めていた。David K. Shipler, “On Middle East Policy, a Major Influence,” *New York Times*, July 6, 1987.

274ページ ローゼンバーグの発言

M. J. Rosenberg, “Kangaroo Congressional Hearing,” Weekly Opinion Column, Issue 311, Israel Policy Forum, Washington, DC, February 16, 2007. 以下も参照のこと。Michael F. Brown, “Dems’ Disdain for Palestine,” *TomPaine.com*, February 20, 2007; and Daniel Levy, “Yikes—Warmonger Daniel Pipes Testifying to Congress—Do They Learn Nothing?” February 12, 2007, www.tpmcafe.com.

274～275ページ（アーメイ、ディレイの発言）

アーメイについてはジェイク・タッパーが“Questions for Dick Arme: Retiring, Not Shy,” *New York Times Magazine*, September 1, 2002に、クラインについてはロン・キャンピアスが“On Somber Day, DeLay’s Spirits Raised by Pro-Israeli Group’s Support,” *JTA.org*, October 2, 2005に、ディレイについてはジェイムズ・ベネットが“DeLay Says Palestinians Bear Burden for Achieving Peace,” *New York Times*, July 30, 2003に引用している。

275ページ 公職に就き、政治活動に参加している

2006年の議会選挙後、上院議員100人のうちの13人、下院議員435人のうちの30人がユダヤ人だった。これは米国の人口に占めるユダヤ人の割合が3%以下であることと比較するとかなり大きな率だ。Amiram Barkat, “Number of Jewish Parliamentarians Worldwide Reaches Record High,” *Ha’aretz*, November 9, 2006.

276ページ そういったユダヤ系……などだ

Joseph Lieberman, “Speech to the AIPAC National Policy Conference,” March 2007, <http://lieberman.senate.gov/newsroom/release.cfm?id=270526>; Charles Schumer, “The Peace Process Has Been One-Sided” (interview), *Middle East Quarterly* 7, no. 4 (December 2000); Henry Waxman, “Israel Fights for Survival,” *Beverly Hills Weekly* (online), April 19, 2002; and Robert Wexler, “Israel and the Middle East,” <http://wexler.house.gov/issues.php?ID=19>.

275ページ（ワックスマンの発言）

Matthew E. Berger, “US Vote May Alter Stance on Middle East,” *Jerusalem Post*, November 7, 2006に引用されている。

275～276ページ 下院外交問題委員会……と語っている

Janine Zacharia, “Lantos’s List,” *Jerusalem Post*, April 13, 2001に引用されている。以下も参照のこと。Jeffrey Blankfort, “A Tale of Two Members of Congress and the Capitol Hill Police,” *CounterPunch.org*, April 17, 2006; and Mark Simon, “Middle East Hits Home in House Race,” *San Francisco Chronicle* (online), May 16, 2002.

276ページ 議会で働く……たくさんあるのだ

Mitchell Bard, "Israeli Lobby Power," *Midstream* 33, no. 1 (January 1987): 8に引用されている。

276ページ この事実は民主、共和両党の政治家も広く認めている

ここでの議論を補完するAIPACの組織と活動についてさらに分析したものとして、Michael Massing, "The Storm over the Israel Lobby," *New York Review of Books*, June 8, 2006を参照のこと。以下も参照のこと。Paul Findley, *They Dare to Speak Out: People and Institutions Confront Israel's Lobby*, 3rd ed. (Chicago: Lawrence Hill, 2003); and Michael Lind, "The Israel Lobby," *Prospect* 73 (April 2002).

277ページ (『ニューヨーク・タイムズ』紙の評価)

クリントン、ギングリッチ、レイド、*New York Times*の引用は、2005年1月14日にAIPACのウェブサイトwww.aipac.org/documents/whoweare.html#sayから得たもの。*New York Times*の引用は、2007年5月時点でまだサイト上にあった。それ以外は削除されていた。Jeffrey Goldberg, "Real Insiders," *New Yorker*, July 4, 2005。ギングリッチの発言は、Michael Kinsley, "J'accuse, Sort of," *Slate.com*, March 12, 2003でも引用されている。

277～278ページ (マッシングの発言)

Michael Massing, "Deal Breakers," *American Prospect*, March 11, 2002; and Massing, "Storm over the Israel Lobby."

278ページ 2000年以降……政治活動委員会に献金している

同じ記事で、AIPAC執行委員の5人に1人が、2004年大統領選の候補者ジョン・ケリーとジョージ・W・ブッシュの優秀な資金調達者だったとしている。Thomas B. Edsall and Molly Moore, "Pro-Israel Lobby Has Strong Voice," *Washington Post*, September 5, 2004.

278ページ (バイエルの発言)

David Biale, *Power and Powerlessness in Jewish History* (New York: Schocken Books, 1986), 186–187.

278～279ページ (フリードマンの発言)

フリードマンの発言は、2006年のレバノン戦争中、米国のイスラエル支援を継続させるためにAIPACが尽力したことを感謝するメンバー宛ての礼状に書かれていた。John Walsh, "AIPAC Congratulates Itself on the Slaughter in Lebanon," *CounterPunch.org*, August 16, 2006に引用されている。この方針は、しばらくの間、標準的な執行手順となっていた。1987年、AIPAC会長トム・ダインは支持者に対し、「1985年から86年の選挙運動でAIPACはリーダーや職員に、1人を除いた改選議員全員、さらに上院立候補者49人と下院立候補者205人と面会させた」と話した。Robert Pear and Richard L. Berke, "Pro-Israel Group Exerts Quiet Might as It Rallies Supporters in Congress," *New York Times*, July 7, 1987.

279ページ ハイドンは州レベルの……役割を果たした

1982年のイスラエルによるレバノン侵攻を擁護しようとしたことについて、ヘイドンは「政治家として不覚だった」と話している。Tom Hayden, “Things Come 'Round in Mideast,” *truthdig.com*, July 18, 2006.

280ページ (ロンズデールの記述)

2006年5月16日付のハリー・ロンズデールと著者との個人的なやりとり。ロンズデールは、「それでも、選挙資金はハットフィールド上院議員のほうが多くて、私は選挙に負けてしまった」とも書いている。AIPACがすべての選挙に勝ったわけではないということが明らかだ。

280～281ページ AIPACはエヴァンス氏に.....選挙資金を受け取った

エヴァンスについては、John J. Fialka, “Linked Donations? Political Contributions from Pro-Israel PACs Suggest Coordination,” *Wall Street Journal*, June 24, 1987から引用した。

281ページ 支援するかを決定する

Goldberg, “Real Insiders.”

281ページ AIPACは彼ら自身が.....わかりにくいものとなっている

Charles R. Babcock, “Papers Link Pro-Israel Lobby to Political Funding Efforts,” *Washington Post*, November 14, 1988; and Fialka, “Political Contributions from Pro-Israel PACs.”

281ページ 確信は人々の間に広がり続けている

連邦選挙委員会の規則については、以下を参照のこと。John J. Fialka, “Pro-Israel Lobbying Group Is Accused of Breaking U.S. Campaign-Funds Law,” *Wall Street Journal*, January 13, 1989; and Charles R. Babcock, “FEC Rules Pro-Israel Lobby, PACs Are Not ‘Affiliated,’” *Washington Post*, December 22, 1990.

282ページ ある時.....そういうことだ、と答えた

David D. Newsom, *The Public Dimension of Foreign Policy* (Bloomington: Indiana University Press, 1996), 187.

282ページ 300万ドル(3億6000万円)もの選挙資金を提供していた

“Pro-Israel Contributions to Federal Candidates, 2005–2006,”
www.opensecrets.org/pacs/industry.asp?txt=Q05&cycle=20006.

282ページ 90年から.....しか寄付しなかった

Lexington, “Taming Leviathan,” *Economist*, March 15, 2007. 以下も参照のこと。Kelley Beaucar Vlahos, “Pro-Israel Lobby a Force to Be Reckoned With,” *FOXnews.com*, May 28, 2002; Massing, “Deal Breakers”; and Massing, “Storm over the Israel Lobby.”

282ページ もしあなたが.....政治資金が集まるのだ

Vlahos, “Pro-Israel Lobby”から引用した。

282～283ページ こうした様々な作戦の効果は.....チャッフィは選挙に敗れたのだ
この数字はPACからの献金のみを含んでおり、個人献金は含んでいない。“責任政治センター”(Center for Responsive Politics)のウェブサイトwww.opensecrets.orgから算出したもの。

283ページ 候補者たちに渡った.....強いつながりを持っている
Ron Kampeas, “Pro-Israel Political Funds in U.S. Target Friendly Incumbents-and Challengers,” *JTA.org*, October 3, 2006.

283ページ 落選させることはできなかった
Janet McMahon, “Record Pro-Israel PAC Contributions Failed to Save Senate Minority Leader Tom Daschle’s Seat,” *Washington Report on Middle East Affairs* (online), July 2005.

284ページ 7つの親イスラエル派のPACから受け取っていた
Jonathan Allen, “McKinney Opponent Rakes in Pro-Israel Cash,” *The Hill*, August 2, 2006, www.hillnews.com. “責任政治センター”によると、マッキンニーは予備選挙でおよそ36万5000ドルを使ったが、勝利したハンク・ジョンソンは予備選挙と総選挙あわせて80万ドル使った。以下も参照のこと。David Firestone, “A Nation Challenged: The Lawmaker; Call to Study U.S. Stance on Mideast Draws Anger,” *New York Times*, October 18, 2001; Nathan Guttman, “Lobbying for the Pro-Israel Candidates,” *Ha’aretz*, July 7, 2004; “Mideast Fuels 2 Democratic Primaries,” *Washington Post*, June 6, 2002; and Jonathan Weisman, “House Incumbents McKinney, Schwarz Fall in Primaries,” *Washington Post*, August 9, 2006.

284ページ (アッシャーの発言)
Goldberg, “Real Insiders.”

284～285ページ アッシャーは多くの.....献金を受けることができなかった
John J. Fialka, “Pro-Israel Politics: Jewish Groups Increase Campaign Donations, Target Them Precisely,” *Wall Street Journal*, August 3, 1983; and Richard H Curtiss, *Stealth PACs: How Israel’s American Lobby Seeks to Control U.S. Middle East Policy*, 4th ed. (Washington, DC: American Educational Trust, 1996), 47.

285ページ アッシャーはミッチェルに対して.....感じているというものだった
Goldberg, “Real Insiders.” 以下も参照のこと。David M. Halbfinger, “Generational Battle Turns Nasty in Alabama Primary,” *New York Times*, June 3, 2002; Tom Hamburger, “Mideast Haunts Alabama Race,” *Wall Street Journal*, May 31, 2002; “Money from Supporters of Israel Played Role in Alabama Upset,” *New York Times*, June 27, 2002; Juliet Eilperin, “Davis Ousts Rep. Hilliard in Alabama Runoff,” *Washington Post*, June 26, 2002; and Benjamin Soskis, “Pro- Israel Lobby Backing Challenger in Alabama Race,” *Forward*, May 10, 2002.

286ページ ジェブソンの辿った道を見て.....大きな恐怖心が植えつけられたのだ

Edward Walsh, “Jewish PACs Flex Muscle: On Hill, Being Viewed as Anti-Israel Can Be Risky,” *Washington Post*, May 10, 1986; and Curtiss, *Stealth PACs*, 65–66に引用されている。これらの事例のさらなる詳細は、Findley, *They Dare to Speak Out*, chap. 3を参照のこと。

287ページ イスラエル・ロビー は.....選挙の趨勢を決定したのである

Adlai Stevenson III, “The Black Book,” unpublished book manuscript, undated; and personal correspondence with authors, March 22, 2007.

287ページ 不正献金で有罪判決を受けている

“Californian Spent \$1.1 million on Illinois Race,” *New York Times*, October 10, 1985; Richard L. Berke, “Cranston Backer Guilty in Campaign Finance Case,” *New York Times*, May 8, 1990; Tom Tugend, “Israel Financial Backer Convicted on U.S. Election Law Charges,” *Jerusalem Post*, May 7, 1990.

287ページ アメリカ中のユダヤ人が.....教訓を学んだに違いない

Edward Tivnan, *The Lobby: Jewish Political Power and American Foreign Policy* (New York: Simon & Schuster, 1987), 191に引用されている。当該段落で取り上げた詳細については、同文献189–191から引用した。また、Charles R. Babcock, “Pro-Israel Political Activists Enforce ‘Percy Factor,’” *Washington Post*, August 7, 1986も参照のこと。

288ページ 議会における親イスラエル.....やられてしまうというものだ

John Diamond and Brianna B. Picc, “Pro-Israel Groups Intensify Political Front in U.S.,” *Chicago Tribune*, April 16, 2002に引用されている。

288ページ 彼が02年に引退するまで変わらなかった

Lucille Barnes, “Retiring Sen. Jesse Helms Caved to Pro-Israel Lobby Halfway Through His Career,” *Washington Report on Middle East Affairs*, March 2002, 34; and Tom Hamburger and Jim VandeHei, “Chosen People: How Israel Became a Favorite Cause of Christian Right,” *Wall Street Journal*, May 23, 2002.

289ページ クリントン上院議員の.....忘れることができないのです

フリードマンについては、Patrick Healy, “Clinton Vows to Back Israel in Latest Mideast Conflict,” *New York Times*, July 18, 2006に引用されている。以下も参照のこと。Adam Dickter, “Hillary: ‘I Had a Lot to Prove,’” *Jewish Week*, November 18, 2005; Joshua Frank, “Hillary Clinton and the Israel Lobby,” *Antiwar.com*, January 23, 2007; Rachel Z. Friedman, “Senator Israel,” *National Review Online*, May 25, 2005; Ron Kampeas, “Candidates for 2008 Courting Jewish Support,” *Jerusalem Post*, January 24, 2007; E. J. Kessler, “Hillary the Favorite in Race for Jewish Donations,” *Forward*, January 26, 2007; and Kristen Lombardi, “Hillary Calls Israel a ‘Beacon’ of Democracy,” *Village Voice* (online), December 11, 2005.

289ページ クリントン上院議員に渡ると予想されている

Kessler, “Hillary the Favorite in Race for Jewish Donations.” 選挙活動の財政データは、“責任政治センター”のウェブサイトwww.opensecrets.orgを参照のこと。

289ページ AIPACはそのような政治家を脅迫する

2002年のニューハンプシャー上院議員選挙でジョン・スヌヌに対して行ったように、AIPACやその他の親イスラエル派は潜在的な政敵を黙らせようと働きかけることがある。スヌヌには2つの障害があった。彼がパレスチナ人であり、レバノン系であること。ロビー団体の中の複数のグループは、彼の投票履歴はとてすばらしいと言えるものではないと考えた。National Jewish Democratic Councilはプレスリリースを発表し、スヌヌのイスラエル関連議題についての記録は「率直に言って、際立っている」とし、AIPACは彼を第一の標的とした。つまり、スヌヌの対抗馬の応援にピンヤミン・ネタニヤフ前イスラエル首相を派遣したのである。Republican Jewish Coalition事務局長によると、スヌヌは、イスラエルの軍事優位性の維持に注力することを強調した「心強い政策方針書」で応戦したという。選挙に勝利すると、スヌヌは、2006年夏にイスラエルがレバノンに爆撃作戦をしかけたことに対して、控えめに批判しただけだった。以下を参照のこと。National Jewish Democratic Council, “John Sununu: A Singular Voting Record,” press release, October 28, 2002; and Matthew E. Berger, “New Republican Congress Retains Pro-Israel Bent,” *JTA.org*, November 8, 2002. さらに詳しい背景情報としては、以下を参照のこと。Franklin Foer, “Foreign Aid: A Middle East Proxy War in New Hampshire,” *New Republic*, November 26, 2001; Ralph Z. Hallow, “Pro-Israel Lobby Looks for Deal with Sununu,” *Washington Times*, September 4, 2002; and Ori Nir, “Despite Hype, Israel Lobby Sits Out Tight New Hampshire Race,” *Forward*, November 8, 2002.

289～290ページ マッカラム下院議員は……関係者が近づくことを禁止した

“A Letter to AIPAC,” *New York Review of Books*, June 8, 2006.

290ページ AIPACは国中でやりたいことができるのだ

George D. Moffett III, “Israeli Lobby Virtually Unmatched,” *Christian Science Monitor*, June 28, 1991に引用されている。

291ページ 再選戦を目指す議員にとっては政治的に自殺すること

アミタイは、Berger, “New Republican Congress”; Carter is quoted in Yitzhak Benhorin, “Balanced Stand on ME Is Political Suicide, Says Carter,” *Ynetnews.com*, February 26, 2007に引用されている。

292ページ 様々な仕事を議員のために行う

Richard L. Hall and Alan V. Deardorff, “Lobbying as Legislative Subsidy,” *American Political Science Review* 100, no. 1 (February 2006).

292ページ AIPACは常に……投票の誘導などである

Camille Mansour, *Beyond Alliance: Israel in U.S. Foreign Policy*, trans. James A. Cohen

(New York: Columbia University Press, 1994), 242に引用されている。

293ページ AIPACと議員とのつながりを……倫理規則の対象外とされた

Jonathan Weisman and Jeffrey H. Birnbaum, “Senate Passes Ethics Package,” *Washington Post*, January 19, 2007; Nathan Guttman, “Jewish Groups to Challenge Ethics Reform,” *Forward*, December 1, 2006; Jim Abourezk, “The Hidden Cost of Free Congressional Trips to Israel,” *Christian Science Monitor*, January 26, 2007; また、腐敗行為調査センター（Center for Public Integrity）, www.publicintegrity.orgのAIEFの項目を参照のこと。

293ページ 重要なことは……電話をかけることだ

Stephen Isaacs, *Jews and American Politics* (New York: Doubleday, 1974), 255–257.

294ページ 圧力は大変なものだった。私は彼らの軍門に下った

Seth P. Tillman, *The United States in the Middle East: Interests and Obstacles* (Bloomington: Indiana University Press, 1982), 67に引用されている。

295ページ ライスは中東訪問に……和平合意を遵守することだった

ライスへの書簡は、

www.aipac.org/Publications/SourceMaterialsCongressionalAction/Nelson-Ensign_Letter_FI_NAL.pdfから引用した。以下も参照のこと。Nathan Guttman, “AIPAC Urges U.S. to End Contacts with Palestinian Authority,” *Forward*, March 14, 2007.

295ページ ダインさん、私は……痛めつけますからね

Lloyd Grove, “On the March for Israel; The Lobbyists from AIPAC, Girding for Battle in the New World order,” *Washington Post*, June 13, 1991に引用されている。

295ページ 重要なことは……影響力を保持しているということ

他国政府のための外国団体として登録しなければならない事態を避けるためにAIPACが政治的影響力を行行使することは可能だったにもかかわらず、ラリー・フランクリンのスパイ事件があったために、今日この問題を非常に懸念している。自らの「米国面」を強調するためにあらゆることを行っている。Ron Kampeas, “New Ruling in AIPAC Case Raises Questions about ‘Foreign Agents,’” *JTA.org*, August 23, 2006; Ori Nir, “Leaders Fear Probe Will Force Pro-Israel Lobby to File as ‘Foreign Agent,’” *Forward*, December 31, 2004; and Ori Nir, “Leaders Stress American Side of AIPAC,” *Forward*, May 27, 2005を参照のこと。

295ページ AIPACが議会で……イスラエル政策というものは存在しない

“Sen. Hollings Floor Statement Setting the Record Straight on His Mideast Newspaper Column,” May 20, 2004, originally posted on the former senator’s website (now defunct) but still available at www.shalomctr.org/node/620.

295ページ （ある上院議員の話）

Grove, “On the March for Israel.” に引用されている。

296ページ (シャロン、オルメルトの発言)

シャロンの発言は、2003年8月29日から9月11日にかけて、*Chicago Jewish Star*のAIPACの広告に掲載された。オルメルトの発言は “To Israel with Love,” *Economist*, August 5, 2006に引用されている。

297ページ この国で……重要な役割を果たすのです

ジョーダンは、「民主党財務委員会の委員125人のうち70人以上がユダヤ人だ。1976年は、民主党への高額寄付者の60%以上がユダヤ人で、72年にニクソンが集めた資金の60%はユダヤ人による寄付だった。68年にハンフリーの選挙のために集まった資金の75%以上はユダヤ人による寄付だった。民主党のスクープ・ジャクソンが集めた資金の90%以上はユダヤ人による寄付だった。勝つ見込みの小さい候補者だった上、小さなユダヤ人コミュニティしかないような国の一地域からやってきているとしても、私たちの予備選挙資金の約35%はユダヤ人支持者がまかっている」と書いた。Hamilton Jordan, Confidential File, Box 34, File “Foreign Policy/Domestic Politics Memo, HJ Memo, 6/77,” Atlanta, Carter Library, declassified June 12, 1990.

297ページ 民主党の大統領候補者……献金に頼っている

Thomas B. Edsall and Alan Cooperman, “GOP Uses Remarks to Court Jews,” *Washington Post*, March 13, 2003. 以下も参照のこと。James D. Besser, “Jews’ Primary Role Expanding,” *Jewish Week*, January 23, 2004; Alexander Bolton, “Jewish Defections Irk Democrats,” *The Hill* (online), March 30, 2004; and E. J. Kessler, “Ancient Woes Resurfacing as Dean Eyes Top Dem Post,” *Forward*, January 28, 2005.

297ページ 他の推計では……寄付していると言われている

Isaacs, *Jews and American Politics*, 115–139; Amy Keller, “Chasing Jewish Dollars: Can GOP Narrow Money Gap in 2004?” *Atlanta Jewish Times* (online), January 17, 2003; and Kessler, “Hillary the Favorite in Race for Jewish Donations.”

297～298ページ 米国のユダヤ人有権者は……違いなのである

Jeffrey S. Helmreich, “The Israel Swing Factor: How the American Jewish Vote Influences U.S. Elections,” *Jerusalem Letter/Viewpoints* (online) 446 (January 15, 2001), 1.

298ページ 候補者たちが……と揶揄した

Kampeas, “Candidates for 2008.”

299ページ ディーンの発言は「無責任」だと決め付けた

E. J. Kessler, “Lieberman and Dean Spar over Israel,” *Forward*, September 12, 2003; and Stephen Zunes, “Attacks on Dean Expose Democrats’ Shift to the Right,” *Tikkun.org*, November/December 2003.

299ページ 全米中のユダヤ人指導者たちは.....というものだった

Zunes, "Attacks on Dean"; and James D. Besser, "Dean's Jewish Problem," *Chicago Jewish Star*, December 19, 2003–January 8, 2004.

299ページ ディーンは熱心なイスラエル支持者だからだ

E. J. Kessler, "Dean Plans to Visit Israel, Political Baggage in Tow," *Forward*, July 8, 2005; and Zunes, "Attacks on Dean."

301ページ カッツはスタイナーとの.....真偽を疑う余地はない

シュタイナーとカッツの会話記録は、www.wrmea.com/backissues/1292/9212013.htmlで見ることができる。以下も参照のこと。Thomas L. Friedman, "Pro-Israel Lobbyist Quits over Audiotaped Boasts," *New York Times*, November 5, 1992; and "Israeli Lobby President Resigns over Promises; Bragged to Contributor About Lies to Clinton," *Washington Times*, November 4, 1992.

301ページ 代理人を務める弁護士だった

John Heilprin, "Ex-Deputy Pleads Guilty in Abramoff Case," *Boston Globe*, March 23, 2007; and Stacey Schultz, "Mr. Outside Moves Inside," *U.S. News & World Report*, March 16, 2003.

302ページ もう1人はデニス・ロス.....参加している

Laura Blumenfeld, "Three Peace Suits; For These Passionate American Diplomats, a Middle East Settlement Is the Goal of a Lifetime," *Washington Post*, February 24, 1997; and Clayton E. Swisher, *The Truth About Camp David: The Untold Story About the Collapse of the Middle East Peace Process* (New York: Nation Books, 2004), 35–38, 183–187. 中東和平の失敗を取り上げたロスの論文 *The Missing Peace* の書評の中で、イスラエルの歴史家アヴィ・シャレイムは、米国史上、クリントン内閣は「最も熱心な親イスラエル派の一つ」と評し、「デニス・ロス以上に徹底してイスラエル第一の姿勢を見せた米国当局者を思いつくのは難しい」と語った。Avi Shlaim, "The Lost Steps," *Nation*, August 30, 2004. 以下も参照のこと。Michael C. Desch, "The Peace That Failed," *American Conservative*, November 8, 2004; and Jerome Slater, "The Missing Pieces in *The Missing Peace*," *Tikkun.org*, May 2005.

302ページ アインダイクとロスはよく知っていたからだ

クリントン大統領の国家安全保障問題担当顧問であったサミュエル・バーガーは、キャンプ・デービッドでの交渉中（2000年7月）デニス・ロスが「もしバラクがこれ以上何か申し出るようなら、この合意には反対する」とコメントした、と報告している。未編集の発言録は以下参照。"Comments by Sandy Berger at the Launch of *How Israelis and Palestinians Negotiate* (USIP Press, 2005)," U.S. Institute of Peace, Washington, DC, June 7, 2005, www.usip.org/events/2005/0607_beberger.pdf.

303ページ 私たちは2つの.....星条旗を掲げている

Hussein Agha and Robert Malley, “The Tragedy of Errors,” *New York Review of Books*, August 9, 2001. パレスチナ側の不満は、The Palestinian complaint is quoted in Blumenfeld, “Three Peace Suits”に引用されている。

304ページ これは実際にあった話です……答えをする場合もありました

David K. Shipler, “On Middle East Policy, a Major Influence,” *New York Times*, July 6, 1987.

304ページ カーター大統領はジョージ……違いないと考えてもいた

Douglas Brinkley, “The Lives They Lived; Out of the Loop,” *New York Times Magazine*, December 29, 2002.

304ページ マリウスの書評が原因だった

マリウスはもちろん、反ユダヤ主義者ではない。彼はこうした類の書評をほとんど書かなかった。「[この書籍の] シン・ベト（イスラエル秘密警察）の残虐性についてのくだりは、ゲシュタポ、つまり第2次大戦中にナチス支配地域で活動していた秘密警察の話と不気味なほどよく似ている」。Lloyd Grove, “The Outspoken Speechwriter; Gore Reverses Hiring Decision After Review Critical of Israel,” *Washington Post*, July 19, 1995; and Richard Marius, “Al Gore and Me, or How Marty Peretz Saved Me from Packing My Bags for Washington,” *Journal of Palestine Studies* 25, no. 2 (Winter 1996): 54–59.

304ページ 国防総省はリデールが……懐疑的だったからだ

Lawrence Kaplan, “Torpedo Boat: How Bush Turned on Arafat,” *New Republic*, February 18, 2002.

305ページ （エイブラムスの記述）

Elliot Abrams, *Faith or Fear: How Jews Can Survive in a Christian America* (New York: Simon & Schuster, 1997), 181.

305ページ 彼の就任はイスラエルにとって、まさに天からの贈り物だ

Nathan Guttman, “From Clemency to a Senior Post,” *Ha'aretz*, December 16, 2002.

第六章 社会的風潮を支配する

309ページ 地方の小さな新聞から……報道させることに成功している

Robert H. Trice, “Interest Groups and the Foreign Policy Process: U.S. Policy in the Middle East,” *Sage Professional Papers in International Studies*, ed. V. Davis and M. East (Beverly Hills, CA: Sage Publications, 1976), 63–65を参照のこと。

310ページ オルターマンは、無批判かつ.....5人しかあげていない

Eric Alterman, "Intractable Foes, Warring Narratives," *MSNBC.com*, March 28, 2002.

310ページ 主張の正しさが損なわれることはない

Reason 誌のキャシー・ヤングは、オルターマンの「反抗的」親イスラエル派知識人リストに自分が含まれていることに抗議し、オルターマンもこの間違いを認めた。

311ページ ニコラス・D・クリストフは米国の.....立場をとっているわけでもない

クリストフはまず、「民主党内でも共和党内でも、イスラエルやパレスチナに対する政策について真剣な政治議論をしていない」と述べ、これはイスラエルも含めたすべての当事者にとって好ましくないと暗に述べた。これに議論の余地はなかったはずだったが、名誉毀損防止連盟 (ADL) から抗議の手紙が届き、親イスラエルの報道監視団体“米国における正確な中東報道を求める委員会”(CAMERA)は、彼の見解を「一方的なイスラエル批判だ」とした。以下を参照のこと。“Talking About Israel,” *New York Times*, March 18, 2007; “Letter to the Editor,” *New York Times*, March 19, 2007,

http://www.adl.org/media_watch/newspapers/20070319_NYTimes.htm; and CAMERA,

“Kristof’s Blame-Israel Rant,” March 21, 2007,

www.camera.org/index.asp?x_context=2&x_outlet=139&x_article=1303.

313ページ シャミール、シャロン.....私にとってもすばらしいものだ

Bret Stephens, “Eye on the Media by Bret Stephens: Bartley’s Journal,” *Jerusalem Post*, November 22, 2002に引用されている。

313ページ 『ニューヨーク・タイムズ』の論調は中立ではなかった

Jerome N. Slater, “Muting the Alarm: The *New York Times* and the Israeli-Palestinian Conflict, 2000–2006” *International Security* 32, no. 2 (Fall 2007); and Howard Friel and Richard Falk, *Israel-Palestine on Record: How the New York Times Misreports Conflict in the Middle East* (London: Verso, 2007) を参照のこと。

313ページ 私がイスラエルに対して.....読者のほうが気づいていたようだ

Max Frankel, *The Times of My Life and My Life with The Times* (New York: Random House, 1999), 401–403.

313ページ ユダヤ系メディアであるか.....参加しないことです

Robert I. Friedman, “Selling Israel to America: The *Hasbara* Project Targets the U.S. Media,” *Mother Jones*, February–March 1987に引用されている。

314ページ 私はイスラエルという国家を.....編集されている

イスラエルを愛しているとのベレツの発言は、Alexander Cockburn and Ken Silverstein, *Washington Babylon* (London: Verso Books, 1996), 6に引用されている。『ニュー・リパブリック』誌に掲載された「政策方針」についての記述は、J. J. Goldberg, *Jewish Power:*

Inside the American Jewish Establishment (Reading, MA: Addison-Wesley, 1996), 299に引用されている。かつて、『タイム』誌は、ペレツが率いた『ニュー・リパブリック』について「イスラエル支持にという点で頑なだ」と評した。William A. Henry III, “Breaking the Liberal Pattern,” *Time*, October 1, 1984.

314ページ メディアにおける反ユダヤ的.....捌け口となっている

Michael Massing, “The Israel Lobby,” *Nation*, June 10, 2002に引用されている。

314ページ ボイコット運動に晒されたことがある

Felicity Barringer, “Some U.S. Backers of Israel Boycott Dailies over Mideast Coverage That They Deplore,” *New York Times*, May 23, 2002; Michael Getler, “Caught in the Crossfire,” *Washington Post*, May 5, 2002; Tim Jones, “Pro-Israel Groups Take Aim at U.S. News Media,” *Chicago Tribune*, May 26, 2002; Massing, “Israel Lobby”; and David Shaw, “From Jewish Outlook, Media Are Another Enemy,” *Los Angeles Times*, April 28, 2002.

314～315ページ 新聞社はAIPACや.....報道しないように即座に決定する

Massing, “Israel Lobby”に引用されている。

315ページ 米国のメディアにおいては.....圧力として結集させることに長けている

Friedman, “Selling Israel to America” に引用されている。

315～316ページ 米国内のユダヤ系報道機関も.....編集委員となったのである

イフシンについては、Lloyd Grove, “On the March for Israel; The Lobbyists from AIPAC: Girding for Battle in the New World Order,” *Washington Post*, June 13, 1991に引用されている。以下も参照のこと。Daniel Eisenberg, “AIPAC Attack?” *Columbia Journalism Review*, January/February 1993; Robert I. Friedman, “The Israel Lobby’s Blacklist,” *Village Voice*, August 4, 1992; Robert I. Friedman, “A PAC with McCarthy,” *Village Voice*, August 25, 1992; Robert I. Friedman, “The Wobbly Israeli Lobby,” *Washington Post*, November 1, 1992; Thomas A. Dine and Mayer Mitchell, “The Truth About AIPAC,” *Washington Post*, November 14, 1992; and Lawrence N. Cohler, “The AIPAC Flap,” *Washington Post*, December 5, 1992.

316ページ イスラエル・ロビー に属する.....偏向報道について喧伝している

一例として、以下を参照のこと。“Conflict of Interest Fits NPR Bias,”

http://www.camera.org/index.asp?x_context=4&x_outlet=28&x_article=100; and Joel

Berkovsky, “NPR Responds to Claims of Bias with Weeklong Series on Mideast,” *JTA.org*, October 4, 2002.

316ページ このCAMERAの活動の.....申し立てることを推奨していた

実際の広告は以下である。

http://www.camera.org/images_user/advertisements/large/CAMERA_CarterAD.pdf.

317ページ NPRに対してのさらなる圧力.....つながりを持つようになった

CAMERAとNPRのこの議論については、以下を参照した。Barringer, “Some U.S. Backers”; James D. Besser, “NPR Radio Wars Putting Jewish Groups in a Bind,” *Jewish Week*, May 20, 2005; Samuel Freedman, “From ‘Balance’ to Censorship: Bush’s Cynical Plan for NPR,” *Forward*, May 27, 2005; Nathan Guttman, “Enough Already from Those Pro-Israel Nudniks,” *Ha’aretz*, February 1, 2005; Mark Jurkowitz, “Blaming the Messenger,” *Boston Globe Magazine*, February 9, 2003; E. J. Kessler, “Hot Seat Expected for New Chair of Corporation for Public Broadcasting,” *Forward*, October 28, 2005; Gaby Wenig, “NPR Israel Coverage Sparks Protests,” *Jewish Journal of Greater Los Angeles* (online), May 9, 2003; and Gila Wertheimer, “NPR Dismisses Protest Rallies,” *Chicago Jewish Star*, May 30–June 12, 2003.

318ページ この注目すべき書簡の……というものだった

Bret Stephens, “An Open Letter to Ian Buruma,” *Jerusalem Post*, September 5, 2003. ブルマの最初の記事は、“How to Talk About Israel,” *New York Times Magazine*, August 31, 2003.

318ページ 歴史家のトニー・ジャッドが……明らかにするように依頼した

ジャッドは、オランダ公共放送VPRO International が2007年に制作したドキュメンタリー “The Israel Lobby”の中のインタビュー、および、『ロンドン・レビュー・オブ・ブックス』誌がスポンサーになって2006年9月28日、ニューヨークのクーパー労組で行われた イスラエル・ロビー をテーマにした討論の場でこれを明かした。このドキュメンタリーと討論は以下で見ることができる。それぞれ、<http://www.scribemedial.org/2006/10/11/israel-lobby/>, <http://www.youtube.com/profile?user=VPROinternational>.

318ページ ADLのような団体は……正当性に欠けるものだと主張している

James Traub, “Does Abe Foxman Have an Anti-Anti-Semite Problem?” *New York Times Magazine*, January 14, 2007.

319ページ CPMAJO会長でAVI理事長でもある……数は増加している

www.conferenceofpresidents.org/content.asp?id=34 and www.americasvoices.net. この事例では、米国の団体（会長会議）の主な役員は、この率先した活動はイスラエルの広報活動（ハスバラ）の一環だと表現した。

320ページ 親イスラエル勢力は多くの……形成する機関となっているのである

シンクタンクの役割や活動が増加していることについては、以下を参照のこと。Donald E. Abelson, *American ThinkTanks and Their Role in U.S. Foreign Policy* (New York: St. Martin’s Press, 1996); Trudy Lieberman, *Slanting the Story: The Forces That Shape the News* (New York: New Press, 2000); David M. Ricci, *The Transformation of American Politics: The New Washington and the Rise of Think Tanks* (New Haven: Yale University Press, 1993); James Allen Smith, *The Idea Brokers: Think Tanks and the Rise of the New Policy Elite* (New York: Free Press, 1991). [邦訳：スミス『アメリカのシンクタンク 大統領と政策エリートの世界』長谷川文雄・石田肇訳、ダイヤモンド社、1994年]; and Diane

Stone, *Capturing the Political Imagination: Think-Tanks and the Policy Process* (Portland, OR: Frank Cass, 1996).

320～321ページ　そこで85年……（WINEP）を設立した

Joel Beinin, “Money, Media and Policy Consensus: The Washington Institute for Near East Policy,” *Middle East Report Online*, January–February 1993, 10–15; Goldberg, *Jewish Power*, 221–222; and Mark H. Milstein, “Washington Institute for Near East Policy: An AIPAC ‘Image Problem,’” *Washington Report on Middle East Affairs* (online), July 1991.

321ページ　彼らは本当のことを言っていない

Milstein, “Washington Institute” に引用されている。

322ページ　ブルッキングズ研究所の研究は……青写真になったと言われている

Toward Peace in the Middle East: Report of a Study Group (Washington, DC: Brookings Institution Press, 1975).

322ページ　サバンは偉大な米国市民……ユダヤ人のために働いてくれる人物である

Andrew Ross Sorkin, “Schlepping to Moguldom,” *New York Times*, September 5, 2004. サバンは、ヒラリー・クリントンの大統領選挙運動の有力な支援者でもある。Jeffrey H. Birnbaum and Matthew Mosk, “Clinton Fundraising Goes Full Force,” *Washington Post*, February 7, 2007.

323ページ　NSCのメンバーだったフロント……ことがそれを示している

レヴェレットは、2003年5月から06年6月までブルッキングズ研究所“サバン中東政策センター”に、最初は客員研究員として、その後は上級研究員として勤めた。彼は、米国の対イラン、シリア政策に関して、上司であったマーティン・アインダイクとまったく異なる意見を持っていた。レヴェレットは、核計画を放棄しなければ軍事攻撃をしないとイランを脅したところで何も意味もなく、イラン政府と取引をするほうによほど意味があると考えていた。アインダイクは反対の見解を持ち、レバノンのラフィク・ハリリ首相暗殺はシリアのアサド大統領を弱体化させる好機になるとの考えにも、レヴェレットは同意しなかった。レヴェレットはブルッキングズを追い出されたが、その理由の一つに、アインダイクに同意しなかったこと、また、サバン中東政策センター長ケネス・ポラックによるイラク戦争擁護を批判したからでもある。著者とのインタビューは06年10月17日に行われた。著者との書簡は07年6月6日、6月12日付のもの。

323ページ　サバン中東研究センターは……持つ人々は出席しない

2005年のフォーラムはイスラエルで行われ、パレスチナ自治区のマフムード・アッバス大統領、サラム・ファヤド財務大臣、モハメド・ダーラン内政問題担当大臣とのセッションもあった。

324ページ　アフマディネジャド大統領は……反応は理解できるものだ

フォックスマンは、David E. Sanger, “Iran’s Leader Relishes 2nd Chance to Make Waves,” *New York Times*, September 21, 2006に引用されている。以下も参照のこと。“Ahmadinejad

Talks to U.S. Think Tank,” *Washington Post*, September 21, 2006; and Eli Lake, “N.Y.’s Jewish Leaders Reject Offer to Meet Iran’s Leader,” *New York Sun*, September 18, 2006.

326ページ イスラエルから多くの講演者をキャンパスに招いた

James D. Besser, “Turning up Heat in Campus Wars,” *Jewish Week*, July 25, 2003; Ronald S. Lauder and Jay Schottenstein, “Back to School for Israel Advocacy,” *Forward*, November 14, 2003; and Rachel Pomerance, “Israel Forces Winning Campus Battle, Say Students Attending AIPAC Meeting,” *JTA.org*, December 31, 2002.

327ページ 訓練プログラムでは……理解してもらいたいと思っている

Michal Lando, “Christians to Train in Israel Advocacy,” *Jerusalem Post*, May 14, 2007.

327ページ 03年夏、AIPACは……広めるように指導された

Besser, “Turning up Heat”; and Pomerance, “Israel Forces Winning”. 2005年春、AIPACは学生自治体会長100人（そのうちの80人はユダヤ人ではなかった）を年次会議に招いた。Nathaniel Popper, “Pro-Israel Groups: Campuses Improving,” *Forward*, June 24, 2005.

327ページ その中には150人以上の学生団体の会長が含まれていた

“Policy Conference Highlights,” <http://www.aipac.org/2841.htm>.

328ページ 80年代前半……と主張していた

Jonathan S. Kessler and Jeff Schwaber, *The AIPAC College Guide: Exposing the Anti-Israel Campaign on Campus*, special ed. for the Hillel Foundation (Washington, DC: AIPAC, 1984); and Kristine McNeil, “The War on Academic Freedom,” *Nation*, November 11, 2002.

328ページ このような活動は……報告するよう呼びかけた

Michael Dobbs, “Middle East Studies Under Scrutiny in U.S.,” *Washington Post*, January 13, 2004; Michele Goldberg, “Osama University?” *Salon.com*, November 6, 2003; Kristine McNeil, “The War on Academic Freedom,” *Nation*, November 11, 2002; and Zachary Lockman, “Behind the Battle over US Middle East Policy,” *Middle East Report Online*, January 2004.

328ページ 学者をブラックリストに載せて……学生たちに呼びかけている

Tanya Schevitz, “‘Dossiers’ Dropped from Web Blacklist; Mideast Center Says Denouncing Professors Was Counterproductive,” *San Francisco Chronicle* (online), October 3, 2002.

329ページ （高等教育における国際研究法案）

“The International Studies in Higher Education Act (HR 3077),”この法律の全文は以下で見ることができる。 www.govtrack.us/congress/billtext.xpd?bill=h108-3077.

329ページ 彼らは既存の中東研究……と主張していたのだ

Stanley Kurtz, "Anti-Americanism in the Classroom," *National Review Online*, May 16, 2002; Martin Kramer, *Ivory Towers on Sand: The Failure of Middle East Studies in America* (Washington, DC: Washington Institute for Near East Policy, 2001).

329ページ イスラエル・ロビー に属する主要な.....行われていると非難した
共同書簡の文面は、マーティン・クレイマーのウェブサイトに掲載されている。
www.geocities.org/martinkramerorg/Documents/HR3077/jointletter.htm.

329～330ページ HR3077法案は.....上院は通過できなかった
Goldberg, "Osama University?"; Ron Kampeas, "Campus Oversight Passes Senate as Review Effort Scores a Victory," *JTA.org*, November 22, 2005; Stanley Kurtz, "Reforming the Campus: Congress Targets Title VI," *National Review Online*, October 14, 2003; McNeil, "War on Academic Freedom"; Ori Nir, "Groups Back Bill to Monitor Universities," *Forward*, March 12, 2004; Sara Roy, "Short Cuts," *London Review of Books*, April 1, 2004; and Anders Strindberg, "The New Commissars," *American Conservative*, February 2, 2004.

330ページ 同様の法案が.....終了とともに法案は廃案となった
HR 609 [109th Congress], "College Access and Opportunity Act of 2006"を参照のこと。
www.govtrack.us/congress/bill.xpd?bill=h109-609.

330ページ 自分たちの勝利だと宣言した
Martin Kramer, "Title VI Verdict," http://sandbox.blog-city.com/title_vi_verdict.htm; and Stanley Kurtz, "Title Bout: Bipartisan Hope for Middle East Studies Reform," *National Review Online*, April 2, 2007を参照。以下も参照のこと。Committee to Review the Title VI and Fulbright-Hays International Education Programs, "International Education and Foreign Languages: Keys to Securing America's Future" (Washington, DC: National Research Council, 2007), 3.

330ページ 偏向が激しいなら.....偏向は存在しなかった
Scott Jaschik, "New Approach to International Education," *Inside Higher Ed* (online), www.insidehighered.com/news/2007/03/28/intlに引用されている。以下も参照のこと。Sierra Millman, "Education Department Should Have High-Ranking Official to Oversee Foreign Language Study," *Chronicle of Higher Education Daily Report*, March 28, 2007.

331ページ 07年4月に上程された.....考慮することが盛り込まれている
法律草案は、"Title VI International Education Programs," April 19, 2007. この草案は、連邦助成金の応募者に「助成金を得た活動が多様な考えと幅広い見解を反映しているかどうか」という議論に、どう対応するかの説明を求め、それ以降の条項は、「このプロジェクト名で助成金を得た活動に対して申し立てられた苦情が、当該助成金受給者の申請書に記入されている手順で解決しない場合、そうした苦情は教育省に付託され、教育長官が再検討する」としている。

331ページ 学界、教育界における.....大学教授の数を増やすためだ

130という数字は、Mitchell G. Bard, “Tenured or Tenuous: Defining the Role of Faculty in Supporting Israel on Campus”¹¹にもとづく。これは2004年5月にIsrael on Campus Coalition and the American-Israeli Cooperative Enterpriseが発表した報告書である。以下も参照のこと。Nacha Cattan, “NYU Center: New Addition to Growing Academic Field,” *Forward*, May 2, 2003; Samuel G. Freedman, “Separating the Political Myths from the Facts in Israel Studies,” *New York Times*, February 16, 2005; Jennifer Jacobson, “The Politics of Israel Studies,” *Chronicle of Higher Education*, June 24, 2005, 10–12; Michael C. Kotzin, “The Jewish Community and the Ivory Tower: An Urgent Need for Israel Studies,” *Forward*, January 30, 2004; and Nathaniel Popper, “Israel Studies Gain on Campus as Disputes Grow,” *Forward*, March 25, 2005.

331ページ タウブ・センターが.....対抗できるようにしたい

Cattan, “NYU Center”に引用されている。

332ページ ユダヤ研究プログラムが.....外交官となるからでもある

Shmuel Rosner, “Donor May Fund Georgetown Jewish Center to Give U.S. Leaders Another Viewpoint,” *Ha’aretz*, June 14, 2006; Shmuel Rosner, “Academic Lies About Israel,” *Ha’aretz*, June 14, 2006; and Stephen Santulli, “Jewish Program May Get Major Gift,” *Hoya* (online), September 1, 2006.

332～333ページ イスラエル・ロビー の学界.....攻撃を受けた

もともとの申し立てについては、*Campus Watch* のウェブサイトに掲載されている2002年7月24日付のChicago Friends of Israel, “Jewish and Pro-Israel Students at the University of Chicago Subject to Intimidation and Hate”を参照。以下も参照のこと。Ron Grossman, “Mideast Conflict Boosts Tensions at U.S. Colleges,” *Chicago Tribune*, October 17, 2002; Dave Newbart, “Allegations of Anti-Semitism on Campus,” *Chicago Sun-Times*, November 4, 2002; Joshua Steinman, “University Professors Labeled Anti-Israeli by Campus Watch Site,” *Chicago Maroon* (online), October 29, 2002; “University Responds to Anti-Semitic Incidents,” *University of Chicago Magazine*, October 2002; and Sean Wereley, “Students Debate Presence of Anti-Semitism on Campus,” *Chicago Weekly News*, October 17, 2002.

333ページ その時も同じようなことが起きた

以下を参照のこと。Jonathan R. Cole, “The Patriot Act on Campus: Defending the University Post-9/11,” *Boston Review*, Summer 2003; Chanakya Sethi, “Khalidi Candidacy for New Chair Draws Fire,” *Daily Princetonian* (online), April 22, 2005; Chanakya Sethi, “Debate Grows over Khalidi Candidacy,” *Daily Princetonian* (online), April 28, 2005; “Scholarship, Not Politics, Is the Measure of a Professor,” *Daily Princetonian* editorial (online), April 27, 2005.

333ページ 高名な文芸評論家である.....解雇を求める内容のものだった

Cole, “The Patriot Act on Campus.”

334ページ 04年にダヴィデ・プロジェクトは.....告発するものだった

Robert Gaines, "The Battle at Columbia University," *Washington Report on Middle East Affairs* (online), April 2005; Caroline Glick, "Our World: The Columbia Disaster," *Jerusalem Post*, April 4, 2005; Joseph Massad, "Witch Hunt at Columbia: Targeting the University," *CounterPunch.org*, June 3, 2005; Nathaniel Popper, "Columbia Students Say Firestorm Blurs Campus Reality," *Forward*, February 11, 2005; Scott Sherman, "The Mideast Comes to Columbia," *Nation*, April 4, 2005; and Chanan Weissman, "Film on 'Bias' at Columbia U. Sparks Fury Among Israeli Alumni," *Jerusalem Post*, February 6, 2005.

334ページ 脅迫を受けていたことが明らかにされた

"Columbia University Ad Hoc Grievance Committee, Final Report, New York, 28 March 2005 (excerpts)," *Journal of Palestine Studies* 34, no. 4 (Summer 2005): 90–100.

334ページ これはコロンビア大学だけで.....人々がいることが明らかになった

Scott Jaschik, "Blackballed at Yale," *Inside Higher Ed* (online), June 5, 2006; Liel Liebovitz, "Middle East Wars Flare Up at Yale," *Jewish Week*, June 2, 2006; Steve Lipman, "Opening the Ivy Doors," *Jewish Week*, December 22, 2006; Philip Weiss, "Burning Cole," *Nation*, July 3, 2006; and the symposium "Posting Mortem," *Chronicle of Higher Education*, July 28, 2006.

335ページ イスラエルを批判から守る.....マクロスキーに対して公式に謝罪した

Paul Findley, *They Dare to Speak Out: People and Institutions Confront Israel's Lobby*, 3rd ed. (Chicago: Lawrence Hill, 2003), 50–58; and "Stanford Apologizes to Ex-Representative McCloskey," *Washington Post*, July 28, 1983.

335～336ページ 私たち著者も似たような経験を.....と質したのだ

米国海軍大学教授会の一員であるピーター・ドムブロウスキは、2006年6月13日、この一件を私たちに知らせてくれた。07年4月5日、メールでも確認した。

336ページ その後、私、ウォルトは.....その試みは失敗に終わった

以下を参照のこと。"UM Deserves to Hear Both Sides on Israel Lobby," letter, *Montana Kaimin*, September 7, 2006; Trevor Kilgore, "Profs Off-Base in Labeling Lecturer as Anti-Semitic," letter, *Montana Kaimin*, September 8, 2006; Brenna Moore, "U.S. Foreign Policy Mistakes, Consequences Discussed by International Relations Expert," *Montana Kaimin*, September 12, 2006; Rob Chaney, "Professor Questions U.S.-Israeli Relationship," *Missoulian*, September 12, 2006; "Anti-Semitic Lecturer Bad for UM," letter, *Montana Kaimin*, September 13, 2006; and "Presidential Lecturer Starts Debate, Not Hatred," letter, *Montana Kaimin*, September 12, 2006. 同年10月、一連の講義でジョセフ・ジョフィを招待した。ジョフィは、著名なヨーロッパ外交政策専門家で、私たちの第一稿を辛辣に批判した人物である。彼を招待しても、ウォルトを招待したことを批判した人々は収まらなかった。彼らはこの講義を企画したコーディネーターを追い出すという、結局成功しなかった働きかけを続

けていた。Hannah Heimbuch, “Lecture Series Not Skirting Foreign Policy,” *Montana Kaimin*, October 26, 2006.

336～337ページ 『審判にかけられる国』は……否かということである

Ralph Blumenthal, “Cries to Halt Publication of Holocaust Book,” *New York Times*, January 10, 1998; and Norman G. Finkelstein, *Beyond Chutzpah: On the Misuse of Anti-Semitism and the Abuse of History* (Berkeley: University of California Press, 2005), 55–56. [邦訳：フィンケルスタイン 『イスラエル擁護論批判 反ユダヤ主義の悪用と歴史の冒涇』立木勝訳、三交社、2007年]

337ページ フィンケルスタインの本は何とか出版にこぎ着けた

Jon Weiner, “Giving Chutzpah New Meaning,” *Nation*, July 11, 2005; the subsequent correspondence *ibid.*, August 29, 2005. 以下も参照のこと。“Dershowitz, Prof Spar over Plagiarism,” *New York Times*, July 14, 2005; Neve Gordon, “The Real Case for Israel,” *In These Times* (online), October 12, 2005; Jennifer Howard, “Calif. Press Will Publish Controversial Book on Israel,” *Chronicle of Higher Education* (online), July 22, 2005; and Jon Wiener, “Chutzpah and Free Speech,” *Los Angeles Times*, July 11, 2005.

338ページ 彼をこれからもプログラムに参加させることはない

Andy Humm, “Academic Freedom, Intimidation, and Mayoral Politics: The Case of Rashid Khalidi,” *Gotham Gazette* (online), April 7, 2005; Julia Levy, “Khalidi Is Tapped to Teach Teachers About Middle East,” *New York Sun*, February 15, 2005; Julia Levy, “Education Dept. Drops Columbia Prof. from Teaching Program for Teachers,” *New York Sun*, February 16, 2005; and Alisa Solomon, “When Academic Freedom Is Kicked Out of Class,” *Forward*, March 4, 2005.

338ページ 06年、ニューヨーク市議会は……教育プログラムを認可した

Yaniv Halili, “New Yorkers to Study About Israel,” *Ynetnews.com*, September 8, 2006; and David Andreatta, “Schools Back Israeli Teacher Course,” *New York Post* (online), September 28, 2006. 圧力は私立高校にも及ぶ。2007年1月、事態を懸念した両親や Jewish Community Relations Council of Silicon Valley は、サンノゼにある私立ハーカー高校で予定されていたスタンフォード大学教授ジョエル・ベイニンの講演をキャンセルさせた。ベイニンはユダヤ人で自他ともに認めるシオニストだが、イスラエルの対パレスチナ政策を批判していることから、彼が高校生に向けて講演するなど容認できることではなかった。Joel Beinin, “Silencing Critics Not Way to Middle East Peace,” *San Francisco Chronicle* (online), February 4, 2007.

338ページ 同時期、30以上のユダヤ人団体の……プログラムを組織している

Max Gross, “Israel Advocacy Coalition Targeting High Schools,” *Forward*, January 23, 2004; Rachel Pomerance, “With Israel Issue Hot on Campus, Groups Train High School Advocates,” *JTA.org*, January 22, 2004; and “New Pro-Israel Campaign Targets High School Students,” *JTA.org*, June 2, 2004.

338ページ イスラエルへの批判は少なくなっているのだ

Jonathan Kessler, "Pro-Israel Activism Makes Comeback on Campus," *Forward*, December 26, 2003; Popper, "Pro-Israel Groups: Campuses Improving,"; Barry Silverman and Randall Kaplan, "Pro-Israel College Activists Quietly Successful on Campus," *JTA.org*, May 9, 2005; and Chanan Tigay, "As Students Return to Campus, Activists Prepare a New Approach," *JTA.org*, September 1, 2005. 言うまでもなく、ロビー団体が大学に及ぼす影響はたかが知れている。Joe Eskenazi, "Book: College Campuses Quiet, but Anti-Israel Feeling Is Growing," *JTA.org*, November 29, 2005; and Gary Rosenblatt, "U.S. Grad Students Seen Hostile to Israel," *Jewish Week*, June 17, 2005.

340ページ 自由な議論を封殺するような活動を激しく非難した

ハリスとポーランド領事クリストフ・カスプジュイク将軍は、Michael Powell, "In N.Y., Sparks Fly over Israel Criticism," *Washington Post*, October 9, 2006に引用されている。以下も参照のこと。J. J. Goldberg, "A 'Lobby' Prof Asks: Can We Talk?" *Forward*, October 13, 2006; Larry Cohler-Esses, "Off Limits? Talk by Israel Critic Canceled," *Jewish Week*, October 6, 2006; and Ira Stoll, "Poland Abruptly Cancels a Speech by Local Critic of the Jewish State," *New York Sun*, October 4, 2006. 公開書簡は、"The Case of Tony Judt: An Open Letter to the ADL," *New York Review of Books*, November 16, 2006で見ることができ、ADLからの返答と、最初に書簡を書いた主な2人による返答については、"The ADL & Tony Judt: An Exchange" *New York Review of Books*, November 30, 2006を参照のこと。

340ページ ジャッドに関して言えば.....多くの新聞で報じられた

Graham Bowley, "Lunch with the FT: Tony Judt," *Financial Times*, March 16, 2007.

340ページ 同年10月には似たような事件が.....パーティを取り止めた

"French Embassy Cancels N.Y. Book Launch over Author's Israel Views," *Ha'aretz*, October 10, 2006に引用されている。以下も参照のこと。Ed Pilkington, "US Free Speech Row Grows as Author Says Jewish Complaints Stopped Party," *Guardian*, October 11, 2006; and Henry Porter, "The Enemies of Free Speech Are Everywhere," *Observer*, October 15, 2006. カリルの書籍の該当する一説では、「フランス人はビシーを忘れ、オーストラリア人はアボリジニを忘れ、英国人はアイルランド人を忘れ、統一派は北アイルランドのカトリックを忘れ、米国はチリとグアンタナモを忘れていて。あらゆる人が東ティモールやルワンダのことを忘れていて。この本を書いたから、なぜそうした悪党や残虐なことを書くのに耐えられたのかとよく聞かれる。実際のところ、過去の戦慄は書く妨げにならなかった。私が苦しかったのは.....どうすることもできないフランスのユダヤ人の恐怖を間近にして生活していること、イスラエルのユダヤ人がパレスチナ人に何を押しつけているのかを知ることだ。他の人類と同じように、イスラエルのユダヤ人はパレスチナ人を『忘れていて』。みんなが忘れていて。すべての国家が忘れていて。」 Carmen Calill, *Bad Faith: A Forgotten History of Family, Fatherland, and Vichy France* (New York: Random House, 2006), 437.

341ページ 私たちがユダヤ人たちから聞いたのは.....状況にあるということだ

Jesse McKinley, "Play about Demonstrator's Death Is Delayed," *New York Times*, February 28, 2006; and Katharine Viner, "A Message Crushed Again," *Los Angeles Times*, March 1, 2006. 以下も参照のこと。Rachel Irwin, "Censoring Rachel's Words?" *Jerusalem Post*, March 20, 2006; Edward Rothstein, "Too Hot to Handle, Too Hot to Not Handle," *New York Times*, March 6, 2006; and Philip Weiss, "Too Hot for New York," *Nation*, April 3, 2006.

341ページ 同年12月にはカナダでも.....ユダヤ人共同体の怒りを恐れたためである

Richard Ouzounian, "'Corrie' Cancelled in Canada," *Variety* (online), December 22, 2006.

341ページ 抗議があったことが公演中止の理由と『マイアミ・ヘラルド』紙は報じている

Christine Dolen, "Theater Won't Stage Controversial Drama," *Miami Herald* (online), April 3, 2007. ドレンは、シアトルではこの劇は成功裏に終わったが、3つのユダヤ人団体が観客にリーフレットを手渡すなどの抗議があったとも書いている。

342～343ページ この件に関して.....活動していただけにすぎないのだ

フォックスマンは、Jim McGee, "Jewish Group's Tactics Investigated," *Washington Post*, October 19, 1993に引用されている。ADLの事例については以下を参照のこと。Chip Berlet and Dennis King, "ADL-Gate," *Tikkun*, July/August 1993; Jeffrey Blankfort, Anne Poirier, and Steve Zeltser, "The ADL Spying Case Is Over, but the Struggle Continues," *CounterPunch.org*, February 25, 2002; Phil Bronstein, "Suspect in Cop Spy Case Tells His Story," *San Francisco Examiner*, January 22, 1993; Lynne Duke, "Anti-Defamation League Sued: Rights Violations Alleged in Spying," *Washington Post*, October 22, 1993; Bob Egelko, "Jewish Defense Group Settles S.F. Spying Suit," *San Francisco Chronicle* (online), February 23, 2002; Robert I. Friedman, "The Enemy Within," *Village Voice*, May 11, 1993; "Inquiry Is Dropped over Spy Charges," *New York Times*, November 17, 1993; and "The ADL Snoops," *CounterPunch.org*, November 11, 1998.

343ページ またイスラエルのメディアでは.....と呼んでいる

第4章で論じたように、“ユダヤ人口ビー団体”では誤解を招き、適切ではないと考える。全ユダヤ人がロビー団体の姿勢を支持し、この緩やかな連合体の一部を構成する非ユダヤの個人や集団を無視していることになるからだ。

343～344ページ こうした非難は.....ガンが再発した」と書いた

Mortimer B. Zuckerman, "A Shameful Contagion of Anti-Semitism in Europe," *U.S. News & World Report*, October 7, 2002; and Jeff Jacoby, "The Cancer of Anti-Semitism in Europe," *Boston Globe*, March 21, 2004.

344ページ 30年代と同じくらい悪い事態となっている

Tony Judt, "Goodbye to All That?" *Nation*, January 3, 2005に引用されている。

344ページ (ヨーロッパで行った世論調査の結果)

Anti-Defamation League, “Attitudes Toward Jews, Israel and the Palestinian-Israeli Conflict in Ten European Countries,” April 2004; and Pew Global Attitudes Project, *A Year After Iraq War: Mistrust of America in Europe Even Higher, Muslim Anger Persists* (Washington, DC: Pew Research Center for the People and the Press, March 16, 2004), 4–5, 26. ADLの調査については、“ADL Survey Finds Some Decrease in Anti-Semitic Attitudes in Ten European Countries,” ADL press release, April 26, 2004; and Shlomo Shamir, “Poll Shows Decrease in Anti-Semitic Views in Europe,” *Ha’aretz*, April 27, 2004を参照のこと。これらの結果は、ヨーロッパでは反ユダヤ主義がはびこっていると主張する親イスラエル専門家に事実上何の影響も及ぼさなかった。一例として、Daniel J. Goldhagen, “Europe’s Toothless Reply to Anti-Semitism: Conference Fails to Build Tools to Fight a Rising Sickness,” *Los Angeles Times*, April 30, 2004; and Charles Krauthammer, “The Real Mideast ‘Poison,’” *Washington Post*, April 30, 2004を参照のこと。

344ページ 親イスラエル派の団体の多くは……フランスについて考えてみよう

Martin Peretz, “Cambridge Diarist: Regrets,” *New Republic*, April 22, 2002, 50.

344ページ (フランスで行われた世論調査の結果)

当該段落のデータは、“Anti-Semitism in Europe: Is It Really Rising?” *Economist*, May 4, 2002から引用した。

344～345ページ フランスのユダヤ人共同体……と宣言した

マルク・ペレルマンは、“Community Head: France No More Antisemitic Than U.S.,” *Forward*, August 1, 2003に引用されている。以下も参照のこと。Francois Bujon de l’Estang, “A Slander on France,” *Washington Post*, June 22, 2002; and “French President Accuses Israel of Conducting Anti-French Campaign,” *Ha’aretz*, May 12, 2002.

345ページ フランス警察は……ヨーロッパでも最大だからだ

“French Police: Anti-Semitism in France Sharply Decreased in 2005,” *Ha’aretz*, January 19, 2006.

345ページ 06年2月……連帯することを公にアピールした

“French Protest for Murdered Jew,” *BBC News Online*, February 26, 2006; and Michel Zlotowski, “Large Memorial Held for Parisian Jew,” *Jerusalem Post*, February 23, 2006.

345ページ ドイツに目を向けてみよう……と報じている

Avi Beker, “The Eternally Open Gate,” *Ha’aretz*, January 11, 2005; Josef Joffe, “A Boom, if Not a Renaissance, in Modern-Day Germany,” *Forward*, July 25, 2003; Nathaniel Popper, “Immigrant Policy Eyed as German Community Swells,” *Forward*, July 25, 2003; and Eliahu Salpeter, “Jews from the CIS Prefer Germany to the Jewish State,” *Ha’aretz*, May 28, 2003. *Times of London*誌は2005年春、「この数年でおよそ10万人のユダヤ人がロシアに帰還し、反ユダヤ主義の長い歴史を持つ国でのユダヤ人の生活を、目を見張るほど復興させた」という記事を掲載した。Jeremy Page, “Once Desperate to Leave, Now Jews Are

Returning to Russia, Land of Opportunity,” *Times* (London), April 28, 2005.以下も参照のこと。Lev Krichevsky, “Poll: Russians Don’t Dislike Jews, and More Are Against Anti-Semitism,” *JTA.org*, February 2, 2006.

345ページ 私たち著者はヨーロッパから……人種差別からの場合もある

ユダヤ機関教育部部長は、「今日の暴力的な反ユダヤ主義は、2つの起源に端を発している。中東と西ヨーロッパのイスラム過激派、そして東ヨーロッパとラテンアメリカのネオナチ青年分子だ」と発言したとの記述がある。Jonathan Schneider, “Anti-Semitism Still a World Problem,” *Jerusalem Post*, January 26, 2006.

345～346ページ イギリスの反ユダヤ主義を……時代と比べることはできない

“Study: Anti-Semitic Attacks Hit Record Level in Britain in 2006,” *Ha’aretz*, February 1, 2007; and Community Security Trust, “Antisemitic Incidents Report 2006,” www.thecst.org.uk.

346ページ イスラエルを拠点にしている……学ぶことができる

とくに、過去5年間で反ユダヤ的な襲撃は25%減少し、「ロンドンでは黒人、アジア人、アラブへの人種主義的襲撃が非常に多い」と、ロンドン警視庁は報告した。グローバル・フォーラムは、2005年から2006年にかけて反ユダヤ的事件は若干（3%）減少したとしている。Jonny Paul, “Sharp Rise in U.K. anti-Semitism? Numbers Don’t Add Up for Everyone,” *JTA.org*, February 22, 2007.

346ページ 反ユダヤ主義が増大しているという……批判のことを指している

この議論の例としては、以下を参照のこと。Phyllis Chesler, *The New Anti-Semitism: The Current Crisis and What We Must Do About It* (San Francisco: Jossey-Bass, 2003); Hillel Halkin, “The Return of Anti-Semitism: To Be Against Israel Is to Be against the Jews,” *Wall Street Journal*, February 5, 2002; Barry Kosmin and Paul Iganski, “Judeophobia—Not Your Parents’ Anti-Semitism,” *Ha’aretz*, June 3, 2003; Amnon Rubinstein, “Fighting the New Anti-Semitism,” *Ha’aretz*, December 2, 2003; Gabriel Schoenfeld, *The Return of Anti-Semitism* (San Francisco: Encounter Books, 2003); Natan Sharansky, “Anti-Semitism Is Our Problem,” *Ha’aretz*, August 10, 2003; Yair Sheleg, “A World Cleansed of the Jewish State,” *Ha’aretz*, April 18, 2002; and Yair Sheleg, “Enemies, a Post-National Story,” *Ha’aretz*, March 8, 2003. この見解に対する批判としては、以下を参照のこと。Akiva Eldar, “Anti-Semitism Can Be Self-Serving,” *Ha’aretz*, May 3, 2002; Brian Klug, “The Myth of the New Anti-Semitism,” *Nation*, February 2, 2004; Ralph Nader, “Criticizing Israel Is Not Anti-Semitism,” *CounterPunch.org*, October 16/17, 2004; *Reframing Anti-Semitism: Alternative Jewish Perspectives*, ed. Henri Picciotto and Mitchell Plitnick (Oakland, CA: Jewish Voice for Peace, 2004); and Finkelstein, *Beyond Chutzpah*, chaps. 1–3.

346～347ページ 06年、英国国教会は……拡大している証拠だ」と述べた

Helen Nugent, “Chief Rabbi Flays Church over Vote on Israel Assets,” *Times* (London),

February 17, 2006. 以下も参照のこと。Bill Bowder, “Sacks Seeks Talks after Synod Vote on Disinvestment,” *Church Times* (online), February 17, 2006; “Bulldozer Motion ‘Based on Ignorance,’” *Church Times* (online), February 10, 2006; Ruth Gledhill, “Church Urged to Reconsider Investments with Israel,” *Times* (London), May 28, 2005; and Irene Lancaster, “Anglicans Have Betrayed the Jews,” Moriel Ministries (UK) website, www.moriel.org/articles/israel/anglicans_have_betrayed_the_jews.htm. “U.K. Chief Rabbi Attacks Anglicans over Israel Divestment Vote,” *Ha’aretz*, February 17, 2006.

347ページ 彼らはただイスラエルの政策に抗議しただけにすぎないのだ

英国国教会はイスラエルの政策を批判しているだけであって、反ユダヤ主義には関わっていないという見解は、2006年2月10日にカンタベリー大主教ローワン・ウィリアムズから主席ラビ、ジョナサン・サックスに宛てた投資引き上げに関する英国国教会の決定を説明する書簡で明らかだ。“Archbishop: Synod Call Was Expression of Concern”英国国教会のウェブサイト www.cofe.anglican.org/news/pr2006.htmlを参照のこと。

347ページ その折り、ADLの.....明らかであると主張した

Arnold Forster and Benjamin R. Epstein, *The New Anti-Semitism* (New York: McGraw-Hill, 1974). 彼らの言葉を借りれば、「反ユダヤ主義の新たな核心」は、「ユダヤ人を深く理解することにほとんど関心がなく、反ユダヤ的な行動への対応がありきたりで覇気に欠け、ユダヤ人が安全に世界各地で生存していくにはイスラエルの存在が必要だということを理解する能力も気力もない」ということだ(324)。

347ページ その証拠として.....AWACS早期警戒管制機が売却されたことをあげた

パールマターによると、「(AWACS取引で)勝利した(レーガン)政権に得点を与えたのは、反ユダヤ主義の表面上の優しさだ」。Nathan Perlmutter and Ruth Ann Perlmutter, *The Real Anti-Semitism in America* (New York: Arbor House, 1982), 236を参照のこと。

347ページ ユダヤ人に対する敵意から.....パールマターは主張した

パールマターの言葉を借りれば、「今日におけるユダヤ人の利権は、いつもの天敵である露骨な反ユダヤ主義というよりも、むしろ、反ユダヤ主義ではない人々が提案した非ユダヤ的な政府の政策に脅かされている」。それらの政策には、「二番煎じのオイルマネーを狙った西側経済への切望」、新孤立主義、そして補償の集団的権利(差別撤廃措置など)がある。彼らの見解からすると、「ユダヤ人は今日、見分けやすい長年の反ユダヤ的な天敵よりも、偏見はないものの、より大きな危害をもたらす方面からの危険に晒されている。問われることなく野放しにされてきたユダヤ的には中立的に見えるこれらの政策はユダヤ人に害を与えうるし、必要に応じて退けられてきた古典的な反ユダヤ主義を再び解放することになりうる」という。*Real Anti-Semitism*, 9, 231-232を参照のこと。

348ページ 少なくともキリスト教が.....時代はなかった

Hillel Halkin, “The Return of Anti-Semitism,” *Commentary*, February 2002, 30に引用されている。

348ページ 新しい反ユダヤ主義は.....疑問を投げかけているだけなのだ

Natan Sharansky, "Anti-Semitism Is Our Problem," *Ha'aretz*, August 10, 2003を参照のこと。Zuckerman, "Shameful Contagion"も参照。

351～352ページ ピーター・ノヴァックは.....信じたくて仕方がないのだ

Peter Novick, *The Holocaust in American Life* (New York: Houghton Mifflin, 1999); Jack Wertheimer, "Jewish Organizational Life," in *American Jewish Yearbook 1995* (New York: American Jewish Committee, 1995), 70; and Frank Rich, "The Booing of Wolfowitz," *New York Times*, May 11, 2002.

352ページ 『ニュー・リパブリック』誌の.....イメージを身近に感じている

Leon Wieseltier, "Hitler Is Dead: The Case against Jewish Ethnic Panic," *New Republic*, May 27, 2002 (ヘントフもローゼンバウムもこの記事に引用されている)。前国務次官シュワート・アイゼンシュタットは、2007年4月に同様の注意を喚起している。「反ユダヤ主義は消滅してはいないが、ホロコーストの重大さは国際世論に刻み込まれている。一般の反ユダヤ主義的姿勢は急速になくなった。宗教にもとづいた反ユダヤ主義を薄めたバチカンが重要な声明を出し、カトリックとユダヤの対話は数十年続いている。.....西ヨーロッパ諸国の多くにはホロコースト記念日があり、ホロコースト記念館を持つ国もある.....事実上すべての欧州諸国でシナゴーグや宗教学校を警察が警備している。遅ればせではあるが、フランスに見られるように、反ユダヤ主義的行為に対しては断固たる対応が行われた。」Stuart Eizenstat, "The Dangers Are Great, but It Is Not 1938," *Forward*, April 20, 2007.

353ページ カーター元大統領がこれまで.....批判と内容は同じである

Yossi Beilin, "The Case for Carter," *Forward*, January 16, 2007.

353ページ イスラエルのパレスチナ人への.....繰り返し使っている

この言葉を使った著名なイスラエル人としては、前法務長官マイケル・ベン・ヤイール、エルサレム市助役メロン・ベンヴェニスティ、平和活動家ウリ・アヴネリ、前教育大臣シュラミット・アロニ、その他複数のイスラエル平和運動団体がある。Joseph Lelyveld, "Jimmy Carter and Apartheid," *New York Review of Books*, March 29, 2007を参照のこと。ツツとカスリルスについては以下を参照のこと。Desmond Tutu and Ian Urbina, "Against Israeli Apartheid," *Nation*, June 27, 2002; and Jonny Paul, "South African Jewish Minister Sends Support to 'Israel Apartheid Week' Organizers," *Jerusalem Post*, February 22, 2007.

353ページ ADLとCAMERAは様々な.....個人攻撃をする批評家たちもいた

シュムエル・ロズナーが書くように、カーターを批判したのは「ほぼ全員がユダヤ人だった」が、前段落のヨッシ・ベイリンの引用が明らかにしているように、ユダヤ人全員が前大統領に批判的だったわけではない。"The Carter Trap," *Ha'aretz*, January 15, 2007を参照のこと。カーターに対する非ユダヤ人のまったく異なる反応については、以下を参照のこと。M. J. Rosenberg, "Israel's Increased Isolation," Weekly Opinion Column, Issue #308, Israel Policy Forum, Washington, DC, January 19, 2007.

353～354ページ （フォックスマン、ペレツの発言）

FoxmanはJames Besser, “Jewish Criticism of Carter Intensifies,” *Jewish Week*, December 15, 2006; and Martin Peretz, “Carter’s Legacy,” *The Spine (New Republic weblog)*, November 28, 2006に引用されている。

354ページ （リップスタットの発言）

Deborah Lipstadt, “Jimmy Carter’s Jewish Problem,” *Washington Post*, January 20, 2007.

354ページ （カーターの発言）

“Carter Defends Book on Israel Conflict,” *Jerusalem Post*, January 21, 2007.

354ページ 似たようなことは…… “反ユダヤ主義者” と非難した

とりわけ、クラウトハマーはフクヤマの論拠に言及して、「ネオ・コンサーヴァティヴをユダヤ化する新たな手法」だとし、「彼のは、パット・ブキャナンやマレーシアのマハティール・モハマドなどが発展させた議論の原型ではなく、とりわけ米国のネオ・コンサーヴァティヴ（ユダヤ人）はイスラエルの命令を実行しているにすぎないというものだ。イスラエルと、より大きなユダヤの陰謀に仕えて米国の外交政策を乗っ取っているのだ。フクヤマの見解は、より巧妙であるし暗示的でもある」と述べている。著名であるにもかかわらずクラウトハマーは明らかにフクヤマを「巧妙な」反ユダヤ主義者だと仄めかした。書簡のやりとりは、以下を参照のこと。

Francis Fukuyama, “The Neoconservative Moment,” *National Interest* 76 (Summer 2004); Charles Krauthammer, “In Defense of Democratic Realism,” *National Interest* 77 (Fall 2004); Francis Fukuyama, “Letter,” *National Interest* 78 (Winter 2004/05); and Charles Krauthammer, “Letter,” *National Interest* 79 (Spring 2005).

355ページ エリオット・コーエンは……関連付けて報道した

Eliot Cohen, “Yes, It’s Anti-Semitic,” *Washington Post*, April 5, 2006; and Eli Lake, “David Duke Claims to Be Vindicated by a Harvard Dean,” *New York Sun*, March 20, 2006.

355ページ そうした私たちの主張をADLは……と断定した

Anti-Defamation League, “Mearsheimer and Walt’s Anti-Israel Screech: A Relentless Assault in Scholarly Guise,” *ADL Analysis* (online), March 24, 2006; Josef Joffe, “Common Denominator,” *New Republic Online*, April 10, 2006; Benny Morris, “And Now for Some Facts: The Ignorance at the Heart of an Innuendo,” *New Republic*, May 8, 2006; Michael B. Oren, “Quiet Riot: Tinfoil Hats in Harvard Yard,” *New Republic*, April 10, 2006; and Martin Peretz, “Oil and Vinegar: Surveying the Israel Lobby,” *New Republic*, April 10, 2006.

355ページ ウィリアム・クリストルは……反ユダヤ的ではない」と

William Kristol, “Anti-Judaism,” *Wall Street Journal*, September 8, 2006; Ruth R. Wisse, “Israel Lobby,” *Wall Street Journal*, March 22, 2006; and Shmuel Rosner, “Is Carter an Anti-Semite?” *Ha’aretz*, December 21, 2006.

355～356ページ 07年はじめには.....ユダヤ人が加わっていることだ

Alvin H. Rosenfeld, “‘Progressive’ Jewish Thought and the New Anti-Semitism,” American Jewish Committee, December 2006, v, 9から引用した。以下も参照のこと。Patricia Cohen, “Essay Linking Liberal Jews and Anti-Semitism Sparks a Furor,” *New York Times*, January 31, 2007; Larry Cohler-Esses, “Anger over Broadside Aimed at Jewish Leftists,” *Jewish Week*, February 9, 2007; Ben Harris, “Suddenly, Little-Noticed Essay Is Focus of Debate on Israel Criticism,” *JTA.org*, February 7, 2007; Alan Wolfe, “Free Speech, Israel, and Jewish Illiberalism,” *Chronicle Review* (of the *Chronicle of Higher Education*), November 17, 2006; and Gaby Wood, “The New Jewish Question,” *Observer*, February 11, 2007.

356ページ 私たちは連邦議会の.....抹殺されてしまう、と

Michael Lerner, “There Is No New Anti-Semitism,” *Baltimore Chronicle & Sentinel* (online), February 2, 2007.

358ページ 数多くの有名な言論人や.....知的な批判を発表するようになってきた

Kristof, “Talking About Israel”; George Soros, “Of Israel, America, and AIPAC,” *New York Review of Books*, April 12, 2007; and “Diaspora Blues,” *Economist* editorial, January 13, 2007.

358ページ ウィリアム・クリストルでさえも.....カードの価値が下がってしまった

Kristol, “Anti-Judaism.” クリストルの解決策とは、代わりに、私たちをも含めたイスラエルを批判する者を「偏屈」で「反ユダヤ的」だと非難することだ。

【第 巻注釈 了】